

天正十年十二月二十日

一五四

徳永ト後藤トヲ、秀吉ヨリ呼ニ來テ、彌右ノ旨趣ヲ啗ム、此事北庄ニカクレ  
ナカリケレハ、政盛大ニ怒リ、勝豊、秀吉ニ内通疑アラスト云、勝家キイテ、勝  
豊ハ天性律義ナルモノナレハ、全ク他心アルヘカラス、先勝豊ヲ北庄ヘ招  
テ、其實ヲ可索トアリテ、勝豊ヲ招越前、勝豊乃越國ニ可下トアリシトキ、勝  
豊カ家老トモコレヲ留メ、病氣ユヘ不能其儀トアツテ、家老一人サシソヘ、  
誓狀ヲソヘテ遣ス、政盛サレハ、コソ勝豊別心ウタカイナシ、然レハ信孝ヘ  
示シ合セ、瀧川ト約束ノ切テ出ラレ可然ト勸ケル、略上

〔増補筒井家記〕

坤

信孝朝臣ハ、一万餘人ニテ防戦ヒ、守手討死手課數百  
人ニ及、角テハ信孝ノ利運タルヘキカト見ヘシ所ニ、瀧川没落セシカハ、岐  
阜方カヲ落シテ散亂ノ、岐阜一城ニセマリケレハ、始終難抱見ヘケレハ、信  
孝モ快ク討死ヲ究ラレシ所ニ、筒井順慶舊交ヲ思ヒ、雙方ヘ和ヲ納ラレシ  
カハ、忽和議調、惣勢圍ヲ解テ立去、羽柴方ハ防戦路脈ニ塞ヲ拵ヘ、一勢ニ籠  
居ケリ、順慶父子、十市、越智、箸尾、島、松倉等七千餘人、一ノ要害ヲ築キ、父子一  
所ニ籠レリ、略上

〔日本耶蘇會年報〕〔歐文材料第一號譯文〕

一五八二年、八三年及び八四年の日本通信、

一五八四年一月二日○天正十一年十一月十一日附、長崎發、バードレルイス・フ

ロイスより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

羽柴は十二月に大兵を率ゐて、美濃に向ひて進軍し、岐阜の町の周圍に營  
し、而して若し希望せば、之を陥れ、火を放ちて焼き拂ふことも易々たりき、  
然るに三七は、己の窮狀を認め、自ら屈して憐を請ひ、己を全く羽柴の手に  
委ねたれば、羽柴は、寛容を示して、過去の事を赦したり、されど其母と娘及  
び家中の最も大切なる人々を人質となしたり、而して此勝利を收めて、都  
に引還したり、

〔附録〕

〔大雲山誌稿〕

十九日 日 黃 事 故 略 鈔

(天正十年)

十二月、七石五斗八升五合功澤和尚依、俵以

衆評各ヘハイブシ、參百文羽柴筑前殿指懸一具、濃州エ御陣ノ音信、二百  
文奏者増田仁右衛門方、五百文織田熊介殿指懸一具、濃州御陣ノ時、壹貫  
百文溝杭公用トノ納有、月行事壽清、

毛利輝元、安藝坂村祇園社ヲ造營ス、

天正十年十二月二十日

一五五

順慶和陸  
ヲ周旋ス  
トノ説

秀吉岐阜  
城ヲ包圍  
ス

信孝ノ母  
ト其女ト  
ヲ人質ニ  
取ル

龍安寺ヨ  
リ秀吉ヘ  
ノ音物



天正十年十二月二十日

〔毛利氏考證論斷〕

二十四 十二月廿日、

考證

聖天中 大梵天王 護持大檀主從五位下行右馬頭大江朝臣輝元 代官坂式部大輔元貞調之、

奉<sub>テ</sub>上<sub>ニ</sub>膏<sub>ニ</sub>棟<sub>ニ</sub>坂<sub>ニ</sub>村<sub>ニ</sub>祇<sub>ニ</sub>蘭<sub>ニ</sub>社<sub>ニ</sub>頭<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>宇<sub>ニ</sub> 天正十年<sub>壬午</sub>極<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>廿<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>敬<sub>ニ</sub>白<sub>ニ</sub> 導師岩屋寺少僧都秀遍

哀愍業生者 帝釋天王 家門安寧武運長久當所安穩諸人快樂而已、大工佐伯源左衛門尉元定

○輝元元織房ヲシテ、神護寺ヲ安堵セシムルコト及ビ宮内六郎ヲシテ、周防吉敷郡八幡社領ヲ安堵セシムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔毛利氏考證論斷〕

二十四 十二月廿日、

考證 熊毛郡鹽田村神護寺什書

石城山大權現別當神護寺之事、宥覺爲手次、對元織被讓渡之旨、不可有相違之條、全令知行、御祭祈念、并社頭修理已下、無緩可被遂其節者也、仍一行如件、

天正拾年十二月廿日

元織房

輝元御判

神護寺



菅原公孫御覺書 于曾吉川元光氏所藏

原寸

縦 〇・二七  
横 〇・四六

元

一重書 年

一播半 年

一馬部 山 沙 油 部

多 後 氏 部 年

山

年 山 部 年

年 山 部 年

小鯖庄  
八幡免

〔萩藩閱録遺漏〕

表 = 宮内六郎殿

佐波郡二切畑村百姓半左衛門

防州吉敷郡小鯖庄之内、八幡免拾石  
○毛判小鯖氏四代實社錄書考證論斷所收山口  
之事、市川伊豆守渡邊石見守并父任讓狀之旨、對其方遣置之條、社役等遂



吉川元春自筆覺書

子爵吉川元光氏所藏

元

一重書

一播軍

一弓部

弓部

弓

弓部

弓部

原寸

縦〇・二七五  
横〇・四六三

八小

防州

防州

防州吉敷郡小幡庄之内八幡免拾石

之事市川伊豆守渡邊石見守任父任裏伏之旨封其方置置之矣社受等



吉川元春自筆覺書 子爵吉川元光氏所藏

原寸 縦〇・二七五 横〇・四六三

一重書之事

小鯖庄  
八幡免

〔萩藩閥録遺漏〕

佐波郡切畑村百姓半左衛門

表二 宮内六郎殿

防州吉敷郡小鯖庄之内、八幡免拾石〇毛利氏四代實錄考證論斷所收山口  
作之事、市川伊豆守、渡邊石見守、并父任讓狀之旨、對其方遣置之條、社役等遂  
其節、奉公肝要候、仍一行如件、

天正十

十二月廿二日

輝元御判

毛利輝元ノ將吉川元春、家ヲ長子元長ニ讓ル、

〔吉川家文書〕

藤家吉川正統敍目第十元長公

〔從是讓狀〕

覺

- 一重書之事、
- 一幡竿之事、
- 一弓箭方御油斷有間敷儀肝要之事、
- 以上

天正十年十二月二十日



天正十年十二月二十日

十二月廿日

治部少輔殿參

○本書ハ、元春ノ  
自筆ニカ、ル、

元春(花押)

一五八

元就ヨリ  
傳來ノ旗  
竿

先年輝弘防州亂入之節、爲退治自長持至山口、我等被差上候時、元就様御讓被下候御幡竿竹者從被仰請候、度々元就様被得御勝利候、某給候而以來之儀者、御存知之前候、不能申候、并小幡上り相副申候、小幡者至高野山差上之、阿光坊快音被遊候、御守之儀、是又進置候、彌可爲勝軍候、御大利珍重候、恐々謹言、

十二月廿四日

元春(花押)

〔切封ウハ巻〕

駿河守

元春

〔吉川家譜〕

九

元春公ヨリ、御書ヲ以テ、元長公へ御重書、元就公ヨリ進セラル、御幡竿ヲ讓リ玉フ、二月二十四日附、元長宛、元春書狀ニカ、ル、前掲、

吉川家文  
書ニ同ジ、

〔周防吉川家譜〕

二

元春 是時ニ方リ、秀吉既ニ織田氏ニ代リ、大坂ニ城キ、

元春秀吉  
ヲ屈スル  
ヲ耻ツ

之ニ居ル、元春之ニ屈下スルヲ羞チ、居常鞅々樂マス、此冬、家ヲ治部少輔元長ニ讓レリ、○上下略、本書、コノ記事ヲ天正

二十一日、乙神戶信孝、領地ヲ鷺巢小兵衛ニ給ス、

〔張州雜志抄〕

二十七 古文書四  
神子服部 左源太 夫藏

爲扶助五百貫文宛行、全可領知者也、仍如件、

天正十年

十二月廿一日

信孝

鷺巢小兵衛とのへ

神戶信孝、美濃崇福寺ノ諸役ヲ免除シ、陣取、放火、竹木ノ伐採等ヲ禁ズ、

〔崇福寺文書〕

○美濃

當寺之事、付門前、上様爲御墓所之上者、不混自餘諸役并非分之課役、付陣取、放火、竹木伐採事、令停止訖、若違亂之輩、速可成敗也、

天正拾年

十二月廿一日

信孝(花押)

崇福寺

天正十年十二月二十一日

一五九

崇福寺ハ  
信長ノ墓  
所



天正十年十二月二十二日

一六〇

○信長ノ側室小倉氏崇福寺ニ信長、信忠父子ノ靈牌ヲ安置スルコト、  
六月六日ノ條ニ見ユ、

二十二日、丙午美濃兼山城主森長可、同國武儀八幡寺ヲシテ、其寺領ヲ安堵  
セシム、

〔八幡神社文書〕濃美

已上

當寺并門前共、如前々不可有異儀之旨、(森長可)勝三被申候條、自兩人以折紙申入候、  
若理不盡之族於在之者、被仰越、急度可申届候、於兩人少も疎略存間敷候、猶  
山彦兵へ申入候、恐々謹言、

各務元晴

天正十

各務清右衛門尉

十二月廿二日

元晴(花押)

細野正次

細野主計

正次(花押)

武義之内

八幡寺

二十三日、丁未島津忠平、弟家久、忠長等ト、八代ノ陣中ニ會シテ、肥後、肥前  
等ノ處置ヲ議シ、遂ニ守兵ヲ留メテ、兵ヲ旋ス、

〔上井覺兼日帳〕七

○日向 一廿三日、於陣内終日御談合也、其衆武庫様、家久、  
(忠平)

忠長、忠棟、經平、伊野州、鎌刑比宮、本刑、拙者也、御談合條數、一肥後國中御行

之事、有馬表之事、阿蘇家進退之事、右三ヶ條也、肥後之事ハ、此度落去之所

不被持を候、如此前隈本通ニ御番衆被召置候而可然候由定候、今度之

御出勢之儀ハ、○有馬出勢ノコトヲ指ス、有馬鎮貴、島津氏ノ來援ヲ請フ

五日ノ條及ビ本月十從境目到來次第ニ追々ニ諸勢輕々と打立候、御分國

中陣取其外働なとさへ、於鹿ニ御細談被成、其上被達上聞、又ハ御鬮なと

申被成、種々被入御精事候、然處今度ハ他國ト申、殊更遠方之儀候ニ、與風

之御出勢ニ而候間、直ニ御陣取と中々成間敷候、鹿ニ而能々御談合被

成、來春秋之間、調をまして、各御出馬肝要之由出合候也、又安富左兵衛督

事ハ、是非共此方へ被留置候而可然之由相定候也、○中略、忠平、合志親重

擊ヲ延引スベキコトヲ命ズルコト、此晚安富左へ忠平様御寄合被成、

一廿五日志親重、隈部ニ兵ヲ出スコトニカ、ハ、ル、竝ニ本月十一日ノ條ニ收

天正十年十二月二十三日

一六一

阿蘇家進  
退ノコト  
肥後ハ  
前通リ  
本番衆  
ヲ置ク

有馬出勢  
ハ鹿兒島  
ニ上テ評  
スベシ



肥後在陣  
歸國スベ  
シ本ノ番  
限本ノ番  
置ベキ人  
クベシヲ

天正十年十二月二十三日

此晚於忠棟宿、義虎寄合也、其座寄居義虎、拙者鎌刑、伊野州、宮原縫殿助、主居忠棟、本田彌六殿、比宮、本刑也、幸若與拾郎舞と申候而、深更まで御酒宴也、

一廿六日、伊野州宿へ禮申候、御酒也、其後村右宿こ而、上津浦殿より歳暮使書預候、返事兩人同前こ申候也、此日伊野を以、武庫様を寄合中へ被仰候、此節諸口こ御談合折々被成候、無油斷所へ御存知こ而候、併夜白共無緩疎御入魂候、御談合肝要候由也、各忠棟宿こ指揃談合也、其衆忠棟、經平、伊野、上長、鎌刑、本刑、拙者也、深更まで談合也、肥州之事へ先々如此間、御番衆隈本こ被召置、諸勢歸陣こ而、追而於鹿兒嶋一途御評議被相澄、御出勢可然候由相定候、然者此節隈本御番之事、然々衆被居候而可爲肝要候條、義虎御頼被成候而可然由也、并有馬表番衆と大方盛こ而候、又合志を至隈部境一手切之間、是又諸勢歸陣可被成意地、委分仰分候へてこ而候間、御使者可然候由定候、并三舟隈庄に於、此由被仰分候而肝要之由也、  
略、甲斐宗運、誓書ヲ、島津義久ニ致ス、コトニカ、ル、本月十一日ノ條ニ收ム、

一廿七日、伊野、上長、鎌刑、本刑、矢野出食寄合候也、從夫忠棟宿に參候而、夕御

霜野ノ陣  
ヲ撤セン

田尻鑑種  
ノ使來ル

伊諧

談合、武庫様被聞召候、其御返事承候、何ぞ御納得之由也、此日鎌田筑前守、大膳坊兩使、山北へ被指登候、其意趣へ、各直こ霜野御陣取之由候、尤可然候、  
○日比良、改擊ノ衆、霜野ニ陣ス、乍去今度御出勢へ、境目を御左右次第、輕々と各罷立候、然者直こ長陣へ諸軍衆可難成候、爰元之衆へ存候、其方諸卒分別次第之由也、左候へ、御陣不事成候、諸軍衆如隈本歸陣肝要候、并合志へ近日中伊野、長州こ而可被仰分子細候、夫までへ、山北へ各滞留專一候、其左右次第たるへき由也、此晚伊野州宿へ各寄合也、  
(是夜)  
客居圖書頭殿、忠棟、經平、鎌刑、蓑田信濃守、主居中書公、拙者、本刑、亭主也、此座中田尻殿を山く、り到來候、書狀等持來候、書面、肥背御勝利之御祝言、彼城無何事之由也、書狀披見共候而、其後誹諧と種々閑談こ而、深更こ及各歸候、  
一廿八日、忠棟こ而諸番盛と仕候、此晚經平宿へ、忠平公御禮儀候、御めし參候、客居武庫様、家久、拙者、矢野出雲守、主居圖書頭殿、忠棟、亭主也、深更まで御雜話也、諸方角御行等御談合も出合候也、  
○下略、宗運ノ使者來リテ、限部ニ兵ヲ出ヌヲ告グ、ル、コトニカ、ル、本月十一日ノ條ニ收ム、  
一廿九日、○中略、田尻へ遣ス、船ノ條ニ收ム、此日、於拙宿御談合也、其衆忠棟、經

天正十年十二月二十三日



義久ノ使  
ル八代ニ來

有馬鎮貴  
ノ使來ル

八代莊檢  
地

歳暮ノ禮

天正十年十二月二十三日

一六四

平、伊野、上長、鎌刑、本刑也、終日御談合也、諸境目様子出合也、其座中從鹿兒嶋大源坊御使僧として御著候、忠棟、拙者、爰元、長々辛勞仕候、彌諸口之堅慮御頼之由也、次阿多源太、平野新左衛門身上之儀、付蒙仰事共候、阿多源太等、人ヲ殺シテ有馬ニ逃ル見ユ、此晚本刑宿へ忠棟、拙者、其外ト、十一月二十三日ノ條ノ附録ニ見ユ、此略、安富左兵衛督ノ歸談合衆へめし振舞候也、深更まで種々談合也、國ヲ止ムルコトニカハル、  
本月十五日、  
ノ條ニ收ム、

一卅日、從有馬殿歳暮、又ハ彼方就御行之儀、使書預候、返事申候也、此朝愚弟次郎左衛門殿宿こ而めし被振舞候、それ過候て、忠棟宿へ、風呂へ可參候由候間參候、其後彼所こ而御談合也、伊野、上長、拙者也、諸境目儀出合候、難盡禿筆候、此日鎌刑、本刑こ而、武庫様、當庄檢地等させられ候へハ、田數よもおとるへく候、  
候、  
御移之儀難成之由、伊東右衛門佐、宮原伊賀守、忠平之御使こ而候、御返事ハ我々處ハ委承置候、兎角被達上聞候而、御返事可有由也、御談合隙入候間、御一家衆其外こも、使こ而歳暮之御祝言申入候、義虎酒肴被持て、歳暮之御禮承候、拙者留主こ而候、此外諸所之人衆歳暮之祝言承候也、猶々明春諸名倍可書加候也、

○忠平、八代ヲ發スルコト、十一年正月十一日ノ條ニ見ユ、

二十四日、羽柴秀吉、物ヲ織田秀信ニ贈リテ、歳暮ヲ賀ス、

〔碩田叢史〕十四天正文祿慶長文章

目錄

御小袖 十重

白銀 千枚

御樽肴 十荷

以上

十二月廿四日

羽柴筑前守秀吉

右於江州安土、若君、秀吉歳暮之御禮目錄也、

○信孝、秀信ヲ安土ニ移スヲ肯ゼザルコト、十月十八日ノ條ニ、秀信、岐阜ヨリ安土ニ移ルコト、本月二十日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔武家事紀〕

九續集譜傳四

惣見院殿織田信長公

二十三日、秀吉安土ニ趣キ、三法師へ謁シ奉リ、歳暮ノ賀儀ヲ告、衣服銀子ヲ

天正十年十二月二十四日

一六五



獻シ、種々ノ翫器ヲタテマツル、三法師、コレニヨツテ秀吉ニナツキ玉フ、而  
ノ秀吉今度濃州へ相從ノ諸將、并ニ安土在城ノ近臣ニ、衣服、銀子、酒樽ヲ送  
ル、諸將ノ家臣ニイタルマテ衣服ヲ與フ、廿六日、寶寺ニ至テ越年也、  
二十六日、庚辰羽柴秀吉、惟住長秀、池田恆興等、書ヲ神戸、信孝ノ臣伊勢神  
戶城主小島民部少輔ニ與ヘテ、信孝ト北畠信雄トノ和融ヲ報ジ、瀧川一  
益ノ、民部少輔ニ命ジテ、築カシムルトコロノ砦ヲ撤セシム、

〔小嶋文書〕○行山辰四郎氏所藏

三介殿様三七殿様御間之儀、御無事相澄申候條、其御心得尤候、然者其方へ  
瀧左取出被申付由候、右之通候條、早々可被引拂与、瀧左へ直ニ申遣候間、被  
得其意、其方儀も鐵炮一ツ被放間敷候、爲其申候、恐々謹言、

羽筑

十二月廿六日

秀吉(花押)

惟五郎左

長秀(花押)

池勝

秀吉一益  
砦ヲ撤  
ニキ  
スベ  
通知ス

恆興(花押)

(民部少輔)  
小嶋殿 御宿所

二十七日、辛亥權大納言柳原淳光ヲ罷メ、權中納言勸修寺晴豊ヲ權大納言  
ニ任ズ、

〔公卿補任〕 五十

權大納言正二位藤淳光、四十二十二月廿七日辭、

從二位藤晴豊、三十九十二月廿七日任、

羽柴秀吉、來春正月再ビ北伊勢及ビ岐阜ニ兵ヲ動カサントシ、諸將ニ命  
ジテ、豫メ之ニ備ヘシム、

〔碩田叢史〕十四天正文祿慶長文章

來正月、北伊勢并岐阜表ニ令出馬之條、隨遠近十五日ノ廿日之間、江、碓草  
津邊ニ至而著陣可有候、泊之不差合様ニ尤候、彼地ニおいて手合を定、可亂  
入之條、可被得其意者也、仍廻狀如件、

天正十年十二月廿七日

筑前守秀吉宛名

○秀吉、諸將ヲ安土ニ會シ、兵ヲ率キテ伊勢ニ入ルコト、十一年二月九

天正十年十二月二十七日

一六七

十五  
日ヨ  
リ二  
十日  
間ニ  
著陣  
スベ  
シ



天正十年十二月二十七日

日ノ條ニ見ユ、

北畠信雄、豐受大神宮正遷宮ノ用材流木ヲ隱懸スルコトヲ禁ジ、併セテ用材運搬ノ諸役ヲ免除ス、

〔京都帝國大學所藏文書〕松木文書一

伊勢正遷宮御材木之事、來春河並在々所々可流出候、若取散者於在之者、可爲曲事候、并諸役可相除之者也、仍如件、

天正拾年

十二月廿七日

信雄判

外宮

長官殿

同神主中

北條氏政、伊豆本覺寺ニ於ケル狼藉ヲ禁ズ、

〔本覺寺文書〕伊豆

掟

右於當寺、横合非分狼藉等、假初こも申懸者有之者、速可有披露旨被仰出者

板部岡江  
雪

也、仍如件、

北條氏、應

天正十年

十二月廿七日

板部岡江  
江雪 奉之

下田

本覺寺

北條氏政ノ弟武藏八王子城主北條氏照、前遠江犬居城主天野宮内右衛門尉ニ、堪忍分ヲ給ス、又宮谷衆ニ命ジ、多摩郡村山ニ移住シテ、開墾ニ從ハシム、

〔天野文書〕後〇備

當表へ被相移候、仍爲堪忍分森下分進置候、可有知行候、此度出馬火急之間、先爲住居進本意之間、堪忍之義者追而可申合候、恐々謹言、

天正十年壬午

十二月廿七日

氏照(花押)

天野宮内右衛門尉殿

〔武州文書〕

十比企村百姓彌八藏

天正十年十二月二十七日

天野宮内  
右衛門尉  
甲斐ヨリ  
武藏ニ移



宮谷衆武  
藏ニ移ル

不入ニ定  
ム  
他所へ移  
ラバ召返  
スベシ

天正十年十二月二十八日

一七〇

此度當表へ相移□然者住所之儀、村山之内立川分被定置候、荒野之地候間、知行開次第其者こ被下置候、早々彼地へ罷移、可令居住候、御出陣御留守□者、玉川内こ者、他所之衆不被指置候、早々被任置候地へ罷移、宿被立、諸不入こ被定置候間、心易可令住居候、萬一他所へ罷移候付而者、何方へ罷移候共、可被召返候、不入之地へ相移、心易可令住居候、猶存分達就有之者、被納御馬上、可申上旨被仰出候也、仍如件、

壬午  
北條氏

朱印 十二月廿七日

宮谷衆中

小坂新兵衛殿

二十八日、壬午德川家康ノ臣井伊直政、奥山彌十郎ニ領地ヲ給ス、

〔奥山文書〕〇越

奥山彌十郎方へ高參拾七貫文出置所實正也、をのくゝあまふ半取之はもりこ、俵物可相渡也、仍如件、

天正十年

半取

十二月廿八日

井兵黒印

袖田忠兵衛との〇本書ハ、直政ノ自筆ニカ、ル、

〔侍從様 御自筆〕

二十九日、丑近江日野城主蒲生賦秀、郷氏日野町ノ條規ヲ定ム、

〔日野町立尋常高等小學校所藏文書〕江〇近

蒲生飛騨守殿當町に御免御證文之寫

定條々

- 一 當町爲樂賣、樂買上者、諸座諸役一切不可有之事、
- 一 諸商人并往還旅人之輩、馬付下當町可相留之、附寄宿之義可爲荷主次第事、
- 一 土山甲津畑南北之海道一切相留之、當町へ可通、萬一直通者有之、可申付事、
- 一 押賣、押買、宿之押借已下、國質、所質一切令停止事、
- 一 當町に出入候者、最寄者、雖如何様之出入有之、理不盡之催促付沙汰不可有之、但居住已後者、依申様之躰子細可糺明事、

天正十年十二月二十九日

一七一

井伊直政  
ノ自筆

樂賣  
樂買  
馬付下  
寄宿

通路

國質  
所質  
催促  
付沙汰



失火  
盜品  
借家人下  
家主  
咎人  
吳服物  
加地子  
公事役  
德政

天正十年十二月是月

一七二

一 火事於付火者、家主不可有其科、至自火者、依時之躰可有輕重事、  
一 盜物賣買之儀、買主不知者不可有其科、但盜人於引付者、以本錢可買返事、  
一 喧嘩、口論、曲事之儀、於歷然者、可爲其身罪科、借家其科不可懸之、借家之者雖爲咎人、家主不可有其科事、  
一 領中在々所々吳服物堅令停止畢、於無承引輩者、荷物等可押取事、  
一 當町地子加地子共不可有之事、  
一 雖當町出候、從先規之公事役者可有之、町出非分之役義不可申付、但爲其主之用所等之儀、可爲如先々之事、  
一 天下一同之雖爲德政、於當町者、不可有棄破之事、  
右之通堅定上者、不可有異儀、萬一違犯之輩有之者、可處嚴科者也、仍而如件、  
天正拾稔

十二月廿九日

忠三郎 御在判

是月、羽柴秀吉、惟住長秀連署ノ禁制ヲ、近江河毛、美濃末森等ニ下ス、

〔谷田神社文書〕江○近

禁制

〔東濃并郡〕〔寺内方〕○一字又ハ二字、抹  
河毛 削七ル跟跡アリ、

一 當手軍勢甲乙人等亂妨狼藉事、  
一 伐採竹木事、  
一 放火事、

右條々、堅令停止訖、若於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年十二月日

〔長秀〕  
五郎左衛門尉〔花押〕

〔秀吉〕  
筑前 守〔花押〕

〔粟嶋神社文書〕江○近

〔朱卷〕  
一原書榜札前半面毀失

右條々、堅令停止訖、若於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年十二月日

五郎左衛門尉〔花押〕

筑前 守〔花押〕

〔諸國高札〕三本願寺兼帶所  
井末寺高札之寫

美濃國安八郡末守村性顯寺高札之寫

禁制

末森村

一 當手軍勢亂妨狼藉之事、  
一 放火之事、

天正十年十二月是月

一七三



天正十年十二月是月

一七四

一 對地下人非分、申掛事、

右條々、堅令停止畢、若違犯之輩有之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、  
天正十年十二月日 筑前 守在判

〔岐阜縣續古文書類纂〕

條制之部

丹羽五郎左衛門外一名條制

厚見郡東島村

所有養教寺

江口寺

禁制

濃州江口寺內

一 當手軍勢亂妨狼藉之事、

一 伐採竹木事、

一 放火事、付陣取事、

右條々、堅令停止訖、若於違犯之族者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年十二月日

五郎左衛門(花押)

筑前 守(花押)

〔諸國高札〕

并末寺高札之寫

美濃國厚見郡下川手村正福寺高札之寫

河手寺

禁制

濃州河手寺內

一 當手軍勢亂妨狼藉之事、

一 對地下人非分申懸事、

一 放火之事、

右條々、堅令停止訖、若違犯之族者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年十二月日

五郎左衛門在判

筑前 守在判

〔山田文書〕

濃○美

禁制

〔正木郷九〕寺內

一 當手軍勢亂妨狼藉之事、

一 放火之事、

一 對地下人非分申懸事、

右條々、堅令停止畢、若違犯之輩有之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年十二月日

筑前 守(花押)

五郎左衛門尉(花押)

〔諸國高札〕

并末寺高札之寫

美濃國厚見郡本庄村千手堂善福寺高札

天正十年十二月是月

一七五



天正十年十二月是月

一七六

千手寺

之寫  
禁制

濃州千手堂寺内

- 一當手軍勢亂妨狼藉之事、
- 一伐採竹木事、
- 一放火事、

右條々、堅令停止訖若於違犯之族者、速可處嚴科者也、仍而下知如件、

天正十年十二月日

筑前守在判

羽柴次、秀勝禁制ヲ美濃立政寺ニ下ス、

〔立政寺文書〕濃○美

立政寺

禁制

立政寺

- 一當手軍勢甲乙人濫妨狼藉事、
- 一陣取放火之方□□事、
- 一剪採竹木事、

右之條々、堅令停止畢若於違犯之輩者、忽可處罪科者也、仍下知如件、

天正十年十二月日

次(花押)

北畠信雄、美濃立政寺ニ禁制ヲ下ス、

〔立政寺文書〕濃○美

西莊

禁制

(新美郡)  
西莊  
立政寺

- 一軍勢甲乙人濫妨狼藉事、
- 一陣取放火事、
- 一伐採竹木事、

右條々、令停止候訖若違犯之族有之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年十二月日

(北畠信雄)  
(花押)

〔正福寺文書〕濃○美

福藏坊

禁制

下河手□城寺内  
福藏坊

- 一軍勢甲乙人濫妨狼藉事、
- 一陣取放火事、
- 一伐採竹木事、

○此處磨消シテ讀ミ難シ、諸國高札ニハ、右條々、堅令停止訖若違背族速可處嚴科者也、仍下知如件トアリ、署名磨滅ス、諸國高札ニハ、書判ニト

天正十年十二月日

天正十年十二月是月

一七七



天正十年十二月是月

一七八

下印食

〔諸國高札〕

三井末 本願寺兼帶所 寫

尾州印食村川野專光寺高札之寫

ナセズト雖モ、恐クハ北畠信雄、依リテ、姑クハ收ム、

禁制

一軍勢甲乙人濫妨狼藉事、

一放火事、

一伐採竹木事、

右條々、堅令停止訖、若違犯輩忽可處嚴科者也、仍下知如件

天正拾年十二月日

在判

美濃國六條村河野善超寺高札之寫

西光坊

禁制

東六條郷 西光坊

一軍勢甲乙人濫妨狼藉事、

一猥伐採竹木事、

一放火事、

右條々、堅令停止之訖、若違犯之族有之者、速可處嚴科者也、仍下知如件

天正十年十二月日

神戸信孝、美濃善皆坊、尾張專光坊等ニ禁制ヲ下ス、

〔岐阜縣續古文書類纂〕

四條制之部

織田信孝條制

羽栗郡神置村 所有明通寺

本庄郷

禁制

上門間本庄郷

一軍勢亂妨狼藉事、

一放火事、

一伐採竹木事、

一殺生事、

一諸役免許事、

右條々、堅令停止候訖、若違犯之族有之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年

午十二月日

信孝花押

善皆坊

〔諸國高札〕

三井末 本願寺兼帶所 寫

尾州印食村川野專光寺高札之寫

專光坊

禁制

下印食 專光坊

天正十年十二月是月

一七九



天正十年十二月是月

一八〇

一 甲乙人濫妨狼藉之事、

一 伐採山林竹木事、附陣取放火之事、

一 諸公事課役之事、

右條々於違亂之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年十二月日

織田三七郎在判

神戸信孝、山岡三大夫及ビ數原傳助ニ領地ヲ給ス、

〔高臺寺文書〕

〇一山城

爲扶助七百貫文宛行了、全可領知候也、

天正十年

十二月 日

信孝

黑印

劍〇平天文、一

山岡三大夫殿

〔大久保文書〕

〇下

爲扶助五百貫文宛行了、全可領知候也、

天正十年十二月日

信孝

黑印

劍〇平天文、一

數原傳介殿

信濃青柳城主青柳賴長、皇大神宮ニ御領ヲ寄進シ奉ル、

〔伊勢古文書集〕

〇二上 青柳伊勢守殿願書

奉寄進

伊勢大神宮於ト田地掘金與三兵衛分拾貫文、本町之彦六分拾貫文、合而

貳十貫文永代之所也、

右意趣者、武運長久、息災延命、子孫繁榮、軍陣勝利、怨敵退散、知行重々、家風豊

饒、心中所求、如意満足之御祈念、奉憑外無他、仍精誠之旨如件、

天正拾年 午壬

青柳伊勢守

極月吉日

藤原賴長(花押)

宇治七郎右衛門尉殿

〇賴長、コノ後マタ神領ヲ寄セ奉ル、コト、十一年正月十六日ノ條ニ見

ユ、

陸奥三春城主田村清顯、同國福聚寺ノ條規ヲ定ム、

〔松藩搜古〕

〇二 田村清顯福聚寺掟狀

掟

天正十年十二月是月

一八一



天正十年十二月是月

一八二

一向後入寺之者、依子細被差置候とも、門外へ不出、以自堪忍可被差置候、若御跡御造作候(ハ、脱カ)可及追放事、

一寺中不行義之者被差置間敷事、

一於御門前惡名之者候ハ、(難題)老父如一筆可及所判事、

○天正十年 壬午十二月吉

清顯(花押)

福聚寺へ進獻

○田村隆顯、福聚寺ノ條規ヲ定ムルコト、弘治三年四月是月ノ條ニ見ユ、

伊達輝宗、北條氏政、氏直父子ニ好ヲ通ズ、

〔伊達山性治家記録〕

四

十二月癸丑、大相州ノ北條殿氏政、氏直父子へ御使

差進セラシ、遠藤山城(兼信)ヨリ北條陸奥守氏照へ、書狀ヲ以テ、北條殿當家向後

彌別シテ可被仰合ノ由、御内意申通ス、此年六月、前右大臣信長公御生害以

後、明智日向守光秀伏誅ストイヘトモ、上方騷動諸國共ニ不靜、故ニ北條殿

ト前々御懇切ノ因ヲ以テ、以後ノ義御隔意ナク、互ニ仰合サルヘキ事ヲ謀

リ給ヘルナリ、

遠藤基信

隔意ナク  
互ニ相談  
スベシ

(天正十年)此年、公(殿)嗣君御陣所小齋ニ於テ御越年アリヤ、又米澤へ歸城シ給フヤ不知、

○北條氏照、氏政父子ノ意ヲ受ケテ、輝宗ニ答書シ、其好ヲ謝スルコト、十一年二月十三日ノ條ニ見ユ、

天正十年十二月是月

一八三



是冬、徳川家康、菅沼定政ニ、甲斐巨摩郡ノ地ヲ與フ、

〔寛永諸家系圖傳〕二十

土岐定政菅沼藤藏山城守後鈞命 同十年、大權

現甲州入とまひ、武田滅亡の後、北條氏直又甲州出張して、對陳數日、つ

ゐし和睦也、今年の冬、定政先領の采地をあらと絶て、甲州切石一萬、

石此地をまふ、寛政重修諸家譜土岐定政譜異事ナシ

美濃兼山城主森長可、神戸信孝ニ背キ、信孝ノ老臣齋藤利堯ヲ、加治田城

ニ攻メテ、之ヲ拔ク、尋デ、東美濃ノ諸城、多ク長可ニ屬ス、

〔森氏軍記〕可成

森三左衛門殿、同武藏守殿様子書上申事

一 信長公御他界ノ後、天下ノ主も究不申候て、三七殿ヲ御主分ニ被成、岐阜

ニ御座候、其時三七殿へ御不足之儀御座候て、俄ニ思召立、岐阜ヲ御退被

成候時、美作守殿ハ御幼少にて、御名を御千殿と申候、人質ニ岐阜ニ御座

候ヲ、拙者保長兵衛入道ニ連候て參候へと被仰、金山へ御越候、其跡ニお千殿ヲ盗出シ、

頓而參著仕候、扱三七殿へ色ヲ御立、初ニハ御相分限ノ肥田玄蕃と申仁、

よあると申所ニ居城仕候を、俄ニ稠取懸ケ被成候ニ付、井土次兵へと申

者、肥田妹聲ニテ御座候、又日比武藏守殿別而被懸御目候へ懸付、肥田

長可信孝  
ニ不足ア  
リテ岐阜  
ヲ退ク

長可肥田  
玄蕃ヲ米  
田ニ攻ム

齋藤利堯  
ト戦フ

長沼藤兵  
衛ヲ斬ル

長可人質  
ヲ信孝ニ  
納ル

秀吉遠江  
駿河ヲ與  
フルヲ約  
シテ長可  
ヲ誘フ

義命を御助被下候様こと、恠言申上候て、御免被成候て、則其者知行御手

こ入、一倍御分限ニ被爲成候事、

一 濃州梶田ノ城主齋藤玄蕃利堯と申者、武藏守殿三人懸ケノ大名人持にて候

ヲ、度々御取懸被成、せり合御座候處ニ、終ニ被得勝利、不夫剩玄蕃同前之

長沼藤兵へヲ被爲討候、其外部上之兩遠藤共取合御座候て、終ニハ旗下

ニ被成候、又馬ケ鼻之城、曾原あどこても、せり合御座候て、御手柄共も多

御座候、此外にも、度々ノ義ニ御座候へ共、右如申上候久敷義、老罷寄、老亡

ノ事ニ候へハ、失念仕候、

〔森家系譜〕磨

森武藏守長可

一 同年冬、未天下御主を不定故、北畠三七信孝様、美濃之國岐阜之城ニ御座

候故、先當分御千様、并森宗兵衛可政之後對、姉爲人質被遣置候へハ、彌信

孝様も、頼こし思召候由被仰候處、信孝、信雄兩所共ニ御不足之族有之處

ニ、秀吉公ハ、尾藤甚右衛門を以、御入魂被成度と被仰越、遠州、駿州兩國可

被進、曾而相違不有と、上包仕とる誓詞御越候故、御家老衆悉被召上、御評

議有之時、各一同ニ、秀吉公へ御味被成御尤奉存由申上候、長可様被仰候

天正十年是冬



長可遠ニ  
同心セズ

林長兵衛  
人質ヲ盜  
ム  
近江櫓

秀吉ニ一  
味ス

森可政長  
可ヲ怨ム

天正十年是冬

一八六

ハ、御千を如何せんとの御意也、其時長田又左衛門、長可様御捨候へと被申上、長可様御意、先年三左衛門殿御討死、引續蘭丸様を始、三人迄本能寺生害ス、依之御母公日々被仰出、御目之乾事なし、孝之道、其上予骨肉、御千を除テ外あし、秀吉公と一味して、縦何程立身有と云共、壹人之弟捨殺さは、母公へ不孝と云、更難心得とて、御同心無之處、林長兵衛爲忠進出申上候ハ、私何とぞ仕、御千様を盗出し見可申と申上、此ら其方何とぞ相計ひ申様こと、重而被仰渡處、同國大垣之城主、池田勝三郎信輝、勝入、夜こ入忍ひ、土倉四郎兵衛貞利を、右之御相談、差越候故、今明日ハ土倉滯留候へ、岐阜之首尾共聞届度と被仰渡、扱林長兵衛岐阜へ罷越、御千様ハ近江櫓に御座候を、長兵衛才覺して、彼櫓之窓子を引えあし、お千様を飛せしめ給ふ、下こハ大ふとんをむろ待請ル、お千様因茲無別儀、加茂郡兼山下同シ金山へ御歸府被成候、其故秀吉公ハ、御一味御同心之返事有て、右之旨、土倉へも被仰渡候へハ、池田父子も、彌秀吉へ御一味也、然處森宗兵衛姉お鍋、是もお千様と一所こ人質に御座候を、長可様ハ可政へ此事無相談、岐阜へ林氏被遣候事を可政御聞付、馬こ打乗、中間壹人召連、唯壹騎岐

可政秀吉  
ノ麾下ニ  
屬ス

米田ヲ奪  
取ス

加治田ヲ  
攻ム

稻葉一鐵  
遠藤慶隆  
等ヲ降ス

阜へ乗付、密に内通を入、お鍋を計出し、馬に打乗を、尻馬にお鍋を乗、小中間繩に而鞍之跡輪こまつりと結付、汗馬に鞭を添、無事故歸給ひ、夫ハ長可様へ段々不足有て、秀吉幕下こ成給ひ、

依之小牧合戦之節、三好秀次御手ニ加リ、高名有之、其後朝鮮征伐之時、丹後國田邊城主木下幸相秀雄卿幕下ニ加リ、釜山海之城乗取、高名有、其已後慶長五年九月十五日、於大垣表首尾合せ給ふ、お鍋ハ森淡路可信母也ト云

一秀吉公へ御一味御同心に付、爲手合信孝卿御旗下之よあ、山番之城主肥田玄蕃、知行三居城へ、不意に取懸、本丸へ押込乗取、既に玄蕃を討取んとせる所、井戸治兵衛、肥田、只一騎乗付、長可様へ様々肥田に命之儀御侘言申上候故、井戸二年久被懸御目候間、無是非玄蕃に命御助、知行ハ悉く御手こ入給ふ、首數雜兵共こ百計討取、秀吉公へ持せ被進候へハ、様々御懇之御返禮也、

一同十年極月、翌年二月始迄、信孝卿御旗本濃州梶田之城主齋藤玄蕃允ハ、長可様三人にけ之大身、まろ人數持也、度々野合之迫合有之候へ共、長可様終こ不失勝利、剩齋藤一味之城持長沼藤治兵衛、玄蕃同前之者也、と申者御撃取、其上一郡之城主稻葉伊豫守、義通、後郡上兩遠藤大隅守胤

天正十年是冬

一八七



金森長近  
等モ旗  
下ノ説

天正十年是冬

一八八

基、左馬助慶隆舍弟牛鼻之城主曾原ちとよても、迫合有之、終に御幕下こ被成候、金森法印長近、五郎八、關小十郎右衛門殿尤齋藤玄蕃、此外近國之城主度々御攻付、とゞ、何れも御旗下こ屬ス、稻葉伊豫守御旗下こ成候而、早々金山へ入來之處、長可様不斜御喜こ而、三汁十菜餘り御料理出し給ふ、其時稻葉本膳を自取而次立、一汁三菜こ而被給候、林新右衛門通安、各務清右衛門元正二人被申候へ、長可様御若ク御座候間、各能々被相心得候へ、御大名之事候へ、御料理之いとひ、無之候得共、此度濃州之面々御旗下こ被成候へ、追々御見廻可被申候、其時金山へ山中こ而候へ、折節肴無之時へ、何程こ思召候而、ケ様之料理へ難被成可有之候、然時、稻葉始而伺公申時分之御料理と、緩々參候客來之時分と相違候得者、長可様御爲如何こ存候、ケ様こ御旗本こ罷成候へ、御爲と存候、此已後誰人被參候と、一汁三菜之外へ、堅御馳走被成間敷候と、各務、林へ被仰聞候、扱右之衆中之外も、此比御旗下こ被成給ふ城持衆數多有之候得共、其假名覺す候、長可様天正十二年廿七歳之春迄之儀也、

〔森家先代實録〕

○四 播磨 長可君

森蘭丸ノ  
葬儀

信孝ノ屬  
將肥田玄  
蕃ヲ加茂  
山ニ攻ム

一天正十年六月廿二日、蘭丸君坊丸君力丸君三十七日佛事の節ト金山城西伊崎津村こ於、伊木津村千本藏蘭丸君乃葬禮有之、阿伽七佛事の弔有り、夫こ付、隣郷より往來船數十艘、今渡の川岸ここそり寄、見物するもの多し、町中へハ半切桶へ水ヲ入、小路へ置へしと觸渡し、家中不殘白裝束よて、武者押の如馬ヲ率せ、弓鐵槍丸長柄こ至迄、行列ヲ備へ、城より棺乃供し出ル、大龍山英嚴坐、光和尚引導也、其日、近郷の民見物よ來、群集ス、兼、徒目付歩士足輕ヲ、民の如クこ作あし、見苦敷衣類ヲ著、見物船こ一所こ居、然處佛事も半よて、棺よ火か、と、葬禮供の諸士一同よ起りて川舟こ乗んとすれ、兼、巧し事なれ、作り置たる足輕共、各船ヲさし寄、乗後レるもの、彼半切こ乗て、鑓ヲ棹とあし、太田の渡ヲ向へ越し、三七殿へ色ヲ立初、相分限の肥田玄蕃知行三千居城可茂山米田へ俄こ押寄、無二無三こ攻寄ル、城中こハ今日程敵寄へしとハ思ひ寄す、夢よも不知所へ、雲霞の如ク俄こ攻入され、寢耳こ水の入たる如ク、周章ぬとめく處ヲ、當家の人數鑓追取て、爰ヲせんと攻入、突伏突伏せる故、何うハ以テたまるべ、城主玄蕃亮、今ハこふと見へし處こ、井戸

天正十年是冬

一八九



長可  
信孝  
將下ノ  
平定  
諸

齋藤  
利莞  
味方ニ  
屬ス

遠山友忠  
ニヲ  
攻ム  
苗木城

治兵衛肥田妹御、○森家系常々武州君御懇ありしうへ、急こ馳付、是非々々玄蕃亮う命御助ケ被下候へと、達テ申こ付赦免也、然といへ共首數百餘討取、秀吉公へ被差上、御味方の切懸こ被成、首被進候へ、さほく御懇の御返事也、則玄蕃う領地御手こ入、一倍の分限こ成給ふ、  
一天正十一（十年年九）癸未年御歳廿六、冬、翌申二月迄、信孝卿旗下の歴々大身城主ヲ、片とし押付手下こ被成候、濃州梶田關より東行程一里、城主齋藤玄蕃ハ、武州君三人懸の大身人數持故、肥田玄蕃加茂山落去後ハ、彼ヲ頼居るヲ、野合の合戦こ度々御せり付、剩齋藤一味の長沼藤次兵衛う城ヲ攻落、長沼ヲ討取、首四百六十餘討取給ふこ付、齋藤も終こ辟易して、味方こ屬す、其外（加茂郡）關より東、一里半、の城主齋藤新五郎、同國郡上山城主稻葉義通、子息左京進貞通、東郡の兩遠藤大隅守胤基、小原ノ城主新兵衛胤縁、犬地の城主六郎左衛門盛、飛州高山ノ城主金森五郎八長近、牛ヶ鼻の城主曾原、此等不殘旗下こ成、苗木（武野郡）の城主遠山久兵衛ハ、舊惡遺恨依有之、不致不屬こ付、討果されんとて、大手へ大塚次右衛門ヲ大將として、搦手へハ、林長兵衛大將よて、數百騎被差向、此苗木の城ハ、三方壁岩岨々として、馬の通路難叶、前ハ

遠山友忠  
館林ニ  
浪人トナル

奥村又八  
郎  
長谷川五郎左衛門

若丸元昌  
郎  
妻木喜十郎

土岐三河  
守ヲ誘殺ス

木曾川の流よて、要害第一の城地也、城中よりも、千原川迄出向防戦し々れ共、金山勢の多勢故、急流ヲ物の數共せず打渡し、無二無三こ押懸る、城兵ハ小勢不叶して、散々こ落行、首數百餘討取、勝鬨ヲ舉、苗木の城ヲハ、林長兵衛ヲ被差置、遠山ニ關東館林へ浪人也、其後慶長年中、家康公より、苗木の城ヲ再遠山久兵衛拜領スと云、  
一同國大森城主奥村又八郎、上惠戸城主長谷川五郎左衛門兩人共、武州君信州ハ御歸後、終こ使者ヲも不差越候間、踏潰んとく、林長兵衛、各務勘ヶ由、可兒勝六、同藤藏、野呂助左衛門等、先陣被仰付、武州君御出陣被成し處、奥村又八郎不叶して城ヲ開退候故、翌日直こ上惠戸へ押寄、攻合有之候所、長谷川防戦不叶致討死候、  
同國根本（可兒郡）の領主若丸入道元昌ハ、各務兵庫、林長兵衛兩人へ便りて、旗下こ屬せん事ヲ申こ付、許容し給ふ、妻木ノ城主妻木喜十郎ハ、林新右衛門こ便り旗下こ成也、  
一濃州の諸將音問ヲ通じ親ミ、或ハ旗下こ屬せんと、便りヲ求め申るハ、（可兒郡）久々利の城主土岐三河守初ノ名、大力強勇の持也、（可兒郡）己う武威よ慢

天正十年是冬



し、終に使者不差越候間、何卒打亡ンと思召々れ共、三河守ハ強勇の大將  
 ゆへ、無左右難被討亡、兎角計策ヲ以容易と討果んとて、武州君より以使  
 者、被仰談旨有之由、謀寄せ給ふ、兼山記に、此節土岐あやしみ不參故、  
 千丸君にこしらしへ被遣候、招こ應し參候處、饗應已と畢て、三河守歸々  
 故、土岐心とけ來りしと云、れハ、金山の搦手松ヶ洞口迄、家老五六輩見送り、式禮有之、馬に乗ンとす  
 る處ヲ、加木屋宇右衛門兼山記に、戸ハ、先年三河守と祖父ヲ討レ、宿意  
 田勘左衛門ヲ含居々れき、一番懸く三河守ヲ後より切懸る、戸田勘左衛門も同前  
 と懸る、流石強勇を望し三河守ヲ、兩人よて安々と討留也、土岐ウ家來共  
 之ヲ見テ、一度と拔連切懸りたる處ヲ、兼而用意の伏兵起立て戰々れハ、  
 皆々敗走ス、兼而より三河守討留候ハ、直こ久々利の城へ馳寄乗取る  
 衆との計略、豊前市之丞、戸田勘左衛門、汲田九郎、渡部越中等と、三百騎被  
 差添被仰付置けきハ、即時と右の軍勢久々利の城へ押寄る、城内より不  
 思寄急變あれき、是へき様もあく、我一と落失たる故、事故あく城ヲ乗取  
 ける、此節三河守所持したる鶴の丸の寶劍、武州君の御手こ入、其後久々  
 利の城ヲ、關小十郎右衛門と被遣、關家の居城と相成、嶋野の城と名ヲ改

久々利城ヲ奪取ス

平井頼母

遠山友忠

秀吉友忠  
長可ニ屬  
友忠聽カ

家康ニ屬

也、○本條ノコト、兼山記大抵同ジ

一天正十一癸未年御歳春、濃州高山城主平井頼母ハ、大熊新右衛門、佐中五

兵衛と便り降ラ乞こより、城ヲ開退キ、下屋敷に居住すはあらハ、前科ヲ  
 も差免可申と返答被仰遣候處、仰こ隨ひ、高山城差上こ付、大熊新右衛門、  
 佐中五兵衛兩人檢使こ而、城受取相濟和義調、高山城ハ林新右衛門と被  
 下候、○長可、秀吉ニ屬スルコト、森家傳記及ビ兼山記大抵同ジ、大

〔寛政重修諸家譜〕

七百八

遠山友忠

久兵衛

飯場の城に住し、のち彼城を

男女信に譲り、友忠は美濃國阿手羅の城に居す、父友勝死するのち、男女  
 政とともに苗木の城にうつり住す、貞享の呈譜に、苗木久天正十一年、豊臣  
 大閣、森武藏守長一可下同ジが麾下に屬すべきむね命ありといへども、友忠父子肯  
 はざりしかば、長一、下人幸田某をして苗木の城を攻しむ、友忠父子、半途に  
 出迎へこれを討、幸田が勢ことしく敗北す、これにより、長一みづから軍  
 を率ゐて、彼城を圍むといへども、父子かたく守るにより、長一つゐに引退  
 く、のち和睦して城を長一に渡し、遠江國濱松に至りて、東照宮にしたがひ  
 奉りしかば、菅沼小大膳定利に屬せらる、妻は右大臣信長の姪、



齋藤長龍  
加治田城  
預ク利堯ニ

長可ノ兵  
牛ケ鼻ヲ  
攻メ敗ル

〔參考〕

〔美濃明細記〕

古戰場

天正十年八月兼山加治田取合ノ事

加治田城ハ、齋藤新五郎居ラレケルカ、遠國へ信長ノ供シテ、加治田ノ留主  
ハ伯父玄蕃ニ領ケ置ケリ、然ルニ京都ニテ、信長生害ノ聞へアレハ、兼山鳥  
ケ峰城主森勝藏長一、加治田ヲ攻トラントテ、小山ノ取手へ人數ヲ出スト、  
齋藤方牛カ鼻ノ留主ヨリ註進ス、因茲天正十年午ノ八月下旬、加治田ノ者  
頭湯淺新六、西村二郎兵衛、小關甚助、大島茂兵衛、佐藤勘右衛門、梅邑左平治、  
其外弓鐵炮ノ者雜兵五十人餘、夜中ニ潜ニ忍テ牛ケ鼻ニ楯籠ル、兼山勢ハ  
角トハシラス、牛ケ鼻ニハ、尋常ノ小勢ト下墨アナトリ、難所トモ云ス、夜討  
シタリケル、味方カクト心得タルコトナレハ、ツマリノノ難處へ敵ヲヨヒ  
キ入、スハ時分ヨシト云程コソアレ、楯籠ル者頭ノ面々、名乗カケケ、関ヲ  
作テ、弓鐵炮ヲ打カケケ、二度ニドツトヲメイテ蒐タリケレハ、敵案ニ相  
違シテ、途ニ逐ヒ、岩陰へコソ落、或ハ同士討シ、或ハ討レ、散々ニヲクレヲ取、  
數十人手負テ、漸ニ小山へ引返ス、加治田勢モ相引ニ勝鬨舉テ飯陣セリ、然  
トイヘ、森勝藏牛ケ鼻ヲ捨テ、堂洞ノ古城アトへ蒐上、透ヲ見テ、加治田城

利堯ノ軍  
備

長可ノ攻  
撃

へ押寄ンスル氣色ナリシカハ、玄蕃古老ニ軍議ヲ遂、西大手口へハ、陽淺新  
六、西村二郎兵衛、佐藤勘右衛門、白江庄左衛門等ヲ向ラレ、東清水土手際へ  
ハ、小關甚助、大島茂兵衛、梅村左平治、横井兵助、清水瀧ノ關へハ、多賀善八、吉  
田彌宗、田ノ洞ノ小屋場へハ、田野七郎左衛門、大野治兵衛、小屋洞へ小屋庄  
藏、益田左兵衛、北山ノ難處へ新藏司、絹丸藤助、米取場へ洞田新兵衛、清水九  
兵衛、ガウカ洞ノ峰へ井口兵右衛門、下川部彌右衛門、二注寺東ノ櫓ニ長沼  
三徳入道、同嫡子藤治兵衛、大手口ノ矢倉門ニハ、直井太郎右衛門、近藤五右  
衛門、西ノ矢倉ニ林權右衛門、森田九郎右衛門、大將玄蕃ニ隨フ人々ニハ、井戸  
宇右衛門、龜井喜平治、關源助、同久兵衛、市橋助右衛門、石原權内、坂本門八、平  
野甚八、渡邊源七、岡村善三郎、都合十騎、其外弓鐵炮ノ足輕頭一騎ニ廿八人  
宛、外五人ヲ添、自馬ヲ出サレ、雜兵二百六十ヲ從へ、町内ノ藪カケニ備ヘラ  
ル、其餘百六十八人ヲ、長沼藤治兵衛ヲ大將トシテ、渡瀨ノ上ノ方ニ備へ、尤  
川向へ渡テ備ヘント議セラレシカトモ、兼山ノ敵勢間進ニ見ユレハ、川ノ  
淺深ヲ知レシトテ、長沼爰ニ扣タリ、去程ニ、敵ノ大將森勝藏四方ノ堅メヲ  
物見シテ、東西南北口々ヲハ、井捨惣人數ヲ一手ニ成、大手口ノ渡瀨へ用捨



モナク押カケタリ、是ヲ見テ、四方ノ味方蒐附ルニ、遅々タル其間、添島ニ狼煙ヲ上タレハ、兼山勢川水ヲタメラハス、ヒタヒタト打入、渡瀬ヲ何ノ苦モナク乗上レハ、其時長沼狸々皮ノ具足羽織ヲ著シテ、采幣ヲツ取、爰ヲ先途ト下知シケル、殘ル五騎ノ者頭モ、百餘人數ヲ一隊ニナシテ、火花ヲ散ラシ防キ戰ト云ヘ、ヒ競ヒ掛ツタル兼山勢、獅子奮迅ノ勢ニ蒐立ラレテ、覺覺ヘリ添島マデ引退タ處ニ、藪藪陰ヨリ大將玄蕃者頭十騎ト、兵卒二百餘ヲ卒ヒ、敵ノ横合ニ突懸ル、ソノトキ追手門橋ヨリ、直井太郎ト名乗テ斬テ出ルヲ見テ、兼山勢ノ中ヨリ、眞屋新助ト名乗カケ、押双テムズト組テ、兩馬ガ間ニ墮ト落ル、新助、太郎ヲ押ヘテカ、ノントシケレ、ヒ側ナル岩ニ打物ツカヘテ斬サル處ニ、東西ノ櫓ヨリ、城ヲ乗トラレシト、弓鐵炮雨アラレノ如ク、射カケ討カケ、狼煙天ニツラヌケハ、北方ノ味方是ヲ見テ、西大手ヨリ湯淺新六、西村二郎兵衛、佐藤勘右衛門、白江庄左衛門、東口ヨリ小關長助、トトアリ、甚大島茂兵衛、梅村左平治、横井兵助、北裏ノ手ヨリ多賀喜八、トトアリ、善吉田彌宗、トトアリ、トトアリ、七郎左衛門、大野次兵衛、トトアリ、小屋庄藏、益田庄兵衛、トトアリ、藤助、新兵衛、九兵衛、井口兵右衛門、下川部彌右衛門、近藤五右

長可收退ス

長沼藤治兵衛ノ戦死

衛門、戸田孫右衛門、村瀬亦兵衛、林權右衛門、井戸宗右衛門、トトアリ、龜井喜平治、關源助、市橋助右衛門等者頭、狼煙ヲ見テ、東西南北所々ノ組々堅メヲ捨テ、我劣レシト、裏山ツタヒ上々屋敷ヲ乗越ハネコヘ、大門ヲ開ヒテ、雜兵七百餘人、名乗カケ、兼山勢ヲ中ニ包テ斬テ蒐ル、流石眞屋モ直井ヲ捨テ、自手負ト見ヘテ、下人ニ負レ、漸ニ引退ク、龍虎トイサミシ敵ノ大將森勝藏モ、加治田勢ニ蒐タテラレ、渡瀬ノ陳口危ク見ヘシ處ニ、落合藤右衛門ト名乗テ引返シ、味方ノ宇右衛門ト組テ落、落合カ首ヲ取、其間ニ漸々ト大將森勝藏引退キ玉フ、眞屋新助下部ニ負レ、道ハカ行ザリシカハ、白江追詰テ新助カ首ヲ取、兼山ノ一備二津守トトアリ、東ノ櫓ヲ乘取ント攻ケルヲ、長沼藤治兵衛進ンテ下知ヲ成シケルカ、敵ノ打蒐ル鐵炮ニ命ヲ落セリ、然レ櫓ハ老父三德堅固ニ持コタヘケル、諸方ノ味方一致ニ追討シケル、首數五十一、其中ニ名アル武士ハ、眞屋新助、落合藤右衛門計也、味方ニモ長沼藤治兵衛討死シテ、其外雜兵モ四十人討死ス、軍終高名批判有テ、大將玄蕃ヨリ感狀ヲ賜リ、直井太郎右衛門ニ國光ノ脇差ヲ賜リ、井戸宇右衛門ニ國次ノ刀、白江庄左衛門ニ行光ノ刀ヲ玉ル、



長龍ハ本  
能寺變ニ  
死ス

利薨病死  
ス

長龍ノ二  
子秀信ニ  
仕フ

長沼三徳

加治田長  
沼黨

右軍評議 軍ノ始ハ兼山ノ勝、士大將長沼藤治兵衛、軍ノ終ハ加治田ノ勝、兼山ノ侍眞屋新助、落合藤右衛門二人ノ首ハ取レズ、加治田城主齋藤新五郎ハ、信長御父子京都ニテ生害ノ時討死故、伯父玄蕃加治田ヲ堅メ、新五郎家名ヲ繼ント思ハルレト、秀信幼少諸國大亂ノ節ナレハ、相續ノ願モ見合サレシカ、玄蕃亦病死ナリシカハ、自然ト家絶ス、家中ノ諸士モ大半兼山ヘ隨身ス、中ニモ長沼入道三徳ハ、數代家老職ナレハ、岐阜ヘ便リ、漸百石程ノ地ヲ浪人分ノ扶助捨堀添ニ屋敷ヲカマヘ居タリケル、齋藤新五郎嫡子新五郎、二男市左衛門兩人ト、岐阜秀信ニ仕ヘ、慶長五年八月廿三日、兄弟トニ池田輝政勢ト渡リ合テ、互ニ名乗テ疵ヲ被リ相引ス、岐阜落城ノ時忍落テ、關ニテ保養シテ、後池田家ニ屬シ、子孫備前、因幡兩家ニアリ、長沼三徳八十餘歳ナリシカ、秀信ヨリ慶長五年ノ軍ニ呼出サレ、生前ノ面目也、宿所ニ老死セン、口惜カルヘキニ、戰死センコトヲ悦テ、肌ニ經帷子、甲ノ上ニ經頭巾、具足羽アリニモ、經文ヲ書寫シ、袖口ニ猿毛皮ニテ幅輪取テ著儘ニ、白茸毛ノ馬ニ打乗テ、七曲ニ馳テ尋常ニ討死シテ、名ヲ後代ニ殘セリ、其子孫今ニ加治田長沼黨是也、

是歲、羽柴秀吉、近江朝妻城主新庄直賴ヲ山城山崎城ニ封ジ、三萬石ヲ知行セシム、

〔極祕録〕

扱直賴ヲ妻を向ヘ、男子誕生、新庄新三郎直定ト云々、其後

三好一族悉ク亡ク、織田信長公ノ武威ウダヤナリ、元龜ノ頃、新庄直賴次第

ニ富貴ニ成、加州利家ノ二男前田（坂下向シ）鍛冶ノ娘をむウヘ室とせり、天正十年六

月二日、明智日向守光秀、信長公を弑シ奉る、秀吉公、明智を亡シ給ヒ、京都も

おとやうニ成々、新庄直賴ハ、鍛冶を賴ク、秀吉公ヘ被召出々レハ、弟形部

左衛門直忠、嫡子新三郎直定を召シテ、秀吉公御前近く召シ、父直昌ハ、義輝

公ヘ軍忠を盡せしものかれハとて、懇ノ御意有、當座ノ兵糧米とて、三百俵

を給リ々、直賴國ヘ歸ク、母上ノ物語シ、大ニ悦アヘリ、其頃伊原山ノ所々

ノ殘黨集リ、諸人ノ兵糧等を奪故、秀吉ノ命を請ク、新庄直賴弟直忠、嫡子直

を大將として、五千餘騎を相添ク、差向ラる、賊徒を悉ク打亡セ故、御感有ク、

軍功ノ賞として、直賴父子ノ所領三萬石被下、攝州山崎（山崎）ノ城を給リ々、同

刑部左衛門直忠（直忠）ハ、江州淺井郡蒲生郡、勢州安濃郡を被下、（山崎）上

〔寛政重修諸家譜〕二百 新庄直賴（新三郎） 天文七年、近江國（山崎）生る、はし

新庄直忠  
ハ近江ノ  
地ヲ與ヘ  
ラル

新庄直賴  
秀吉ニ仕  
フ



め朝妻城み住し、のち豊臣太閤みせうへ、攝津國山崎城みうつり住し、此ち志せし、城地を轉して、同國高槻城に住せ、

○直頼、山崎ニ封ゼラル、コト、年月未ダ詳ナラズ、恐クハ十一年以後ナルベケレドモ、今極祕録ニ依リテ、姑ク茲ニ掲グ、

德川家康、三河竹谷城主松平清宗ヲシテ、本領ヲ其子家清ニ讓ラシメ、別ニ二千貫ノ地ヲ與ヘテ、駿河興國寺城ニ居ラシム、

〔寛永諸家系圖傳〕

五

松平清宗

備後守

卷のち仰をかうぬりて、子家

松平清宗  
五ノ頭  
力ノ五  
與ノ十  
人ノト  
ナス

清は本領の地をゆつり、參州竹谷に住せしむ、清宗を逐り、二千貫の地をたまはりて、與力五十人のうしらとなりて、駿州興國寺にさしをり、尾州長久手合戦のとれ、清宗同しく子家清をとるに、小田原勢をふせぐんうため、興國寺に居せ、○上下略、清宗、黒駒ニ北條氏ノ兵ト戰フコト、及ビ小田

平清宗譜  
異事ナシ

家清家康  
ノ妹ヲ娶ル

家清玄蕃頭子

○天正九年、大權現御妹をめあてせ、御諱の字をたまはれ、

〔寛政重修諸家譜〕

二十

松平家清玄蕃頭

十年、父が讓りを受けて、竹谷

を領す、上略

年末雜載

天文、氣象、災異、

〔多聞院日記〕

二十九

正月七日、

一去三日ノ夜、金剛山大宿以下悉燒失了、近年以外繁昌、盛者必衰云々、

金剛山大  
宿火災

三月九日、

一昨夜、大霰後夜ノ過ニ下當山光物飛去云々、如何心細者也、

大霰  
光物

十二日、昨夜大雨下、風吹、先段方々光物飛、心細々々、又日中時分ニ大霰大風了、

了、

廿八日、

一大雨大風、處々破損了、

一當年當山ノアセホノ花一向不咲、此花能咲ハ、西收滿熟ト申傳、六道ノ通

アセホノ  
花咲カズ

ニハ、北ノ方ニ只一本ニソト花付了、心細々々、但舊冬節替ノ雨寒雪、正月

十五日ノ月ノ入様ハ、無比類草木也ト、各百姓申、如何々々、

五月五日、大雨下、去廿九日ヨリ打續降雨、滿作珍重々々、從日中止、

八月十四日、堯舜房來、蓮抄一返讀了、昨夜大風雨少下、無破損程ノ事ハ者也、







万	万	万	万	万	万	万	万
三	三	三	三	三	三	三	三
種	種	種	種	種	種	種	種
大	大	大	大	大	大	大	大
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
歡	歡	歡	歡	歡	歡	歡	歡
喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜
天	天	天	天	天	天	天	天
小	小	小	小	小	小	小	小
呪	呪	呪	呪	呪	呪	呪	呪
千	千	千	千	千	千	千	千
返	返	返	返	返	返	返	返

三種大祓

大聖歡喜天小呪

般若心經

消除疫病經

藥師如來小呪

慈救呪

右意趣者、奉祈天下泰平、國土安穩、殊寶祚延長、家中息災、無病快樂、五穀豐饒、成就急急如律令、

春日社

天正十年正月廿九日

敬白

〔兼見卿記〕

四

三月三日、辛酉、兩社神事如常、筑前國怡士郡高祖大菩薩之

筑前高祖  
大菩薩祠  
官伊勢參  
宮伊勢參  
吉田神道  
五ヶ條ノ  
相傳

春日社神  
人

薪能

筒井順慶  
社參  
金剛座ニ  
素人多ク  
入込ム

今井座

祠官、參宮之次來令一禮、次五ヶ條相傳、遣一通、對面、委注別番、鈴鹿兵庫助  
取次之、青銅四百疋、令所望予字之間、遣和之字、號源大夫和守、次之字譜代  
云々、略

〔多聞院日記〕

〇二十九

正月廿九日、

一昨日神人金五郎ニ荒神ノ御百度申付候、フセ二升二合遣之、

二月六日、

一薪能可在之由之處、于今猿樂不來、鞍懸ヲ直了、

八日、風寒、談義了、薪能及暮始之、

十日、

一備衛子共召具來了、社頭ニテ能如形在之、

十一日、社參了、順慶社參了、於社頭寶生代能在之、

十二日、金剛大夫昨日來、雨下、能無之、又座ノ衆ニシラウト數多在之間、金春、

寶生兩座不可立合候旨、申事在之云々、幽贊丁聞ニ出了、

十三日、

一安居米ノ内字多ノ澤領ノ内今井座、御神供米十石、請乞七石上者、ノコリ



金春寶生  
ハ素人ト  
立合フコ  
トヲ拒ム

無沙汰候間、幸瀧川(地利)三郎兵衛之内ミツカノ新ト云人悉皆ノ處、今度薪ニ  
上間、則大乘院殿へ馳走人候間、宗喜遣、ユエン三延持、催促事申談了、檜數  
主水へ可申究之通也、

十四日、於門金剛一座ニテ、能五番在之、シラウト大勢召具候故ニ、不可立合  
由異儀申、金春、寶生方ハ引退了、曲事ノ、前々シラウト京堺衆來シ事、連  
綿也、

十五日、幽贊丁聞了、於社頭金剛能在之、見物了、老松、紅葉カリ、(龍野)ユヤ、松山鏡、以  
上見物了、雨氣之間早歸、

五月朔日、雨下、順慶社參了、專識坊因明初門(マ)クス十丁遣之、

八月十七日、

一昨日、中東神主死了、奥田神主ニ成、其息權神主ニ成、正眞院ノ大膳介新權  
ニ成云々、略

十一月廿五日、

一社參了、天氣快然、願主人越智玄蕃、散在檜原内衆葛上、布施、中村、長川、多人  
數事々敷見事也云々、十新來宿了、

越智玄蕃

能衣裳

廿六日、頭坊へハ不出、裝束兩座共ニトンス、モアカキ、一向ヲカシ、袴アヤ、京  
ニテヲル、一段見事也、笛キンラン、赤地、コ下アヤウキモン、笛ノ笠二、一門  
ヨリ御沙汰云々、近來ノケツコウ事盡了、既窪城子、東ノ山田子、共ニ成身  
院弟子也、御幣役春學房、順音房、交名善舜房、陽教房、四打ノ前ヨリ及暮大  
雨下、クキノキノ南ノワキニテ、酒施行引之、

廿七日、先夜御出ノ間計雨止、前後夜明迄雨下、日中以前雨氣不下、日中後天  
氣快然、甲乙人群集事々敷、勿論々々、訴訟モナク、七ツ前ニ濟了、

廿八日、社參、八幡迄參了、歸ニ順慶法印後日能之出仕、見物驚目了、天氣快然、  
諸事無爲成就了、猿樂金春、寶生代ニテ無形々々、

十二月廿一日、

一越智ハ、峰寺ヨリ内衆へ過分ノ禮ヲ以、可生害通造意、六人ノ内、一人裏歸、  
則五人令生害、無殊儀、今度願主ノ利生ト思歟、今日祝參トテ、越智玄蕃當  
社へ參了、

玄蕃社參

順慶後日  
能ニ出仕

薪藝能

〔蓮成院記錄〕二月、

一自八日薪藝能、金春并ホウシヤウ兩座代以南大門勤仕之畢、三番在之、



金春  
寶生

一 同日、於社頭、金春能其□了、  
一 十一日、於社頭、寶生能其□了、日中已後社參、次ニ三番見物畢、以上五番在之、昨日金春仕、今日者金剛理運之所歟、剩觀世番日兩座超越シテ、寶生勤役、珍敷事也、金剛番次第ヲカ、セ、有造意仕立歟、不審也、然者順慶上内々訴訟申如此、自然金春所行由御遊也、

金剛ハ近  
年勤仕セ

一 十二日、今度薪藝能儀付、先月半比猿樂方へ被相尋候儀、金春太夫遠國逗留之間、座衆分与而者難調由言上之間、金剛近年不罷出付被召出、薪可相勤旨、可申遣事如何之由、自衆中□送之間、於學侶モ、同心旨返條在之、依之

金剛ヲ召  
出ス

衆中種々馳走而金剛可罷出旨、慥ニ被申付候處、于今座衆不相調、漸之間罷上由也、則南大門へ端々出仕申處、金剛座衆各一向シラウト衆之間、金春并寶生座不可立合旨訴訟也、若寺門衆中於無御許容者、彼兩座ハ致退出、可致越訴旨言上之由、衆中ヨリ□送之間、當時剋於東室邊學侶集會在之、謹言趣者、シラウト衆罷出事□也、□川五六、或ハクレ松其數多在之、但奈良町人等ハ一向不可叶、前々ヨリモ無許可、然者先例在之上者、兩座申事不理、訴訟旨被申付候儀、先年信長殿御代原備へ御下知而、薪□座共

學侶集會

先年素人  
ノ參加禁  
止ヲ原田  
直政ニ訴  
フ直政反  
對ス

ニ可罷出由被申付候刻、シラウト衆不可叶旨、原備へ申理、猿樂衆堅於法之間、更以不肖寺命之由言上也、然共原備ハ一旦之事、寺門并衆中ニハ、私於法一向無存知曲事由、可被申付、若於無同心者、金剛二季神事、後々年儀モ隨分可致馳走旨、能被相究、其通可被加下知旨、承仕兩人以、衆中邊へ返條被申送畢、

金剛勤仕

十三日、雨下之間薪能止畢、□五番在之、

金春寶生  
ハ勤仕セ

一 十四日、南大門薪能金剛一座而勤仕畢、□金春、ホウシヤウ不致出仕、從順慶、松權□上□種々雖被相唱之、兩座無承引、金剛ハ被召上、前角ニ種々相理候間、今日能之事、可致其□旨被申付畢、

一 十五日、蓮花院講問出仕了、日中已後社參畢、於社頭金剛能仕畢、五番在之、六月、

流鏑馬

一 朔日、辰貝□ニ專當六人、并流鏑馬使官光來ル、對屋へ呼入、硯折紙□之、則杉原廿枚、瓦硯、墨筆副之出之、則散在願主人之交名、并專當衆交名注進之、其特別會重衣□ニテ、客殿中門之通へ出、内ニ著座ス、上下著椽ニ□候、專當衆六人、中門へ左右ニ出、次第ニ禮儀在之、右之交名□ノ□ニ



入テ、上之一反披見、程闕字アリ、上下著ヲ召メ、兼而認置下文七通、以下一行半箱  
 □ニ入テ持來リ、別會前ニ置之、此ヲ見分テ、四通分專當方へ渡之、令頂戴  
 中門へ出ツ、サテ盃ヲ□五ト入銚子提ニテ、ヒヤ酒一反盃トヲリ、肴ハ麩  
 相ニ鉢ニ二種ハカリ用意、次第酒一反トヲリ畢、退出也、別會モ次□移  
 リテ、流鏑馬使官カ□光ヲ召テ、宛文三通、□箱□ニ入テ出ス、□見分テ渡之、令  
 頂戴退出了、

河南莊  
 猪名莊  
 大住莊  
 鯨江莊

攝津國美住同シ 同國美主 山城國堂達 近江國堂達  
 河南莊 猪名莊 大住莊 鯨江莊  
 播磨國 近江國 近江國  
 吉殿 安吉 犬上以上三ヶ所官光

以上七通宛文用意、

宛文云、

興福寺別會所下 攝津國河南莊、

可早勤仕春日若宮御祭禮流鏑馬役事、

右件流鏑馬役者、嚴重神事、巡役有限、殊存尋常專守先例、以來九月十七日  
 卯刻、於南大門取見參、可令勤仕之狀、依衆徒僉議、下知如件、敢勿違失カ□以下、

天正十年六月朔日

流鏑馬役

豎紙

願主人

別會五師大法師 判

余如斯一枚ニ書之、一枚立紙四通、中□三通、仕丁渡之畢、

一流鏑馬願主人次第

- 一 二騎 平田 乾脇 散在二ヶ
- 一 長川 長谷川 散在二ヶ
- 一 二ヶ 平田 葛上 散在二ヶ
- 一 長川 長谷川 散在二ヶ
- 一 三ヶ 長川 散在二ヶ

長川、長谷川、平田ハ隔年、葛上、乾脇ハ五ヶ年、散在ハ毎年也、

十一月、  
 一願主人方へ書狀三通、流鏑馬使官光へ同渡了、當年ハ平田、葛上、散カ□在也、

一廿六日、早旦打入在之、其次第如□庭之酒肴□庭四方被出之、行粧見事也、未明ニ

能六番之内四番目ニ雨下、中門エ被引移畢、番數切次□ヲ祝言ニテ相濟

了、官符頭人夜宮參被其□了、大雨ニ成リテ、終日以外大雨也、頭坊ヨリ歸

リ直ニ社參了、

願主人以下差笠ソ相ニ（張カ）□ル故ニヤ、笠ノ骨ト紙トヘタノニナリテ、一

越智

二一一

能

天正十年雜載



本モ用ニ不立見苦敷有様也、越智殿ハ願主□トテ、反錢以下過分ニ被收納、諸式略儀ソ相ニ□□不可然由、人々申合畢、

一廿七日、頭屋方松下へ出仕如堂、成身院ヨリ西へ被出、山寺道ヨリ大鳥居之中ヲ通り、御旅所へ參詣也、此時□頭ハ一人モ不立行、□衆仕丁衆御□之伴衆直垂著御、□兩人頭人其外寺僧衆三十人ハカリ、其□與力衆以下御旅所□□松下へスチカキニ出仕也、カヘリモ山寺道へ下向了、順慶モ腰刀小者ニモタセラレテサシ給ハス、今日ハ天氣快然、然共昨日大雨ニ足本以外シルシ、

一馬場歸ノ飯□三膳マテ在之、菜九 三ツ、引モノ一 菓子打□キ

田樂

頭人

本座

新座

田樂頭人

本座

筒井順慶

(彌カ) 三十四歳、兩額、湯舜房法印、

新座頭代

南井坊英印、春音房權大僧都、

本座方

交名

新座方

交名

田樂裝束

笛水干キンラン 平鈍子

京ニテフラセラル、指貫綾ノ織物

願主人

願主人

平田 布施 中村 葛上 檜原ヨリ仕立又吉散在、越智 玄番頭人願主加留方、

一當年祭禮式日執行無爲無事珍重々々、以頭屋官符順慶願主人越智玄番頭旁以相應之事也、別會初任無異儀相調、祝著至也、

一同廿八日、後日能如先規在之、自官符頭坊如堂、ヤスマ□井在其□罷出畢、別會被召出、順慶盃ヲ給者也、一段御機嫌ニテ、被成祝著旨也、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲八十七 賀茂社

於貴布禰社可被行御神樂日時、

今月十四日己巳 時戌、

廿二日丁丑 時戌、

天正十年九月五日

正五位下(土御門)安倍朝臣久脩

〔八坂神社記錄〕

祇園社記雜纂第六

祇園社かたはやの御神樂、社家様御とくふんの事、了盛伊藤殿御あつかいによつて、神樂一つに拾文つゝに、永代御さためなされ候、かたしけなく存

天正十年雜載

二二三

貴布禰社  
神樂

祇園社  
家神樂得



候出來料足御くまにあかり候なみに進上可申候、若此方として右にちか  
い申候は、御存分に可被仰付候、仍請文之狀如件、

天正拾年

おやゝ判

助三郎判

九月十七日

新介判

與二郎判

與介判

甚七郎判

源介判

新四郎判

三介判

與一判

惣二郎判

おかめ判

山本大藏殿 參

〔大宮司家古文書〕

勢○伊

下

可早任先例、員數致催濟、令勤仕神役、尾張國伊福部保、當年壬午分定萱米等事、  
右任先例、員數致催濟、可令勤仕神役之狀如件、在保宜承知、敢勿違失、故以下、

天正十年十月十三日

大司（金殿之）大中臣朝臣 判

此分下狀志々め遣候て可然候歟、

伊福部保  
神宮萱米

天野社上  
遷宮

〔高野山舊記〕

天野神主方へ惣分方遣候書狀并院宣等之寫

尙々、十四日こ上遷宮可仕候、

來十四日吉日にて候間、上遷宮可仕候間、其御意尤こ存候、入申物兼、而可承  
候、猶委敷宣徳様方へ申遣候、恐惶謹言、

六月十三日

文殊院書判

天野神主殿 人々中

同下遷宮

尙々、近日自此方、以吉日可申越候、何ヶ入用之儀注文申上可給候、以上、  
好便之條一筆令啓上候、仍而近日御社上葺之儀共候、然者下せんく以吉日  
御沙汰可被成由、自惣分可申入由被申候間、態以同宿可申候之處、自明花院  
不苦候之由意得申間、乍恐令啓候、御分別候而、下せんくの様躰、明日よも御  
注文候而可賜候、奉待候、猶期面上之時候、恐々謹言、

惣分一藤坊

天正拾年エムツマノ九月五日

勢雄

天野神主殿 御宿所

勢雄



尙々、當月廿日以前に吉日之事、奉頼令存候、已上、御社下遷宮之事、吉日次第に御方へ可申入由、雖令申候、此方日取仕候人、無之候間、其方より而吉日被御覽候、而可賜候、恐惶謹言、

沙汰所

天正十年

沙汰所一藁坊

九月十日

勢雄印判

一丸殿 貴覽

先度御意旨、以集儀令披露候、仰尤候條、諸祝言彼是前後共、米十石、料足十貫文、

右此通可渡進候旨、被成評定候、不能御存分候、當山之儀も萬方造作共之儀候之條、被成御勘忍、神慮之儀候間、如先例、執行可被申候、上遷宮吉日者十九日、相定候、被成其意召、可有御沙汰候、恐々謹言、

勢譽

惣分沙汰所

九月十一日

勢譽印判

天野神主殿 御中

社家方 拜殿方 院主 惣分

態以沙汰申入候、仍下遷宮未進候儀付而、上遷宮可被相延之旨被仰上候、則衆議相付、其披露申候、無餘儀候、然共既吉日明後日候間、其せんさく可仕事難成候、其段者、宮遷霜月よて候間、連々相届尋候、可被申付候間、急度上遷宮御用意無御油斷可有候、就中先度之三十石三十貫之通者、社家方、拜殿方、何も宮勤之衆、惣悉合テ可祝儀之由、以印判申候處、拜殿方御をいたう之談合無之由、如何様事と哉、左様之儀も、双方入説候、而可然候、先度之儀このき候衆へ神主殿、兩院主代六ヶの代官衆へ、此方祝言御入候、其外へ悉先度之三十石三十貫之志といあるへき事候、可有其意得候、今日沙汰代著下候處へ、前渡之義者、先りまはす、明後日上遷宮延候へ、大事之日限、候間、無其曲事候御油斷候へ、利非、まはす、惣分腹立にて候間、無油斷、目出度明後日遷宮可有之候、於様躰者、此者可申候、恐惶謹言、

惣分沙汰所

九月十七日

勢譽



神主殿  
社家衆

昨日以花一薦令申候所、御存分之様子慥承候、無餘儀(イカガヒ)にて候、雖然此度上遷相延候へ、山上山下祝儀之事、遅々候へ、寺家之存分難計候間、是非被打置、先廿八日ニ上遷被取行候ハ、併御爲も可然義候、未進等之儀者、隨分座中申談、御馳走別有間敷候、并當座之取成之義、先大塔本願申付候、以御入魂、不相延候様ニ、御分別過間敷候、恐々謹言、

惣分沙汰所

勢譽

九月廿六日

天野

神主殿 參御宿所

〔會根文書〕

○磨 上様より(會根)天神へ御さゑん之分  
三石貳斗五升  
貳段五畝

秀吉社領  
會根天  
ヲ寄進  
ス

寺家

同所 壹石三斗  
同所 貳段五畝  
同所 壹段四畝  
同所 四畝  
合拾石者、  
壹石三斗  
三石貳斗五升  
壹石六斗八升  
五斗貳升

伊保莊

そりま伊保庄

寺澤藤右衛門尉

寺澤廣政

廣政(花押)

天正十年八月廿四日

〔毛利氏四代實錄 考證論斷〕

二十 九月十九日

考證 防府天滿宮大宮司武光土佐書出

防府天滿宮公文職之事、任前々手續之旨、全裁判不可有相違之狀如件、

天正十年九月十九日

輝元 御判

武光次郎三郎殿

九月二十四日

考證 德佐村三原八幡宮神主佐伯泉書出(和歌)

天正十年雜載

防府天滿宮公文職



奠奉再興三原八幡宮、一守天以南閣浮提大日本國豐葦原中津州山陽道阿武郡德佐鄉三原八幡宮社頭、往古創立、不知幾星霜、近伐依無乎修造令大破、罹于鬱候之變、偶源賴藤公參籠之砌、及于廢壞見、竊發於願望心、鄉內長者相談、奉請主君之助命、調安礎立柱之祝儀乎、殊以貴賤戮力之儀、故社頭速造畢矣、仍作上棟銘云、堅確廂棟不祝差、牢強柱礎無傾斜、畫鼓冬々億千歲、八价聲謠萬年嘉、皆天正十稔癸未九月念四日、長野左近太夫源籙藤奉行宗源庵住宗富  
大工 水津三郎右衛門藤原吉定  
山根彌六左衛門平繁慶  
承使 山見六郎丸定善  
配川新兵衛尉  
波田想右衛門藤原金久  
大宮司 才記京太夫重房  
山根三郎四郎平重金  
鍛冶工 有馬喜三藤原金久  
由利四郎左衛門  
伊藤善兵衛尉藤原直善  
上領豐前守  
按、長野氏、賴ノ字ヲ名トスルヲ以テ見レハ、吉見家臣ドモ歟、詳ラカナラズ、

〔萩藩閥閱録〕

六十九 信常彌右衛門

山口三社御神事流鏑馬役之儀、俄申付候處、當日致所勤之由、祝著候、猶重而可申聞之候、謹言、

天正十年

十月十四日

輝元 御判

信常太郎兵衛尉殿

〔萩藩閥閱録〕

三十八 市川七右衛門

山口三社御神事等之儀、信常太郎兵衛方ニ申付候處、可然相調之由、被仰越候、委細令承知候、猶從粟掃所可申候、恐々謹言、

天正十年

十月十四日

輝元 御判

市川伊豆守殿

〔千家文書〕

七 出雲

- 一 求院村千家領社家本家之事、
- 一 諸所屋敷等之事、
- 一 御供如前々可致取次事、

天正十年雜載



右如前々、父左近丸任手續、不可有相違之狀如件、

天正十十月十八日

輝元花押

仲源七郎殿

〔千家文書〕

○九 出雲

求院村千家領社家本家分、并諸所屋敷御供取次等之事、  
如前々、任御亡父左近丸手續、不可有相違之通、吉田(御元)分別尤肝要之候、勿論於  
我等聊不可有疎意候、猶市和泉可申候、恐々謹言、

天正十十月廿三日

元春花押

元長花押

仲源七郎殿

〔宇和郡舊記〕

亭 津島殿之事

一上棟八幡宮再興、大日本國豫州路宇和郡津島願主大檀那越智朝臣彌三  
郎通顯、

皇風永扇帝道遐昌、佛日增輝、法輪常天清地寧、國豐家穩、所願圓滿(御元)成皆令  
滿足、家門鎮靜、内外忻慶、子孫繁昌、兵革不起、民物誦歡、如意吉祥、大張般若

伊豫津島  
八幡宮再  
興

新納忠元  
薩摩宇佐  
八幡宮  
大般若經  
ヲ寄進ス

陸奥相殿  
八幡宮奉  
幣役

眞灯、普照魔凡之暗、親嘗總持妙藥、迴埃龍華之春、

定役

岩藤與右衛門尉

公文

西新藏人入道

大施入

大方花山大姉

當職式

曾禰近江入道通之

奉行

上高田善助通宗

勸進施主檀越各々

銀治

久兵衛尉秀久

善左衛門吉長

大工

四郎右衛門尉藤原吉安

小工

新藏人助藤原安家

仁手大工

下總入道秦久次

金細工

式部丞秦久貞

皆天正十年壬午十二月廿三日

當社左衛門大夫宗安

〔後薩藩舊記雜錄〕

十三 忠元 譜中

天正十年壬午六月、忠元寄附大般若經於大口宇佐八幡宮、禱冥福也、凡六百  
卷、自記其事於鰲頭云、

奉寄進薩州牛山總社宇佐八幡宮御寶殿、願主藤氏忠元、天正拾年壬午六

月吉日、

〔相殿八幡神社文書〕

代〇岩

八幡宮御寄進之所、赤柴在家、兩御神事御不うるいのやくよ相付申候、爲後



日之證文如件、

薄越前守

薄次忠

天正十年壬午九月五日

次忠(花押)

大原主鈴殿へ

佛寺、

〔晴豊公記〕

三

正月十七日、雪下、大徳寺ヨリ内參也、禪師號申入られ候ち

やうらう當志ゆ也、うまいの御まゐ一そく一本也、禪師の禮、大さう、かう

そこ、又(怡雲宗也)うんも同前と參也、ほき物一つ御進上也、村井新右衛門ちそう

よて、禪師相調申也、今日是も來候也、うんとん、そい物、ついうささ二ツ出

申也、余上卿、壹石二斗、書出頭中將中山也、同壹石二斗、てんそう使二斗也、

てんそうに一そく(餘)と沈香五兩也、長橋局へも一そく、ちん五兩也、いうん

一そくに千香也、今夜中山さんたいと祇候申候也、

廿日、天晴、今日雜賀(本願寺)ヨリ御使者來候也、八木するうト申者年頭御禮、禁裏へ

十合十荷、代五石ウ銀子參、下間少進法橋御音信として、まゝら五きん、少

進馬大刀進上申也、長橋よて、中ノ間よて一つ被下候、下間あうふ(召)ハ召新

本願寺ノ  
年頭御禮

大徳寺僧  
某禪師號  
勅許  
怡雲參内

下間仲之  
等勤修寺  
晴豊ヲ訪

晴豊仲之  
等ヲ茶湯  
ニ招ク

仲之法印  
ヲ望ム

大せけよも御けさん也、今夜長橋ふあんあいよて御けさんあし、下御

所參也、年頭大しに段子二ほき代銀子壹枚、御音信まゝら五斤、御あちや

へ、もんきたより、まゝと十とせうまん二百疋、大御ちのへまゝと五と、少

しん二百疋、女さうしゆさうしやへ百疋つゝ、少進御方御所様馬太刀代

五百疋、余所よて少進、八木、寺内まゝさ來候、すい物、二こん、むしむき、たい

の物、まきろうよて見參申候、余門跡よりまゝと二と、少進して、音信二まい

まろうも、少しん三貫文、八木百疋、寺内まゝさ綿二也、

廿一日、天晴、雜賀衆茶ノ湯こよひ申候へ共、名所見物申度候由申候間、不及、

廿二日、天晴、下間少進御使罷上候、安土(長)前右府事外氣色能候て罷上候間、法

橋當官也、法印に被成候、て可然候由、余申也、尤候仰也、則申聞也、主事外志

とい也、あれハおもてむき也、とても儀法印ノ由申請度候由、余こおん

まつよて申也、則庭田申候て書狀取、二條御所參候て申入、中山中納言親

綱卿當番也、御談合也、くるしからその申也、余おもてそのふん也、法印あ

しくとさるへき也、二條御所文取候、禁裏申入候、然ハ法眼天正九年十二

月八日日付、頭中將書出、上卿余、法印天正十年正月廿三日也、書出頭中辨

(高里小路亮)



專修寺苑  
眞物ヲ上ル

慶光院周  
養蔘内ス

興正寺佐  
超上洛

也、上卿源大納言也、（鹿田重保）カ、ル、正月二十二日ノルコトニ

廿三日、今日雜賀物共下候也、みやげ給候、遣候也、少進（光世）ハ扇すへ、まゝら、八

木、おひ一とけ、寺内若狭一そく、おひ一とけ、もんせたこ扇、いと物、おうも

んこ扇、北御方おひ一とけ、ハ扇五本、芳春軒扇三本、馬をくりに遣也、

人夫一人、ウカ、ル、こ一ツウリ申候也、（伊勢）○下略、誠仁親王御所御諸ノコト

二月廿七日、雨少降、二條之御所參、伊勢（伊勢寺）一身田より、禁裏へ三合三荷進上、（伊勢）

二つ、親王御方（伊勢）はくしら此桶二つ進上、余こ鯨桶一つ、狗狀十帖、文箱一つ、

入道殿へ鯨桶一つ、まうし卅帖、  
三月十一日、天晴、（慶光院周）伊勢上人むくにん也、内參申、余申次あり、禁裏へむき

合十てう、白うカ、ル、壹まい、みきよ書十てう、御方御所杉原十てう、（伊勢）ウカ、ル、（伊勢）一ま

い、余三種三荷御あちや、二つ二種、下御所申次中山、（伊勢）○下略、信長、甲斐

日ノ條ニ收ム、  
廿五日、天晴、大德寺和尚内參候也、（伊勢）○下

廿九日、天晴、（伊勢）雜賀興正寺此程上洛、うくし候て、今日下向候由、一そく、き

んらん一またのよし直こて給候、  
〔言經卿記〕（三） 正月十六日、乙亥、天晴、

一誓願寺長老、禁中へ當年御禮申入了、於議定所御對面、申次予也、次長橋殿

御見參了、二獻有之、御樽代共有之、先予所へ入來了、二十疋被持了、勸酒了、

二月九日、戊戌、天晴、  
一北村雲光明寺禮ニ來、其子細、北村雲ニ可立寺之處、冷泉地之間、口入之儀

北向被申、昨日相調了、冷泉へ扇子一本、（伊勢）ヒタ三貫文、中殿へ扇子一本、嶋田

與介ニ二十疋等、昨日遣之云々、今日北向ニ扇子一本、二十疋等持來了、無

見參之、令飲酒了、大澤右兵衛大夫口入也、  
二月十四日、癸卯、天晴、

一松林院ヨリ、宗順使ニ來了、淨花院末寺（伊勢）常念寺長老淨花院へ入院云々、

長老弟子新發智春使者ニテ、久不音信トテ、錫兩種被送了、使者ニ勸酒了、  
四月六日、甲午、天晴、  
一阿彌陀寺立行念佛者有之、總州住快養桑門補陀ラクへ渡海也云々、見物

誓願寺長  
老年頭御

光明寺某  
北村雲ニ  
寺ヲ建テ

常念寺長  
老淨花院  
ニ入院ス

阿彌陀寺  
立行念佛  
補陀洛渡  
海



一冷泉へ阿茶丸同道罷向了、次冷同道阿彌陀寺立行見物ニ罷向了、次冷ニテ冷麵有之、

五月十四日、辛未、天霽、

一北向、阿茶丸等、御局宮○冷泉氏、女七同道阿彌陀寺立行念佛見物ニ被行之、

七月一日、丁巳、天晴、

一慈仙寺僧來、熊野山本願案内者也、彼寺新建立之寺也云々、本願錫兩種送了、則令飲盃了、次綸旨渡之、如此、

聽著香衣、宜奉祈寶祚長久者、依

天氣執達如件、

天正十年六月廿九日

左少辨判

慈仙寺空壽上人御房

八月二日、丁亥、

一御局、本願寺息興正院(寺)へ嫁娶之儀、此間中有之、然(安七郎)宮御方へ御イトマノ義申、曇花院殿又休庵ノ申入了、無別儀御同心之間、相拵、申刻ニ下向了、來六日祝言有之云々、小川善大夫、冷ヨリ嶋田與介(與介)、四條ヨリ川端與二郎等

慈仙寺空壽ニ香衣ヲ許サル

興正寺佐超冷泉氏ヲ娶ル

英俊長賢房ヲシテ多聞院ヲ相續セシメトス

蓮華王院燒失ノ雜說アリ

大乘院尋靈借金

相添下向了、十日ニ上洛了、祝言已下雜談、美麗之儀共也、北向へ綿一把被送給了、

〔多聞院日記〕

○二大和 正月十一日、

一當坊我等一期後、長賢房相續事、先年伯耆殿堅申合處、去々年借米返辨難成付、種々及申事間、無力五十石禮米遣之、向後長賢房相續不可有異儀旨、庄村安藝、同久藏父子判形、今日新三郎下、筆元見候取調了、重々約束之趣ハ、一書之面ニ在之、

二月十四日、

一今夜初夜ノ時分、丑刁ノ方大ヤケ也、何トモ不見分、卅三間燒了、

十七日、

一京ノ卅三間去十四日夜燒了、千手觀音三千三百卅三躰、後白川(河)法皇造立供養ノ所云々、及澆季故、靈佛靈社如此、淺猿、ウソ也、雜說也、尤々、

十九日、

一大乘院殿舊冬借金ノ内一枚分、辛巳十一月十三日ノ狀ニシテ、畑庄名主七人ニ借書申付了、則加判ニ仕、寬舜宗喜御使ノ間、借書上様へ進上了、



一乘院慈恩會

梅尾開帳

廿五日、從筒井、又一乘院慈恩會付、來月必無相違様ニト、以松權(松倉重信)私并广尼へ、順慶折昏來、則申上、御同心之通返事了、松權ヨリクス廿丁被持了、

三月十八日、梅尾開帳、大乘院尋了憲、御歲四十二、講師春音房權大僧都、院問者明禪房得業、題遺虛存實、唄散花、

開帳錢十貫文、御一獻料十貫文、(米)ノワシニテ、以金銀被遣之、講問役本錢之時五百疋以上、今度五石ッ、今日天氣快然、以之外寒、朝霜下、及晚夕立雨下了、

廿日、

一慈恩會堅者三日執行、古今無其例、雖無勿體一乘院ハ豎義堅執、是非共ト順慶房被仰問、無力如此、今度新儀非一也、如私引付、

六月一日、

一文觀ノ立像ノ文殊八斗ニ買候、定舜房望之間遣之、

廿五日、

一入夜子之初點歟、大乘院ノハ、西坊ヨリ火出、アキ小サシキ、并西ノワラヤ二家燒亡了、

文觀ノ立像ノ文殊

大乘院出火

圓專并アキ雜舍ハ不燒、風マイヲ吹付如此、消肝了、付火ノ様ノ様ニ申歟、西ノ坊ノ持佛堂ヨリ燒出了、丸燒過分ノ損亡云々、眞言ノ聖教、大事ノ本尊以下悉以て燒歟、淺猿々々、物取二人殺了云々、

十二月十六日、

一指柳庄安居田一町ノ内二反、吉川十二ヶ年之間違亂、夏ヨリ令默札(黙)種々井戸へ申届、則蒞立了、雖然庄屋十五日嘸トシテ、去年當年一石ニテ詫言ノ間、令同心、則今日上了、珍重々々、永代興隆也、

〔天正日記〕

城〇山 七月十五日 一蜂兵ハ早々御本意マテ御歸城、目出トノ事也、仍織色

十端被遣之、岸和田城へ御使内匠助、

一堀久太郎殿より使者、同名六右衛門、但蓮照寺ト云、銀子十枚、新門様へも

同前云々、

一十八日(秀忠)德山五兵衛より御音信被申候、黒梅十端、

一和州筒井順慶へ御音信有之、御使圓山内匠、

一八月卅日(下關守)堺御坊跡并寺領、諸坊主屋敷、田島以下事、可被返付由こつきて、少法、平越

堺へ罷越、寺相、圓内匠此二人も同道、

指柳莊

蜂屋頼隆  
ト本願寺

堀秀政  
ト本願寺

德山秀現  
ト本願寺

筒井順慶  
ト本願寺

堺ノ寺領  
ヲ返付セ  
ラル



本願寺ヨ  
ルヘ物ヲ贈

本願寺ト  
松井友閑  
本願寺ト  
多羅尾光  
俊

根來寺ヨ  
リ返禮

路次ノ無  
事ヲ命ズ

佐野足輕  
衆同意セ  
ズ  
尊朝法親  
王

鞍馬寺別  
當職安堵

伊藤吉次

伯蒲惠稜  
住妙心寺ニ

天正十年雜載

二二二

九月廿四日  
一 根來寺惣分へ御一禮アリ、泉識、杉坊兩人ノ調、此方ニ看三種、千把、柿二千、  
布、大樽百荷、使者宮部一兵衛、刑部卿ヨリ書狀遣之、

一 又河野越中爲御使、十一月十六罷上了、宮法へ、

一 シカラキノ多羅尾四郎兵衛ヨリ、始而音信ヲ被申候、綿五把進上、御返事  
被遣之、十二月十六日、取次刑部卿、使淨乘坊主衆也、いまと御返禮ヲハ不  
被遣之、

一 先日此方より、根來寺惣分へ御一禮在之、就其惣分より、篠本坊九月  
廿七八ノ頃、鷺森へ來臨、御對面あり、泉識より宰相、杉坊より大夫來、これ  
はまつ、泉州路次無異儀様ニトノ、高札ヲ立申こつきて、御案内也ト  
云々、御返禮ヲハ、やうて態可申入由也、

此分ニ候つ共、泉州佐野ニ在城ノ足輕衆同心不申、路次不通也、  
〔華頂要略〕<sup>門三</sup>傳二十四 龍池院二品法親王 八月六日、宇治院家近日  
就可有入寺、今日藤丸八歳、參内、三種三荷進上、親王御方同上、自兩御所御扇  
子拜領、予同道、賜御盃之後、自宮内卿法印又入寺延引之由申來、同七日、於宮  
内卿法印對面、種々雖令談合、終無同心、筑州エ可申届之由法印申之、<sup>略</sup>○中同

十三日、尊鎮親王三十三回御忌法會執行、調聲梶井最胤親王、伽陀真如堂全  
海、錫杖良慶、<sup>略</sup>○中同、<sup>十一日</sup>同日、鞍馬寺僧兩人來、兩種一荷進上、知行分相調珍重之  
由、從總分申之、同十六日、到來、  
鞍馬寺別當職之事、青蓮院御門跡領無相違旨、被任御當知行之旨、山上山  
下諸成物諸職、被任御意可被仰付候、恐々謹言、  
伊藤與左衛門  
十一月十六日  
吉次判

鳥居小路大藏卿殿

〔西笑和尚疏藁〕<sup>稜</sup>伯蒲住妙心

瞿曇拈華密旨、迦葉波不覆藏、

靈雲見桃話頭、備杜多謾敢保、

自匪付屬妙心正法、焉得則有納僧條章、

某 辭峰嵯峨、語路嶮峻、

無文諳月航說、彌堅彌高、

虛堂會天河詩、實參實悟、

天正十年雜載

二二三



詣北闕賜簾前紫、入西京愛狀元紅、

大雲(大雲山龍安寺)下有賢人、不滅龜年道德、

四海內皆兄弟、無愧龍安英雄、

公案現成節後黃花、法輪初轉濁劫烏筏、

諸天推轂、特地提綱、

人患才少陸惠才多、道儒釋奧、上一對、繼天用之、

彼遊方外丘遊方內、丕聖王圖、天正十年壬午九月廿四日、

〔余田文書〕

津○攝

湯山藥師堂寂錢唐櫃之事令寄進上、聊不可有相違者也、仍如件、

天正拾

池田勝九郎

十二月廿八日

元助(花押)

湯山

年寄

池田元助  
湯山藥師堂  
攝津寂錢  
藥師堂  
賽錢箱  
寄進ス

藥師堂參錢唐櫃之儀、爲新寄進勝九郎付置候、聊相違有間敷候、爲其兩人も

以折紙申入候、恐惶謹言、

天正拾一未

河原五

五月一日

相秀(花押)

伊彦十

守平(花押)

湯山

年寄

〔法隆寺文書〕

○六 大和

學侶堂衆和談之儀付條々、

一就忿劇、仁、公儀之使僧、從其方一人可被出、其子細之、宿路錢以下過分ニ載

候へ、各出之儀候之間、無私曲候旨如此候、但公儀之禮ニ者、學侶一人迄

可出事、

一就忿劇、棟間別儀、彼子別等在之時、兩諸進罷出可見事、

一大犯三ヶ條、有合諸道具當毛迄可有檢斷、付重科ハ博奕、又傷等也、寺役米

錢不出仁躰度々及催促、於無沙汰者、可爲輕科、不寄重科輕科、可爲一衣一

法隆寺學  
侶堂衆和  
談條々

檢斷



本、何後不寄重科輕科、地檢斷不可在之、會式床於相違者、可爲出仕停止、諸事此外之儀之可爲遠慮、於紛子細者、於御寶前以誓紙上可被相濟事、

一 反錢切増不可在之、但忿劇過分之造作入時者、双方以入魂上可在之歟、

一 用水次第 憲法可入事、

敬白 天罰起請文事、

右子細者、依先年不慮出來、諸式各別雖在之、今度以五ヶ條一書双方致入魂、於太子御寶前誓紙仕上者、不可有表裏者也、於此旨僞申者、上者梵天帝釋四大天王、惣而日本國中大小神祇、八幡大菩薩、當國守護春日大明神、當所鎮守龍田大明神、天滿大自在天神、惣社五所大明神、上宮御太子、七堂伽藍之御罰、於永代學侶可蒙罷者也、仍起請文如件、

天正十年 午 七月廿三日

各々 敬白

法印 有助(花押) 權小僧都興專(花押) 、 、 、 賴英(花押)

權律師印清(花押) 、 、 、 正應(花押) 、 、 、 訓英(花押)

晴懷大法師(花押) 巢心、 (花押) 曉圓、 (花押)

英訓、 (花押) 長波、 (花押) 善英、 (花押)

年會五師  
公文代  
沙汰衆  
噯人  
多武峯宿  
老職補任

〔談山神社記錄〕

寺六家扣

補任 宿老職之事、

濟範大德

天正十年雜載

二三七

賴弘、 (花押) 賴訓 法師(花押) 興 爲、 (花押)

圓盛、 (花押) 舜清、 (花押) 專祐、 (花押)

長英、 (花押) 弘 筭(花押) 宗 加、 (花押)

英祐、 (花押) 長祐、 (花押) 長乘、 (花押)

賴祐、 (花押) 懷弘、 (花押) 光祐、 (花押)

實雅、 (花押) 實賢、 (花押) 懷宣、 (花押)

賴譽、 (花押) 實秀、 (花押) 圓秀、 (花押)

專海、 (花押) 懷應、 (花押)

于時年會五師懷訓(花押)

公文代胤英法師(花押)

沙汰衆正印法師(花押)

噯人 榮甚五師(花押)



右以人所令補任彼職之狀如件、

天正十年十一月十六日

檢校法印大和尚位權大僧都英訓

久住者職

補任 久住者職之事、

久住者濟範

右人以所令彼職補任之狀如件、

天正十年十一月十六日

檢校法印大和尚位權大僧都英訓

百濟寺供僧職

補任 百濟大寺供僧職之事、

坊號觀宗大德

右以人所令補任彼職狀如件、

天正十年十一月十六日

檢校法印大和尚位權大僧都英訓

〔高野山文書〕

釋迦文院

又八

百濟供僧中坊宗仁、同辻之坊兩人、十一月十六日カクル、任折一貫二百文宛サタ、

續寶簡集百四十三

天正十年評定連署

大樂院(花押)

高野僧衆申合條々

御庵室(花押)

正智院(花押)

無量壽院(花押)

親王院(花押)

寶龜院(花押)

遍明院(花押)

無量光院(花押)

光壽院(花押)

中性院(花押)

北室院(花押)

清淨光院(花押)

遍照光院(花押)

西南院(花押)

西光院(花押)

般若院(花押)

東南院(花押)

隨心院

歡喜院(花押)

南院(花押)

東之坊(花押)

養智院(花押)

發光院(花押)

本覺院

如意輪寺

善集院(花押)

清淨心院(花押)

寶性院(花押)

普門院(花押)

曼荼羅院(花押)

安樂院(花押)



彌勒院(花押)	龍福院(花押)	寶光院(花押)	增福院(花押)	西持院(花押)	地藏院(花押)	明王院(花押)	成福院(花押)	自性院(花押)	多聞院(花押)	金剛頂院	吉祥院(花押)	慈光院(花押)	成佛院(花押)	高室院(花押)	報恩院(花押)	尊勝院	成藏院(花押)	寶聚院(花押)	西禪院(花押)	中藏院(花押)	愛染院(花押)	覺證院(花押)	正善院(花押)	慈眼院(花押)	心禪院(花押)	遍照尊院(花押)	高善院(花押)	大乘院(花押)	補陀洛院(花押)

寂靜院(花押) 惣持院(花押)  
 西室院(花押) 心南院(花押)  
 平等院 龍光院分(花押)  
 一乘院分(花押) 五智院分(花押)  
 心王院分(花押)

右連判之意趣者

- 一 衆者一味沙汰者、各々儀与他方申定上者、於向後、付公事致仁有付者、爲衆中可出交名事、
- 一 就寺役闕如過新等之事、藤之坊廻集會、可任事書事、并與院朝拜之寺役過新八木壹斗可被出事、
- 一 若輩衆非分之公事於有沙汰者、爲坊主衆不可有介錯、爲惣分、理非次第仁可有決判事、

天正拾年三月二日

於無量壽院評定畢、

一 勸學院順長、每年自多分、惣談議一萬二萬之木具料壹石五斗、可有扶持之



事、

一 養智院學道三年目科料壹石、可被出之事、

一 每年集會次、此事書可有披露事、

天正十年<sub>壬午</sub>六月廿六日

年預阿闍梨榮敏

依所自性院

年預  
依所

〔高野山文書〕

○西門院 三  
紀伊

於高野山上總國宿坊之事、可爲如前夕候爲其及一札候、仍如件、

天正拾<sub>壬午</sub>年

九月廿一日

(實見)  
義賴(花押)

高野山上  
總國宿坊  
里見義賴

西門院

〔高野山文書〕

又續寶簡集三十七

三十人評定事書

天正十年霜月廿八日、

於金堂西座三十人評定云、

合米四石壹貫九百文、

三十人評  
定事書  
公事錢

一 任先例可有支配事、

一 於勘錄者、卅人當參之一藤二藤可有出仕事、

一 於不參罪科者、可被任先例事、

米之引物之分

壹石三斗

月預衆三人

三斗

減米之分

三斗

承仕方

五斗

毛見入目

二斗五升

雜穀之料

二斗五升

山里番頭

定錢米壹石二斗

支配人別二升五合宛

引物之分

三百文

公事錢催足事  
(備下同)

六百文

年具催足

天正十年雜載

毛見入目

公事錢催  
年貢催促



百文

執筆料  
井料

井料引

定錢六百文

支配人別三十文宛

深相房

榮舜房

深長房

執筆料

巡切米禮

〔潮崎稜威主文書〕

○五紀伊

〔給分〕  
「給分ちやう」

給分之事

右切米貳石分、來年遠州船ニ渡し申へく候、三月中三河順禮詣不申候ハ、來四月より下野（結城）ゆう木の順禮詣候、又ハきりの年貢分、給分より可進候、仍爲後日如件、

天正十十月十九日

〔蓮華寺文書〕

江○遠

〔實録〕  
道勢（花押）○宛名

遠江蓮華寺禁制

於蓮花寺金屋、竹木伐取輩、指其交名、急度可有注進、從類共ニ可遂成敗者也、仍如件、

天正十

十月十一日

〔本多重秀〕  
本作左

大行院莊  
在庄ノ山  
伏下ノ大  
院トノ關  
係

〔武州文書〕

十二足立郡  
南下谷村大行院藏

態一書進候、月輪院御奉公之者也共、殊ニ拙者奉公之者也共、大行院庄ニ踞候山伏ハ、年始行を、講役以下之事、急度可申候、其上致入峯者も、無添狀候者、合點是有間敷候、於何も、大行院可爲指引次第候、仍當山入峯方御法度可爲肝要候、爲後日申入候、恐々謹言、

不動院

天正十年壬午六月十日

〔實録〕  
賴長（花押）○宛名

〔信甲文書〕

○常陸

彼長傳庵之儀、寺領共ニ不殘一物可付與自宅公ニ者也、爲後日ニ一筆出畢、  
天正十年壬午十二月十三日  
爲景清春（花押）

自宅公ニ

長傳庵讓  
證波ノ清春  
狀



日光山常  
行堂念佛  
屈請衆

〔輪王寺文書〕〇二下野

囑請

常行堂御念佛假衆所

昌春法印 昌運法印 奉

昌存法印 奉 昌長僧都

右以衆儀之旨、囑請之所如件、

天正十年壬午七月十五日

下番頭空純阿闍梨  
上番頭宗安法印

〔日光常行堂記錄〕三十講表白

古本破損之間奉納之、

櫻本房宗安

常行堂々内不出、

天正十年壬午九月九日

ぞく法乃こと葉の玉枝と、忽そへかけそつりし麥鳥此跡の形

一笑々々 宗安(花押)

櫻本房宗  
安常行堂  
へ書物ヲ  
奉納ス

瀧尾觀音  
堂

壬午當年四月、瀧尾觀音新造畢、

本願瀧尾上人淨土院昌策

行者堂

當年二月、行者堂新造畢、

本願櫻本房宗安檢校也、

中禪寺拜  
殿上葺

同年、中禪寺拜殿上葺成就、

上人教城房昌長

夏峰

同年四月廿三日ヨリ、於清瀧寺灌頂、五月四日迄有之、衆徒慳与詰畢、新阿闍梨十人、授者八十人、當清瀧寺尊豪、同年夏峯有之、連雨也、

〔世尊寺文書〕〇佐

於永代而、諸をなく、此地を進申候處、爲後日也、仍如件、

世尊寺様參

泉澤小四郎(花押)

天正十年三月十三日

〔斑鳩寺文書〕〇乾

播磨

坊中屋敷地子米之事、御太子爲寄進令用捨候、於然上者、彌勤行等無懈怠儀簡要候、恐々謹言、

天正十年雜載

斑鳩寺地  
子米

世尊寺



天正拾

十二月三日

佛餉院

不動院 御同宿中

彌三郎

廣英(花押)

日向大光  
寺ノ祈禱

〔大光寺文書〕

〇日向

爲御祈禱立願之事

首椋殿一千座

文殊師利菩薩  
法花嶽寺

法華一部

伊勢天照皇大神

法花一部

熊野山三所大權現

法花一部

巨田八幡大菩薩

法花一部

霧嶋六所大權現

法花一部

稻荷三所大明神

法花一部

愛宕山大權現

法花一部

八代妙見大菩薩

法花一部

安宮大明神

法花一部

天正十年壬十一月七日

大光寺

〔上井覺兼日帳〕

〇日向

十一月十二日

略 〇中 此日本田刑部少輔大膳ニ而鹿兒

遊行上人  
鹿兒島下

鳴々被仰越意趣(伊集院)忠棟宿ニ而拙者兩人承候、此度遊行上人鹿兒鳴々著被

成候、彼御申候段ハ、日州都於郡廣大寺、光照寺、彼兩寺上人へ御參せ候へ

りし、左候ハ、二三年彼寺ニ滞留候而、當時京都迄物念候間、左様之儀等

聞合候而、上國有度候、其間之事、右之寺借被下候する事、頼入遣らるゝ由

也、使者右兩寺之當住之由也、先々御返事ニハ、老名敷衆過半境目ニ罷居

候、殊ニ日州之事、拙者變ニ而候間、御尋被成候する通、被仰述之由也、

老名敷衆

禁中、公家雜事、

〔晴豐公記〕

三

二月廿二日、晝降、(雲)うんさいくそりのミ申也、土御門御禮之

儀、中山、廣橋御使也、六位退けききい申祇候すへき由被仰出候、中々めい

りくのよし申也、さゝめて五位退て祇候可申候り、

〔言經卿記〕

三

四月八日、丙申、天晴

一陰陽頭久脩、前右府ヨリ御執奏ニテ加堂上、去月也云々、則令勅許也云々、

信長ノ執  
歸奏ニテ復

土御門久  
脩六位ニ  
御退



今日諸家禮ニ罷出云々、予所へも來了、諸事頼入之由申、

〔兼見卿記〕

四 正月十二日、辛未、參近衛殿御方御所、南都へ御下向也、

近衛前久  
夫人奈良  
ニ下向ス

二月四日、癸巳、略中 又參近衛殿、於御馬場被責御馬、藤中納言、中山黃門、勸修

前久ノ調  
馬

寺黃門、廣橋□聖門、御方御所、各御見物也、今度自右府信長被參御馬、御方

信長馬ヲ  
前久ニ贈  
ル

御所同前參也、其御馬也、

誠仁親王  
御所ノ音  
曲

參殿中、御留守之御所也、相番各相談了、入夜音曲可五番、水無瀬黃門、源三

位、當番衆、相談及深更、

近衛信基  
吉田遊山

八月十六日、辛丑、略中 清三品來、近衛殿内府御成、小笠原、朽木八十郎各被召

連御幽興、入夜還御、至川原罷出了、清三品右之依御客來歸京了、一宮來、

藤原惺窩

九月一日、丙辰、天晴、略中 妙心院、有庵、舜藏主、請晚炊、

十月三日、戊子、請舜藏主之間、侍從、青女、磯谷彥四郎、同母各罷向齋、出京、申刻

歸宅、○下略、惟住長秀、物ヲ兼和ニ贈ルコトニカ、ル、武家雜事ノ條ニ收ム、

〔多聞院日記〕

二十九 卯月九日、

九條家若  
君誕生

一去三日曉夢ニ、九條殿ニ若君御誕生ノ由、左近ノ局より注進、則御門跡御

弟子ニ被參トアル處夢ニ見了、則翌日四日、大門様へ申上處、一段御祝著

也、然處今日午刻京より注進、昨日八日、九條殿ニ若君様御誕生、スルノ

ト珍重之由、寬舜ヨリ申下了、抑希代不思議ノ正夢也トテ、一段御満足、大

慶也、則明日御樽進上之由也、御弟子ニ御同心アレカシトノ御望也、○若

君死去ノコト、十一年、末雜載死歿ノ條ニ見ユ、

九月廿七日、

一去廿一日、二條殿御若君御誕生、同廿二日、御屋敷ヲ、親王様ヨリ被返了ト、

十一月廿九日、早旦社參了、歸レハ雨下了、鷹司殿御下向、各々申合御見廻可

申之由雖申上、以外御忍よて御下候間、中々無用之由返事之間尤々、

〔晴豐公記〕

三 三月廿六日、天晴、今日ハ通仙夕食（信也）ヨフ、庭田大納言、坊城伯

芸濟也、鯉うんさいよりをくり候、則高橋若狹ニ、ハウチャウさせ申候也、

大酒也、

〔言經卿記〕

三 正月廿日、己卯、天晴、夜雪、

一 源中納言ヨリ指貫借用間、遣了、

一 冷泉ヨリ、廿日祝言有之由、可來之由有之、予、北向、阿茶丸其外家中悉罷向

了、

二條家若  
君誕生  
鷹司信房  
奈良ニ下  
向ス

半井臈庵  
高橋ノ庵  
了

冷泉家ノ  
祝言



山科言繼  
忌日

三月二日、庚申、天晴、  
一忘(忌)父卿正忌之間、松林院西堂、性心等(齊下同シ)相伴了、茶被携了、布施西へ五十  
錢、性へ卅錢遣了、左道之志計也、  
廿六日、甲申、天晴、

楠長諸息  
甚四郎室  
冷泉氏

一冷泉中殿ヨリ小者彌二郎被雇之由、遣了、安土城楠甚四郎所へ(女中へ)音信有之、  
冷泉妹也、

楠長諸

六月廿七日、癸丑、風、晚晴、

一冷泉へ暮ニ罷向、楠長(齊下同シ)安同罷向、移刻令雜談了、

八月廿二日、

一北向親父冷泉故黃門第十三回忌明日也、然者今日追善有之、上善寺住持、  
同衆僧四人、大藏寺善勝、古市宗超等濟ニ相伴了、予阿彌陀經并念佛書了、  
裏書如此、

冷泉爲益  
十三回忌

一四紙真文并無量壽佛寶號、

右志者、奉爲前龍作特進月桂秀覺尊位第十三回忌也、恭任一心不亂本  
誓、速離六趣苦海沈淪、聲聞春花快然、薰緣覺秋月廓然、朗宜侶菩薩化度、

而至妙覺正位給、乃至法界利益無貳矣、

天正十年八月廿三日

從二位言經

濟已下申付了、次布施少ッ、遣了、左道之至也、

廿三日、

一冷泉へ濟ニ罷向了、相伴衆予、上善寺住持衆僧九人、大藏寺善勝、冷泉、四條、  
古市宗超、久川說會等也、北向家中衆悉冷泉へ被呼了、申刻ニ各同道了、上  
善寺へ參了、燒香了、次住持ヨリ各茶有之、

九月七日、壬戌、天晴、

一冷泉へ朝喰有之云々、楠長安父子、女房衆等被行之云々、北向、阿茶丸等相  
伴ニ被行之、予度々使有之、然共所勞平臥之間、不罷向、喰被持送了、濟々儀  
也、

十七日、壬申、天晴、

一臨江齋紹巴(連歌師)、可來之使有之間、則罷向之處、柳原(學光)、正親町、烏丸等被罷  
向了、御酒有之、

十月二日、丁亥、天晴、

臨江齋紹  
巴



長諳孫誕

髮垂

惟住長秀  
兼和吉田  
送田

青山お虎

稻葉一鐵  
家ヲ子典  
通ニ譲ル

小野崎義  
昌

東義久

天正十年雜載

二五四

一冷泉ニテ今曉楠甚四郎妻冷イモト、女子誕生了、早朝ニ北向、阿茶丸罷向、  
愛洲藥、甘艸等遣了、後刻モチ錫被送給了、後刻罷向、又入夜罷向、御酒有之、  
八日、癸巳、天晴、  
一冷泉へ朝食ニ予、北向、阿茶丸等罷向、楠甚四郎ムスメ今日髮タレ也云々、  
相伴予、冷泉、四條、長諳等也、女房衆ウラノ座敷也、北向已下長諳女中等也  
云々、

武家雜事、

〔兼見卿記〕

四 十月三日、戊子、○中略、惺窩兼治等ヲ招クコト、自惟住五郎

左衛門使者、書狀、折番、鮭二到來、對面使者、折番返事遣了、進盃、

四日、己丑、惟住五郎左衛門指下左馬允、昨日鮭之禮也、青山御虎、早崎小傳次

方へ遣書狀、○下

〔家忠日記〕

二 五月五日、戌、壬雨降、城ハ出仕候、家康より本田平八御使にて、

三河國衆各御越候ハぬこ、越候て、祝著被成候、由被仰候、板倉四郎右衛門  
所こふる舞候、

〔白稻葉家譜〕

貞通 彦六、右京亮、從五位下侍從、

典通 彦六、從五位下侍從、

貞通 (天正) 同十年、遜國政於嫡子典通、

典通 天正十年、嗣父爲曾根城主、

〔常總遺文〕

七 相守普代之筋神妙、走廻候條、官途被下置也、

天正十年七月廿八日

義昌(小野崎)(花押)

福田民部少輔殿

〔秋田藩採集文書〕

二十一 城下諸士文書十一

東義久書

久

一字之事、所望ニ付而任其意候、恐々謹言、

天正十年

義久(忠勝)(花押)

安藤左馬助殿

〔秋田藩採集文書〕

二十三 城下諸士文書十三

南義種書

天正十年雜載

二五五



再拜々敬白、起請文之事、  
第一奢斯手、不可無益之殺生事、  
第二不取師之赦、弟子不可取事、  
第三師者如父母、不可背命事、

若背此旨候者、摩利支天可蒙御罰也、仍如件、

天正十年壬午

六月十三日

義種(花押)

愛洲元香齋  
同小七郎殿

〔南部家記錄〕  
二二十六代南部大膳大夫信直公

天正十年壬午

正月元日

信直公より櫻庭直綱助、與三郎、又兵、  
爲加冠親賜御諱字、

元服吉日

佐々木與三郎

源家直綱

源朝臣信直

天正拾年正月吉良辰

〔小早川家文書〕  
一編裏書

天正十年正月二日御座配  
小早川家御座配

棕梨殿

小泉殿

友閑

竹印

草井殿

末長殿

佐世殿

棕梨少輔四郎

乃美右近助

桂宮内少輔

礮兼左近大夫

神西治部丞

國貞藤右衛門尉

長井大郎五郎

包久内藏丞

河井大炊助

南縫殿允

日名内刑部丞

真田與三右衛門尉

井上又右衛門尉

岡與三左衛門尉

兒玉與四郎

飯田讚岐守

横見與三兵衛尉

吉近孫七郎

裳懸六郎

手嶋市助



栗屋四郎兵衛尉

有田右京亮

田坂三郎左門尉(備前)

林左京亮

土屋備前守

南佐渡守

眞田出雲守

沼間田民部丞

中屋與三兵衛尉

野上木工允

望月二郎左衛門尉

山田市助

山田木工允

山田新右衛門尉

柚木々工助

〔萩藩閔閱録〕

百三尾越正右衛門

加冠

元

毛利輝元

天正拾年七月廿二日

輝元 御判

有(元)福源太郎殿

〔萩藩閔閱録〕

百六揚井神平

受領

但馬守

天正拾年

十二月十五日

輝元 御判

(武藏)楊井右京亮殿

〔毛利氏四代實錄考證論斷〕

二十

十月十三日、

考證

閔六十四

(元好)市川伊豆守殿

黒川三河守殿

(元善)國司雅樂允殿

矢田部善左衛門尉事、上様御被官之儀候、就夫御用之儀切々被仰付候、其

許細工役之事被成御免許候、此之由能々可申旨候、恐々謹言、

天正十

栗屋掃部助

十月十三日

元眞判

堅田三郎左衛門

元乘判

兒玉小次郎

元兼判

〔萩藩閔閱録〕

六十仁保太左衛門

輝元公御判

細工役免許



段錢ノ中  
ヨリ旅費  
ヲ給ス

天正十年雜載

二六〇

仁保右衛門大夫方内儀常榮様以來別而被付御心儀共候、然者其表被差下候條、御段錢方之内を以、米貳十俵可被遣之由候、可有勘渡之由可申旨候、恐々謹言、

内與三右

元榮判

天正十年十月廿日

國司對馬守殿

黒河三河守殿

國司雅樂允殿

〔松原文書〕

後〇豐

依望任久右衛門尉之狀如件、

天正十年

五月廿七日

親家(花押)

松原甚助殿

〔相良家文書〕

二

〔折封ハ巻〕  
相良六郎殿 名字

田原親家

相良忠房

學藝、遊戯、

〔晴豊公記〕

三 正月廿三日、○中略、晴豊、本願寺ト物ヲ贈答ス、今夜二條御

うとい有、參候也、たいの物進上申也、御室御所御供申也、

廿七日、天晴、二條御所長恨歌御うしやくあり、水無瀬中納言申也、

二月七日、○中 親王御方へ道三古今申入、御禮花むん二つ持を進上、

廿一日、天晴、水無瀬御うと二首詠進申也、今日者隙有之、

廿六日、天晴、二條と和らん有之、うんさいへ山鳥遣也、立入ト濟こきんらん

四本つうせ申也、あんせん茶湯よひ申、せいあん入道殿事外沈醉也、

三月三日、天晴、鳥合祇候申也、禮者共有之、内物鈴、高橋鈴、衛士鈴、嗟峨す、

ら二十疋、小河彌二郎さう月一、二條御盃參候、トより御成、禁裏御盃參候、

天正十年雜載

二六一

謠

長恨歌講  
釋  
曲直瀬玄  
古今集

和漢聯句

茶湯

閑鷄

名字

相良六郎殿

頼國

天正十年六月吉日

忠房



半井驢庵

六日、天晴、早天、二條之御所より罷出、(半井驢庵)通仙へ夕方茶湯こよこれ候、ちちき  
ろう鈴遣候、

長岡藤孝  
茶湯

〔兼見卿記〕

四

正月十一日、庚午、天晴、○中自牧庵書狀、明朝長兵爲茶湯招

請、予可來之由也、相心得之由返事了、

十二日、辛未、早天向牧庵、長兵(忠興)與一郎(權治)、予等也、茶以後、長兵ニ予云、昨日御

禮殿下其外所々不參也、可罷出之由申、起座了、○下

二月六日、乙未、佐羽州ニ爲茶湯招請之間、同道月齋罷向侍(兼見)從自先刻罷向也、

丁寧之馳走也、及晚歸宅、

廿一日、庚戌、大工太郎左衛門、茶湯座敷路地之縁申付了、

廿四日、癸丑、御番祇候了、向春長軒、在將碁(村井貞勝)

三月二日、庚申、向春長軒、饅頭五十、持參、在將碁、○下

廿八日、丙戌、雨降、招請佐竹左近允茶湯之間罷向、今朝以外之風雨、路次無正

躰、侍從同前午下刻歸宅、未風雨止、令乘輿歸了、○下

四月二日、庚寅、○中雨降、召寄屏風張守泉、小座之次一間ニ中四枚之衾障子、

屏風張守泉  
屏風ニ相張ル  
古ノ繪ヲ

以相古繪張之、日吉大夫來、

藤原惺窩

九日、丁酉、早天退出、請周超之間罷向、月齋(權藏)主相伴、疊悉出來、此間召寄兩

人申付也、小座敷次之間六帖敷、裏之座敷六帖、面之次三帖、薄縁三枚卅帖

面替申付了、屏風張守泉來、小座カツ手衾障子二本張之、

十一日、己亥、向春長軒、面會、將碁、直向牧庵、

昨日自十日、於村雲、ダイカシラ大首舞群集云々、及晚歸宅、碁打壽見來、

十二日、庚子、碁打樹齋來、今夜壽見與一盤在之、壽見負、

十三日、辛丑、碁二盤、壽見負、南豐軒來、及晚各歸、

五月四日、辛酉、爲明日禮、向春長軒、鯉魚二持參、面會將碁、○下

十二日、己巳、早且長岡兵部大輔來、晚與一郎來、鞠張行、水無瀨兵衛督、小笠原

民部、安東同道、鞠以後羞夕喰、○下

七月廿六日、壬午、預置禁中書籍等廿色取寄了、兵庫助、修理進、喜介、源三郎、左

介申付也、万里小路ニ三色、依他行未取寄、○下

十月廿六日、辛亥、○中宗節其外地下人各來、入夜亂舞、及深更歸宅、

十一月廿七日、壬午、德大寺殿、南豐軒仙也、一薦康雅來、今夜御逗留、及深更有

中將碁、○下

吉田兼和  
禁中ニ預置  
書籍ヲ取寄  
ス

蹴鞠

大首舞見  
碁打壽見  
同樹齋

亂舞



惺高茶湯  
興行

古筆

十二月三日、丁亥、略中 舜藏主興行茶湯罷向、月齋同道、  
十一日、乙未、出京、向柳原亞相、上冷令持參歌書見之、非彼家之筆、他家何モ古  
筆也、

高麗茶碗

十五日、己亥、東陽防方へ倚爐□緣之代銀子十四文目持遣之、高麗茶碗持遣  
之、喜介使之、略上

圍碁

十七日、辛丑、向勸黃門、鷲三、息へ持參、黃門令同道參宮御方、鶉鷹八、持參、御對  
面、於御縁上乘院圍碁一番在之、勝負予勝也、次退出、向盛方院、吉田勝勝

曆

十八日、壬寅、薄雪、妙心院周超招寄、茶湯了、略下  
廿八日、壬子、向神龍院、新曆出來、舜藏主書寫之、

〔言經卿記〕

三 正月十二日、辛未、天晴、

平家物語

夫木抄

大學

一 渡邊又七ニ平家物語 二、令借用了、  
一 持明院來談、夫木一二卷借用、遣了、  
十五日、甲戌、天晴、  
一 四條ヨリ大學借用、遣了、  
十七日、丙子、雨、

聯句

一下御所當番ニ參了、相番季滿朝臣、朝具朝加番持明院中納言、外様日野新  
中納言、西納言時通朝臣、元仲、頼宣等也、但元仲宿計ニ被參了、外様ニテ一盞、日野  
被振舞了、聯句十三句、和漢七等有之、

催花春雨急 日野 酌杏市村堤 予

吟則聽鶯笛 〃 學而裁鳳章 日野

雷齊鳴宋谷 〃 秋冷憶吳張 予

舩去江浸月 〃 簾疏風對床 日野

與童窺硯燕 予 侍臂當車娘 西洞院

武者不過勇 〃 軍□宜拜將 予 一〇軍ノ下  
一字闕ク、

縮絲情處柳 〃

次和漢有之、

梅々々を峯よりさきへ春の風 持明院

簾罅雪纔殘 日野

月のうよもかすめる月よ夜へ明て 西洞院

さしよそいつき湊江の舟 予

和漢聯句



佳景山生意

里何らそにもそるゝ夕霧

散露嵐前竹

日野

持明院

予

信長側室  
小倉氏平  
家物語ヲ  
求ム

十八日、丁丑、天晴、

一四條ヨリ大學之本被返了、

廿五日、甲申、天晴、

一白川女中へ平家二卷カナ書之遣了、前右府信長公、妾御ナへ、ヨリ、内々堂

上少々被申云々、

廿七日、丙戌、天晴、

一略中入夜水無瀬旅宿へ持明院、予、日野等罷向、一盞有之、漢和連句八句有

之、不及記之、

卅日、己丑、天晴、

一宗英藏主來、夕喰相伴了、連句卅六句有之、不及記之、

二月一日、庚寅、天晴、

一宗英藏主來了、聯句昨日次兩吟了、夕喰相伴了、

兩吟

連歌

一嶋田與介連歌雜之寫借用遣了、

九日、戊戌、天晴、

一持明院ヨリ夫木一二卷、樂譜等被返了、又盤涉調小樂十計寫之、所望之由

被申、料昏被持送了、同心了、

十一日、庚子、晴、

一藤金吾へ罷向、順正軒増長同罷向了、聯句真句廿句、庚句十六句等有之、夕喰

有之、

十三日、壬寅、天晴、

一柳原へ罷向了、冷泉へ罷向了、夕喰有之、柳原ヨリ借用春日祭次第遣了、又

柳本令借用、行列返了、

十四日、癸卯、天晴、

一柳原ヨリ可入來之由、則罷向了、渡邊黨系圖之事被申之間、引勘草ヲ作遣

了、則被清書了、一盞有之、

十八日、丁未、天晴、

一毘沙門堂ヨリ、拾芥抄上借用之間、遣了、

樂譜

真句  
庚句

春日祭次  
第

渡邊黨系  
圖

拾芥抄



聖廟法樂  
和漢百句

論語  
殿上人次  
第  
公卿補任

天正十年雜載

廿四日、癸丑、天晴、  
 一古市宗超幕ニ入來了、和漢八句有之、  
 廿五日、甲寅、天霧、  
 一聖廟法樂ニ和漢百句興行了、昨夜八句則用了、人數予、宗英藏主、古市宗超等也、戌刻ニ會果了、夕喰申付了、今日句不及記之、  
 廿八日、丁巳、天霧、  
 一<sup>(宗廟)</sup>中御門ヨリ大學借用之間遣了、  
 三月一日、己未、霧小雨、  
 一新在家江村甚太郎讀書望之由、二十疋持來了、則論語讀之、吸物勸酒了、古市入道同道了、  
 一<sup>(種直)</sup>富小路ヨリ殿上人次第所望之由、明後日鷄合之廻文之用也、書之遣了、  
 八日、丙寅、天晴、夜雨、  
 一練意論語讀書之間、今日ヨリ相始了、一二卷借用之間遣了、  
 一日野ヨリ公卿補任十五冊、同目六、分句等被返了、出陣也云々、  
 九日、丁卯、天晴、

八卦占

法華經

禁中へ返  
上ノ草子

一大和入道宗恕ニ、八卦占之一卷令借用了、  
 一練意讀書ニ來了、論語爲政第二也、○練意及ヒ江村甚太郎、論語讀習ノコト、以下略ス、  
 一日野ヨリ法花經一部八卷被返了、  
 十一日、己巳、天晴、  
 一禁中へ返上申御草子目六、長橋殿へ書狀添遣了、  
 陸渭南詩 四冊 蘇魴切韻 八冊  
 押句淵海 十冊 東坡 十五冊  
 詩學大成 三冊 句府 一冊  
 古文眞寶抄 一冊 姓名集 一冊  
 聖三清抄 四冊 夫木 七冊  
 已上 五十四冊

かしこまりて申入候、あつゝ大しの御さうし、うゝまけあく千万よ  
 さんし候、いくへもゝゝまゝなへきやうよ御ひろうよあつゝ候へ  
 く候、あつゝゝまゝの時申入まいらせ候へく候、うしく、



あつはしとの御局へ

活人ノ生  
連歌新式

蒙求

般若心經  
醫書

七味圓方  
源氏論義

詠歌一躰  
未來記  
雨中吟

春日祭上  
卿次第

十五日、癸酉、雨、未刻ヨリ晴、

一多備前守來了、論語全部持來了、先年裏付之事申、然共料帛不遣先取了、連

歌新式小本、夕、ム事申、同前ニ持來了、又冠借用之間、遣了、

一練意讀書ニ入來了、蒙求疏本借用之間、遣了、

十六日、甲戌、天晴、曇、

一毘沙門堂へ罷向了、心經一卷、醫書切帛二枚等令誂之、拾芥抄上被返了、

十七日、乙亥、天晴、曇、

一渡邊又七ニ平家二卷返了、

一白川へ七味圓方返之、源氏論義借用之間、遣了、

廿一日、己卯、下未、

一冷泉へ詠歌一躰、未來記、雨中吟等抄、借用之間、遣了、

廿七日、乙酉、天晴、

一冷泉ニ春日祭上卿次第記令借用了、

四月五日、癸巳、天晴、

大學

古今集序

諷本

香合

詠歌大概

一練意來、大學讀之、序ヨリ五章マテ教之、○練意、大學讀習、

七日、乙未、天晴、入夜下未、

一古今集序冷泉ニ令借用了、

十日、戊戌、晴陰、

一毘沙門堂ヨリ諷本芭蕉、唐船、東岸居士、融、蟻通、いとくり等六番借用之間、遣了、

十一日、己亥、天晴、

一毘沙門堂諷本六番被返了、

十二日、庚子、天霽、

一冷泉へ古今集序返了、又香合赤借用之間、遣了、

十四日、壬寅、天晴、

一詠歌大概冷泉ニ令借用了、冷泉詠歌大概被談了、

十五日、癸卯、天晴、

一冷泉入來、詠歌大概被講了、

十六日、甲辰、天霽、夜小雨、



舞人卜經  
古今集

一冷泉阿茶丸等同道下京其外西三條野令徘徊了、先舞人備前守<sub>經師</sub>へ立寄、但留守了、古今集上下閉事申頼了、

廿二日、庚戌、天晴、

一四條ヨリ可入來之由使有之間、已下刻ニ則罷向、先一盞、次冷ムキ有之、大炊御門、予冷泉四條、同妻、古市宗超、川端與二郎等也、次九條殿、二條殿鷹司殿御出也、及亂酒、諷小鼓有之、無正躰令沈醉了、

小鼓

廿三日、辛亥、天晴、

一古市宗超被來了、中臣祓開書令借用了、

中臣祓開書

五月二日、己未、天晴、

中庸

一江村甚太郎讀書ニ來了、中庸教之、<sub>江村甚太郎、中庸讀</sub>

庭訓往來

一嶋田與介來、庭訓往來不審之處共問之間、教之、

七日、甲子、天晴、

一下御所當番之間、朝食相急參了、相番雅朝々臣、加番元仲、外様廣橋中納言、<sub>鳥丸、藤原秀直等也、廣橋木屋ニテ一盞有之、次番所ニテ連句十句、廣兩吟也、如此、</sub>

鶻啼雲半破、予

鴈度月新晴、廣橋

湘暮引湜艇、

從興敗老扨、予

葉零山徑斷、

蘆橋水隈清、廣

鷗自波閑曉、廣

鳳從爆汲烹、予

此交消永日、

晴宴到殘更、廣

次宿ヲ四辻中將ニ令相博、退出了、

十二日、己巳、天晴、

一白川妻ヨリ平家九卷被誂之、前右府妾<sub>御</sub>本也云々、先日一冊書之、又來了、

廿五日、壬午、下未、

一宗英藏主來、八卦注、同繪圖等持來之間、令借用之、勸酒了、

八卦注  
同繪圖

廿六日、癸未、晴、下未、晚大雨、

一水無瀬へ彌二郎ヲ下了、<sub>中</sub>又庭訓往來、明衡往來等令借用了、又後柏原

院補任上下被返了、

廿八日、乙酉、天霽、

明衡往來



曆圖

六韜抄

一東梅津眼藏院へ一轄下平上先ヨリ返了、又同下平下尤□又仄韵々脚等令借用了、

七月十一日、丁卯、天晴、

一毘沙門堂ヨリ、曆圖五丁被誂了、

十二日、戊辰、晴陰、

一毘沙門堂へ暮ニ、曆圖五枚書之、持罷向了、

十九日、乙亥、晴、大夕立、

一白川六韜抄被返了、中院借用之本也、伯ヨリ被返了、兄弟之儀ニ付而也、

八月廿日、

一梅谷和尚來談了、聯句廿句有之、

清話消殘暑、予、夜書惜寸陰、梅谷、

僧走仙去禹、

達者孝終參、予、

暮宿鳥爭樹、予、

邦畿牛繫林、梅、

俸餘山百祿、

寵渥刻千金、予、

花莫尊卑隔、

杏分賢聖樹、梅、

再修三徑亮、予、

其相一門岑、梅、

吾友鳳而視、

同容虫以吟、予、

風簾篩幾月、

源氏物語

諷本

下學抄

和歌部類抄

古文眞寶抄

雜々露歌新式

論語抄

古管勒非今、梅、

牆面栽鬚竹、

江頭既醉楓、予、

客艫波崇枕、

官座殿双簪、梅、

九月二日、丁巳、陰、時正中、子刻ヨリ卯刻マテ大雨風、

一毘沙門堂へ源氏まほろし料番返之、

一淨花院壽全ヨリ、諷本ひそり山、あうゑん明等返了、

五日、庚申、天霽、時正終、

一冷泉ヨリ下學抄被返了、

七日、壬戌、天晴、

一古市宗超へ和歌部類抄取遣了、則到來、從先日借用也、

一眼藏院ヨリ古文眞寶抄上借給也、

九日、甲子、天晴、

一嶋田與介禮ニ來、勸酒了、雜々露歌新式等書之遣了、

十二日、丁卯、天霽、

一速水彦太郎ヨリ論語抄子罕已下四章分返了、又子路已下四章分遣了、

十三日、戊辰、天晴、



自讚歌

御服方  
公卿補任

職原抄

公事五十  
番歌合

一大和宗恕へ八卦之本返了、

十五日、庚午、天晴、

一小川與六ニ自讚歌書之遣了、但善大夫ニ申付了、去八日ニ與六ハ中國へ

罷下云々、其已前ヨリ頼入之由有之如此、

十六日、辛未、天晴、

一淨花院、松林院へ記六宮五、御服方、出仕具本尊共懸字繪宮二、公卿補任等預之、

十七日、壬申、天晴、

一官女茶々、自讚歌所望之間、書之遣了、

十九日、甲戌、晴陰、

一持明院ヨリ職原抄借用遣了、

廿四日、己卯、天晴、夜雨、

一柳原へ罷向、一盞○中略、愛洲藥ノコトニ又公事五十番歌合等令借用了、

次冷泉へ罷向、夕喰有之、

廿六日、辛巳、天晴、

一持明院相呼、夕喰令相伴了、連歌一折兩吟了、又任判考等所望之間遣了、

萬力膏藥  
方

年中行事

三氣  
軍敗

廿七日、壬午、陰、夜雨、

一持明院ヨリ職原抄被返了、又陳皮五兩被送了、又萬力膏藥方本被借之、祝

著了、

十月二日、丁亥、天晴、

一薄所ヨリ草子カラヒツ取寄了、内々被申間如此、

三日、戊子、天晴、

一持明院へ年中行事返了、

四日、己丑、天晴、

一大和宗恕入來了、三氣二冊被返了、又軍敗之内三卷又遣了、又八卦持來了、

一可書之由抑留了、

十日、乙未、天晴、

一大和宗恕被來了、軍敗内三卷被返了、又藥共相傳了、

十四日、己亥、天晴、

一毘沙門堂ヨリ草子刀打雖借用遣了、

十六日、辛丑、天晴、



圍碁  
雙六  
田樂

夢想發句

仁王經返

一梅谷和尚へ古文眞寶抄<sup>上</sup>返了、又中令借了、

十八日、癸卯、天霽、

一桶甚四郎ヨリ未刻ニ可來之由、則罷向了、冷泉、四條同被罷向了、碁、双六有

之、夕喰相伴了、入夜田樂、子刻ニ歸宅了、

廿四日、己酉、天晴、

一白川女中ヨリ平家本アツラへ共出來、先取來之間遣了、毘沙門堂ヨリ來

了、

廿五日、庚戌、下未、

一日野へ公卿補任第六書之遣了、

〔多聞院日記〕

○二大和九

正月四日、夜中ヨリ雨少下、夢ニハキカキ面八句可

一有沙汰トテ、誰哉覽發句ニ、八八億須彌<sup>ハチヤクシユミ</sup>此やうある金山<sup>コカネ</sup>と云と見テ覺了、

一須彌ハ十六万由旬ナレハ、八八ッ十六ナレハ道理ハ當ル、希異ノ夢也、社

一參、蓮常同道了、及晚大雨下、仁王經返點兩卷終功了、

廿一日、

一從畑庄大般若經一部來了、書本見事也、<sup>後合</sup>交勿ノ本也、





かぶきノ圖 東京松田福一郎氏所藏

原寸各  
縦一・三一八  
横〇・五九一



松田福一郎氏所藏

原寸各

縦一・三一八  
横〇・五九一





○この圖衣服ノ模様ニ加賀ノ文字アリ、加賀ガ舞踊ノ記事ニ因ミテ茲ニ掲ゲ、





カ舞踊ノ記事ニ因ミテ茲ニ掲ケ、





廿四日、

一逆修坊修正於納所阿彌陀院在之、出仕了、餅卅三枚在之、神名帳南井坊役  
詠ノ間沙汰之、袈裟ノ威儀ヲナヲシ讀之也、一獻在之、歸ニ雨下了、

五月十八日、

一於若宮拜屋、加賀國八歳、十一歳ノ童、カ、コヲトリト云法樂在之、カ、コ  
トリトモ云、一段イタキケニ面白々々、各群集了、

九月十七日、

一發心院詠ノ觀音侍從出來了、一段見事ケツコウ也、代一石也、

〔家忠日記〕

二 正月一日、庚申、ユカケサシムスヒテ敵ハホロフレハクハユ

ノカタキモ三來ニモナシ

二日、辛酉、ユカケコソナノレンケノ花ナラハムスヒテヒラキ道モスクナリ

十三日、壬申、佳例之連歌候、發句、

春夜ゑん行末ぞ夜し宿の松

康定

廿二日、辛巳、祝言悦こ竹のや備後、同玄蕃、同與二郎、鶺殿八郎三郎、濱松衆市村  
次左衛門、鶺殿善六郎、緒川より竹内彌次、同彌三、熊谷新三被越候、其夜竹



天正十年雜載

二八〇

のやへおとりよて越候而、松平與二郎と長刀を出し候、金ふくらん備後、太刀玄蕃、脇指八郎三郎、同竹彌次、同次左、脇さし出し候、善六と馬出し候、子の名備後被付候、お猿、

廿六日、酉家康大鷹とちとしり候て、鶴善六越候て、とつと越候、

廿七日、丙同鷹とつと、濱松小性衆被越候、振舞候、

廿八日、丁御鷹吉良と候而、岡崎へ越候由候、

晦日、己又よの鷹を是候、

二月一日、庚鶴善六越候て鷹とつと越候、中嶋へ濱松鷹師木村越候、隼中嶋へつらいと越候、

二日、辛卯、同鷹とつとさせ候、家康鷹鴈給候、

三日、壬辰、同鷹とつと候、普請、酒左より、近日境目働候はん由申來候、鷹御禮と

濱松へ同小六右衛門越候、

四日、癸巳、又木村越候、今日計とらとつと候への由申候、

五日、甲午、鶴殿善六濱松へつらへり候、濱松へつらへし候、小六右衛門へり候、

十日、乙亥、家康より給候鷹鴈各へふる舞候、岡崎舞と勘太夫越候、忍得しおり、

あつもり、二番

霜月十二日、己卯、同俳諧之發句

元日 春やまは今日うら梅の匂ひ哉

十月 ひろ袖や誰うふとこ迄も神無月

九月 おしめとも人ころ菊の盛哉

同 おる袖も菊はくちを此あませ哉

三月 名よしをへおる人ほへよ犬櫻

〔千句聞書〕

天正十年九月廿五日於北野内會所

何路 第一

色も香もわけてハ分つ花野哉 禪興

きりのほろけ此ひるき山願主

水上をあらハ池の月出て 紹巴

何人 第二

塵ひちの山下露や四方の海 昌叱

雨それとさる秋の川々 禪永

天正十年雜載

且散し木のはハ波に流きて 宗務

何木 第三

外までも澄や千里比空乃月 心前

更て猶と衣うつこゑ 忠治

秋寒きりりけれ枕夢絶て 紹興

何衣 第四

草ふくま虫の音もらせ松の風 禪祐

うこふ初のをさむき比 宗深

二八一



一字露顯

山乃そも分ぬ夕乃霧ふりて 壽忍  
 一字露顯 第五  
 咲うふみきハふひりぬ小萩うな 兼如  
 野分めれさる夕暮乃露 紹巴  
 虫の音をえらひ捨てやうへるらん 學純  
 山何 第六  
 秋乃夜を霧此とハる朝戸哉 宗務  
 名残まさとひぬ月のむら雨 昌叱  
 横原の中は梢の色めれて 心前  
 何鳥 第七  
 川鷹の聲ハ隔ぬ雲ぬ哉 紹興  
 いろよ早田のなひく末ノ 能云  
 蘆のそ比るよ程もあへぬ露みへて 能安  
 初何 第八  
 入跡も紅葉の陰や夕附る 乘海  
 鹿の音と抜き岡越乃みち 兼如  
 時雨行秋の山風吹そひて 忠治

何田 第九

鹿の音をまよふ遠野へもふし 禪永  
 たりもつくさぬ花の萩り枝 心前  
 一々とは薄の末をうけこめて 禪祐  
 青何 第十  
 龜の上比山ふりなま菊乃庭 紹巴  
 ううふ紅葉をひとす池水 禪興  
 冷しき波を砌のをし鳴て 昌叱  
 玉何 第十一  
 山松の千世比色そふ若葉うな 白  
 去年よりふとし生ふる村竹 紹巴  
 雨過る軒を涼しく風吹て 由己  
 何人 第十二  
 空に聲名もいや高し時鳥 昌叱  
 若と小花の咲ゆくみれ 心前  
 重ふれる岩尾を瀧やめくるらん 徳順  
 唐何 第十三

聖護院道

大村由己

羽柴秀吉

〔歴代古案〕 十

天正十年雜載

みる人よまさるゝ程や夏乃月 禪永  
 よひ更らとの山ほとゝきは 壽忍  
 うさゝれはしるあうらの夢消て 友益  
 薄何 第四  
 行水のみとりをつゝむ早苗哉 文閑  
 きし絲の柳まはりそふう夢 紹興  
 螢とふ跡を夜舟のふるへにて 怨云  
 花之何 第五  
 瀧落て涼しさつもる汀うな 禪祐  
 砌りよさるゝ夕たち乃ちと 治清  
 露々るる簾よ月もぬきく 紹巴  
 何衣 第六  
 草も木も時を知てふ茂りうふ 正繁  
 水鶏よ明る谷の戸乃雲 既在  
 川ふこの音を枕よ敷そへて 貞滋  
 山何 第七

二字反音 第八

まつ方よ鳴音やくもる郭公 宗及  
 枕よたしむみしう夜乃月 徳順  
 國の戸ハ夏ふた風の袖ふきて 全阿  
 夏之夜ばいさよふな月のさうり哉 心前  
 名残涼しきふはの外乃雨 宗可  
 うさへより桐の下葉比散初て 紹興  
 何路 第九  
 たむろをる早苗に近し秋の色 紹巴  
 かこふあさりも夏ふり露 文閑  
 衣手は泉の本よふつさへて 既在  
 夕何 第十  
 涼しさに誰も立よる木陰哉 秀吉  
 うへし田草をとりうへる道 昌叱  
 山々くる堤の行ふ水うきて 禪永



天正十年雜載

天正十年十二月吉日

景勝公御夢想連歌

てる虎乃曇りふ世比光哉  
 此よすふふしのいふは款冬  
 春比水岸邊をふこやふえつらん  
 長閑にはるゝ雨乃あさひけ  
 燕の軒端にちくくさえつりて  
 けふりたふひく里乃をちくさ  
 三ヶ月の空よや風のわたるらん  
 をくさへ露もそつ秋乃ころ  
 たとへても何をかいそんとあすまき  
 ちきる木比こや波乃うねくさ  
 鶯のをむ片山うけの池ふくく  
 寺よりけなる谷乃さしいり  
 うつし繪やうりさハとても鐘乃こふ  
 見ても見ありぬかゝる名ところ  
 みしう夜乃月のぬくるやまふらん

御 同 景勝 意作 尊忠 珍阿 僧阿 重阿 松慶 宗白 一露 尊忠 僧阿 珍阿

こと比ふりてはくるきぬし  
 うちつけハ互よつゝむ物ふきや  
 文乃返しのかねもとせり  
 三吉野や花乃さうりや待ねらん  
 さくらくもとよ日敷ぬやま  
 鶯のとハぬもよしやうとり庵  
 いり消いてん雪のふと道  
 中よほる竹乃寛の水待て  
 よる乃あらしのまよ比ふるこふ  
 うちうよ野へのむら萩うとよりよ  
 鹿比目とるや月乃たそくれ  
 露霜抜けてせふ巻き人ハいさ  
 戀てふ戀のおもひとえすや  
 うをけふりいりの世より比富士比嶽  
 うちふらめつゝむくふ東路  
 旅ころも宮山を遠くとち出て  
 をのうせねとやうへる雁う音

重阿 宗白 松慶 一露 意作 珍阿 僧阿 重阿 松慶 宗白 一露

二八四

浪乃うへほ乃霜とつゝ風もふし  
 日なふうかれとおもふ釣り舟  
 雪なうらさむうらぬ空ハ春よ似て  
 せし比うちよも咲や梅う枝  
 か泥ほよりたく香比ぬるまへわとり  
 ものをはいそて袖や引らん  
 忍ひぬる中はまはばばとそりよ  
 目くハ榜よせてちきりくはせり  
 とせふせくとを袋乃瀬をそやこ  
 山はもみちよふるやならすや  
 待う終し門田乃おく比色付て  
 秋の小鳥乃ゆさるこふく  
 さし比ほる朝日よ月やうくる羅ん  
 すねしわうれ乃名残うなしを  
 目すれては又おもとるゝひとり終よ  
 う泥ぬふゝ液と身を巻なくさむ  
 いうて我花ふき里よ生るらん

松慶 宗白 意作 重阿 僧阿 珍阿 松慶 宗白 僧阿 珍阿 松慶

うすこくをほぬ春のあら磯  
 たつとしハ浪よを見ゆるきのふ今日  
 水を鏡よむうふ老らく  
 ぬりつもの雪乃多しきやつらうらん  
 朝きよせせしそ比ゝ吳竹  
 まと泥より夜床をふるゝむら雀  
 むるせや月乃影ぬうふらん  
 青空比最中の秋にふかひきて  
 をく露ぬうきいやひこ乃山  
 たとり行道そてしふき五月雨よ  
 程をし旅よ笠巻ぬりたる  
 ををかばるすうとを見えむばつうしふ  
 絲や乃待火杖とをしけちたり  
 うらむほしさとあきとや向さらん  
 いつそりふらぬ人乃か終と  
 袖さむく時雨そめぬる無神月  
 八雲をそ羅ふ嶺の松風

珍阿 尊忠 宗白 一露 宗作 松慶 僧阿 珍阿 意作 宗白 松慶 僧阿 重阿 珍阿

天正十年雜載

二八五



いさねよく心哉すまを柴比庵  
 世乃おをか夢や身をそふるらん  
 二道をおもひをてたる手枕よ  
 なよ哉ふしよ又々こちぬる  
 兎よ角よ袖やふよ此淵からん  
 鐘乃こゑ聞ゆふへあつつき  
 もとむるをたち出夢るをいく宿り  
 うら／＼浪よふるよせを舟  
 三乃江のなか光いつきうふらん  
 霞光る月はおふし夜ふ／＼  
 こくうすく色あまとかり春の花  
 つほこましましてさ夢るふちか枝  
 雨露や山々と分てぎくくらん  
 高絲はきえぬ秋乃むら雲  
 ひを／＼よおつる岩間の水比をせ  
 駒ををめつよ時ぎうつきる  
 おさまきる玉は弓矢をふく後よて

一露 松慶  
 松慶 宗白  
 尊忠 珍阿  
 意作 僧阿  
 珍阿 松慶  
 一露 僧阿  
 僧阿 宗白  
 松慶 珍阿  
 松慶 意作

酒乃むしるよゆらく武士  
 稀よあふ友やかへさ哉忘るらん  
 夜をふかし夢り埋火乃をと  
 月をを／＼さふく空の風寒て  
 千鳥なきたつ淡路去ほやま  
 あさ夕よ關守須磨比身ハくるし  
 玉乃うてなとた此む管ふき  
 白露比涼しくするあしをぬき  
 まよ來ぬ秋よおもふ虫乃音  
 一もと乃蓬かをふよ風ふきて  
 かり絲のまくらそらふ夜すから  
 さやかなる月に心やうかるらん  
 うつやきぬたのをと乃たえ／＼  
 遠近の露のよをかをふらをけり  
 ふりおて光くるむら雨の空  
 山／＼此花をやハるのいそくらん  
 百千の鳥のこゑ静なり

僧阿  
 意作  
 宗白  
 重阿  
 重阿  
 松慶  
 珍阿  
 意作  
 珍阿  
 僧阿  
 宗白  
 松慶  
 僧阿  
 重阿  
 意作  
 尊忠

御二句

景勝公一

意作十四

尊忠 八

珍阿十四

僧阿十四

重阿 十

松慶十七

宗白十三

一露 八

〔上杉年譜〕

景勝二十七

同日

同月二十四日、公御夢想ニ、輝虎ノ曇リ無世ノ光哉ト

見玉フ、此一句御家相續ナシ玉フトハ申ナカラ、御武運ノ程謙信公ニ相似

タル故トテ、老臣彌此ヲ祝シ奉リ、此上ハ歌伯ノ輩ヲ召シ、繼シメ然ルヘキ

旨申シ上ルニ付テ、今日吉辰トシテ御連歌興行シ玉フ、○下略、景勝等ノ連

代古案ニ、大抵同ジ、

〔後薩藩舊記雜錄〕

本十三 助之丞藏

天正拾年九月廿二日

第六

賦何木連歌

折殘を紅葉は風のなとり哉  
 嶺にはるけはさ哉しう比聲

賀雲  
 玄佐

長き夜の明々たちかくたき出て  
 いさなはきたる旅のともなひ  
 ふむ跡や道の行衛よ續く覽  
 眞砂のう巻よあそふをし鴨  
 冬枯の蘆邊にを光る水晴て義久朝臣

久隅  
 常榮  
 芳溪  
 珠長

天正十年雜載

二八七

川上久隅  
 鳥津義久  
 等ノ連歌



月影さむみ暮りたるなり 篤和  
 きえ残る雲ひとむらの天比原 忠棟  
 聞しあらしや吹よはるらぞ 久正  
 歸り來る都のうちばまつりて 智善  
 いつくにかよふ夢うくるしき 其阿  
 六ろさへ我よをばらぬの思ひ 可丹  
 つらきもさすり鏡をり見る 友治  
 行か危り結ひなきたる岩手水 宗運  
 夏波をくらひやまかけの庵 陽運  
 ほのめきて月も夜をまつ秋比空 玄佐  
 六のころならしはつ鷹比聲 賀雲  
 遠近に打つけたる唐ふるを 常榮  
 かりゆく袖のいろく野のそふ 久隅  
 雪とのみ散りふ花をとばく見て 珠長  
 暮てさひしき春の山さと 芳溪  
 風立はうす霞とや成ぬらん 篤和  
 ひとつふさやくせよのあら浪義久朝臣 義久朝臣

とせれはたりある鶯の打むきて 久正  
 つくりをて田は人がけもなし 忠棟  
 管ふきのとこ夜とこるハ朽残り 其阿  
 道は木比葉のかさなきるころ 智善  
 山々せに岩のむら猿聲ハして 友治  
 六ろをうるほは夕暮比そ屋 可丹  
 待夜半よさハリとなれる雨をうし 芳溪  
 月にこゝろ抜つくは眞木比戸 宗運  
 旅ゆくや古郷おもふ秋ならん 久隅  
 霧にまよへる波の舟人 玄佐  
 明ててよ流きもとばき麓河 賀雲  
 か危りなれてやうら千鳥なく 常榮  
 うかるよばやとりをなしやむら鳥 其阿  
 あらしのか霧の雲はやき末 珠長  
 みきは將雪氣波いそくけし泥よて 忠棟  
 卯の花うきのうつろをる陰 篤和  
 ほさるよよほとよ泥過はうひあ露し 友治

ふれそむくひ小くるよ河岸 可丹  
 答ぬをよふよ心やつくすらん 義久朝臣  
 あまりなるまてはちうハ中 芳溪  
 絲を乃ひまをり入月のまろき夜小 久隅  
 ならは扇巻をくとしをな泥 久正  
 螢飛たろくれと泥の秋更て 珠長  
 ふよよに分はまけき道芝 其阿  
 花乃後吉野のこやはさひしきよ 玄佐  
 とふ危き人や呼子鳥なく 芳溪  
 けふう危る春乃行衛ハしらほほし 宗運  
 降はうすこのたち巻残る 常榮  
 天乃戸の明はなるをて雲引て 珠長  
 出るよま日のおけのさやけさ 義久朝臣  
 武藏野や草乃葉をのうら枯よ 久隅  
 かさ敷なるよ露霜のうて 友治  
 と泥くは夢波をゆるは秋乃風 玄佐  
 月にをしはしうそは手はくら 芳溪

つをねる恨をさらにはひくとこ 智善  
 はては誰に巻いとよきの雪 宗運  
 學ふ危泥道はおほきもなばさり小 其阿  
 あへは六ろのとほるたのしき 珠長  
 問たひにほさしうりねるうらなきや 芳溪  
 ゆきつう危りつわさるはし板 常榮  
 河水の音きくはうり宇治比里 友治  
 ふく笛を危るふ乃舟乃うち 久隅  
 思ふとちなきけたくめるほしにに 篤和  
 下にしとし泥ふよる見へけり 忠棟  
 萩をよき萌出るよまむをほよれ 珠長  
 花さうぬ間乃野邊のいさなひ 義久朝臣  
 露にぬきうくひをと乃と打ばふき 玄佐  
 人にしられてきよは啼なり 宗運  
 埋木はうふとしをなき春日山 珠長  
 さとばうけてやつをるしら雪 可丹  
 軒ちかくすよ危いと泥さハき來て 久正



くはくはな哉風乃吳竹 智善  
 立よれ袖引うばらからとちに 芳溪  
 荒れしとふるはあるしなる月 其阿  
 我身此とを乃秋にし歸りきて 義久朝臣  
 露乃ちきぎをむをひ捨たる 珠長  
 恨と哉やいひさけられて残さまし 忠棟  
 こゝろはうせの世ならぬそき 其阿  
 風々ハリはほに々とほに興津船 玄佐  
 あまつほしともへこそわをね 義久朝臣  
 里く此眞柴のけふりなひきひ 宗運  
 にきひひにゆる民をしらるゝ 芳溪  
 たりく絶せぬけふ乃神祭り 智善  
 乘なら危たるふま此足とに 久正  
 歸りゆく道はるなる小鷹より 久隅  
 千種乃花や家つとにする 可丹  
 なくさこ八月の秋にしたほきや 友治  
 冬ふもり哉とあらはししの比 宗運

たなしくは似たる人よと尋ねきて 常榮  
 あそれ跡まてたもふたらち終 其阿  
 改めぬみちは三とせ此うちなむや 芳溪  
 國のつらさやをみつきぬへき 久隅  
 明石うと浦のみるめ此とよならて 珠長  
 よる危りてや舟わとむらむ 義久朝臣  
 うけ一木岩ほにかをむ花乃色 篤和  
 四方に音せぬ春の朝々せ 友治  
 賀雲 三 智善 五  
 玄佐 七 珠長 十  
 久隅 八 其阿 八  
 常榮 六 可丹 五  
 芳溪 十 友治 七  
 義久朝臣 八句 宗運 七  
 篤和 五 陽暹 一  
 忠棟 五  
 久正 五

〔有村文書〕

摩〇薩

〔外題〕 天正十年十一月廿五日

連歌

天正十年十一月廿五日

賦何路連歌

水きや水も枯生此岩すゝき 龍伯  
 更きはをしの床々ゆるふゑ 洞庵  
 月ひとりさし入谷のたぐさえて 珠長  
 うすみうれつゝ春さけをま 爲舟  
 いつくよりまつうちとくる雪からん 實増  
 そつうにこゆる野邊の下もえ 能豊  
 此る駒抜しハしやをむる道のをゑ 洞庵  
 且とほほとまつをちの川舟 珠長  
 五月雨に里の棚橋ととえして 爲舟  
 しなりてむまもあらぬ蘆ハラ 實増  
 跡もこそ今は難波のこやこなれ 珠長

みきり八月のひくりしくうけ 洞庵  
 たきいつる夜半のさむしるひやうちに 實増  
 身も露とさばきえね衣く 爲舟  
 いうにして夢にハなさんうつゝうは 洞庵  
 あらしの松の戸をとつるくれ 珠長  
 ひろひこし爪木のねふりあさむらに 同  
 やつしそてゝのそて此あそれさ 實増  
 むろしとゝをすゝまなくしとハれて 同  
 もとをさゝせるもちばまとハし 洞庵  
 花の香抜しるへととめて入山に 爲舟  
 うすこをけくるか務のまにく 同  
 うくひを此やゝしのゝめにいさなハれ 洞庵  
 むをひもあへぬ春のたまくら 同  
 秋の夜此いくよもわらし夢のうち 珠長  
 うらこを萩のふゑなすゝめそ 同



露もろき色をかなしむ小萩原  
 人のかよみののこるふる跡  
 なびさりに打すきましや志賀のうら  
 關こえてよななめせらるゝ  
 山はなと住こしかさ萩をさつらん  
 身をすてぬるや友をたもはぬ  
 さねとつをいくさの場のこゝろにて  
 國此そてまてなひかぬハなし  
 いつくにもこるらん月のあさかすこ  
 ゆくゑハ春のうこつらのふれ  
 波のうゑ此花ふきなうはなとか務  
 こすゑむらゝひらのやま松  
 なびかハを雲井の鶴のこゑさひし  
 霜夜此かれののち此あけかよ  
 すこしとよほとるこなりな老か夢  
 さらにたゆこもやらぬたこなひ  
 むつましきいもせの中もゑたよめて

爲舟 實増 同 爲舟 洞庵 珠長 爲舟 實増 爲舟 洞庵 珠長 爲舟 爲舟 洞庵 珠長 爲舟 實増 珠長

吉野の川やそてに落行  
 水上をとめて御祓の瀧の音  
 神のまはとやこゝろすむ山  
 天の戸をさなから月にひらかせて  
 悲しかりつる秋の夕やこ  
 いなつまのかけにも道をしのひきぬ  
 ほさそややかて衣手の露  
 焼火こそこととふやとのたよりなれ  
 ふゝ後にかけてしたく此山かけ  
 花守のゆるすことのは聞そめて  
 かすこの關ろかきめとも行  
 なくるゝにやをらふ春のかり此こゑ  
 たつる琴ちもまたいとけなし  
 一筆のたさゝしさをいつしらん  
 うつす繪嶋ハ大方のちと  
 庭ひろとせたる池のかたそかり  
 くらぬや月のこふねなるらん

洞庵 實増 珠長 爲舟 洞庵 爲舟 實増 珠長 爲舟 洞庵 同 珠長 爲舟 實増 珠長

七夕のちきりのそしめてもいさ  
 あさよも人はなとあきのかせ  
 つとすてぬ我こそうれしのふくさ  
 いつまでなきうすにをれなん  
 ねふ此日も入あひのかれの音つきよ  
 なびふらうらむ山に住そや  
 一坂をのほきは夏此つきて來ん  
 なくほとよきをきよてうれしき  
 たそりれを松の藤なこほりそひ  
 さくらちりりふりせのしつけさ  
 かすこやよさなひく雨のはれこり  
 あさなきふるしをくあまのうら  
 蘆の屋ハ中に有りてや見えさらん  
 おひかさなりてしけき竹かき  
 夏冬をうぬるすまあはうらやまし  
 あつめてまなふ雪よほたるよ  
 月よしもめてよハ時抜うつさめや

洞庵 爲舟 珠長 洞庵 爲舟 珠長 爲舟 洞庵 實増 珠長 爲舟 洞庵 同 洞庵 爲舟 珠長 洞庵

あらしをまさて落るあきのそ  
 あさかほもはかなしと世やたもハほし  
 何故かは身よしゑて歎かむ  
 えよしとよ生れくるよりささほりて  
 六ろかハしつ年は經よなり  
 はらからやなれてすむらんうち此里  
 うとれ高津の宮のふるこ  
 一六ふよいかて程と程過しん  
 なこよ落さてきらん法うは  
 まくらゆふ野寺はほともちかほよ  
 あり明々たる月の下ふし  
 むらすよきふきしくせにうとよりて  
 うつらもくれや身にしきてなく  
 かよひちの霧此まつくをそての上  
 をもき眞柴に舟そちいさき  
 巻こぬ茂もいさしらなみの早瀬川  
 おらすはいちに花のうゑるさ

實増 爲舟 同 珠長 洞庵 爲舟 實増 珠長 爲舟 洞庵 爲舟 實増 珠長 爲舟 洞庵 爲舟 實増 珠長



新納忠元  
青木天神  
社奉納法  
樂發句

千句法度

〔後薩藩舊記雜錄〕

十三 在村田清右衛門家小掛物

天正十年八月廿五日、青木天神法樂、  
一かよふ野の萩や小鹿の思草

忠元

〔後薩藩舊記雜錄〕

十三 義久公御文庫拾六番箱三卷中  
有之トアリ

千句法度狀、

御千句法度、

一一句一直、付雪月花、

一出合遠近、但聲先次第、

一諸禮停止、

右所定如件、

天正拾年九月廿一日

〔後薩藩舊記雜錄〕

十三 眞幸吉田天神社奉納

陰天

寶前

詠十首和歌

修理太夫 義久

立春

初春乃々ふき千里の得う満ちもみなひくへきあさうすこりな  
華

念との春をよそよれし流々みよし此々花よ吹く此日をおくりけむ  
郭公

半天の月はいねともほとあれかゝるさむすれるやま月と々きそ  
萩

來る秋を去ら満得しさにせひよれば萩のしと葉を捲よとあふふ  
月

眞幸吉田  
天神社奉  
納和歌

義久ノ和  
歌



かけす知る月よは夜半此あつきをもたねるはあつめあつしはるうあ  
雪

草も木もぬましを雪の明不のききふりやさとのあるへあるらむ  
待戀

高砂の尾上あら祿とよぬ人(股アルカ)茂まつこそひさしかりをれ  
逢戀

はきあをおもひくくまきよし(股アルカ)もあふこそうらみわたるま  
山松

足引のやまとなれより色うへぬ松のうしこ髪をやまくらむ  
神祇

満もたてふ八十氏人のまえの世もわきて祀るき神そまを覽  
天正十年五月廿五日

〔那須忠良氏所藏文書〕

あつきの加野そうまう播州へくとり候、留守中女子のたんまいとして、八  
木五十石うし遣候、慥可相渡者也。

繪かき狩  
野宗秀

天正十

正月廿一日  
い藤與左衛門尉殿

秀吉(花押)

〔河内神社所藏太刀銘〕

備前國住長船

祐定作

天正十年

二月吉日

〔能登中居鑄物師傳書〕

叢○加能越古文  
三十八所收

てん明(下野安蘇郡)此いのしよ利、ぬる火をちまやう作せしてまん上のよし、御心へ

候て、眞繼み申せ奉らま候へく候、殊に繪とも此うゆくしき見へよるまむ

おぼし知し候、うしく、

印

天正十年八月十八日

日此、大納言との

天正十年雜載

二九七

天明ノ鑄  
物師



醫藥、治療、疾病、死歿、

〔言經卿記〕<sup>三</sup> 正月十二日、辛未、天晴、

香水

一藥師堂宗永香水持來了、

豐心丹

二月三日、壬辰、天晴、五墓日、

保童圓

一冷泉へ罷向了、豐心丹調合之間、宿砂川芎等進了、茶有之、

一七宮御方へ保童圓二百粒進上了、

六日、乙未、天晴、

一竹田伊與守へ保童圓二百粒遣了、

十二日、辛丑、晴陰、

一葉室侍秋田久大夫來了、愛洲藥所望、遣了、

愛洲藥

廿八日、丁巳、天霽、

一持明院入來了、不闕常用方返了、熟地藥、白芷所望之間、二兩ツ、遣了、

不闕常用方

三月四日、壬戌、天晴、

一藤金吾ヨリ愛洲藥所望之間、一包遣了、

七日、乙丑、晴陰、

一七宮御方へ保童圓粉進上了、以下女七宮ニ保童圓進上ノコト略ス

九日、丁卯、天晴、

一古市入道召遣了、北向鼻血出了、診脉了、藥事談合了、方書之與之了、

古市宗超

十五日、癸酉、雨、未刻ヨリ晴、

一白川ヨリ七味圓方被借給了、七味圓方ヲ雅朝ニ返スコト、本

七味圓方

四月七日、乙未、天晴、入夜下未、

一冷泉ヨリ蘇木所望之間、遣了、

一小川善大夫女九才、腹中之由、藥所望之間、五貼遣了、

廿八日、丙辰、天霽、

一冷泉ヨリ愛洲藥所望之間、遣了、御局官女小侍從同藥所望之間、遣了、

五月四日、辛酉、晴陰、

一五疳保童圓一濟調合了、

十四日、辛未、天霽、

一小川與六來、近日若狹國へ下向也云々、暇乞ニ來之間、香齋散一包遣了、又

香齋散  
茶調散

善大夫一昨夜ヨリ、所勞之由申之間、茶調散遣了、小煩也云々、



十八日、乙亥、下未、晴、  
一水無瀬入來、北向額煩脈事申、則藥三包賜之、藤金吾被來了、兩人ニ粽勸酒了、

廿日、丁丑、天晴、

一日野ヨリ使者有之、所勞大驗氣之由、此間見舞罷向、又使者ヲ遣了、禮ニ先

來了、次香齋所望、遣了、

廿二日、己卯、天晴、

一御仕了、小五郎瘡病之由、藥二包遣了、

廿六日、癸未、晴、下未、晚大雨、

一水無瀬へ彌二郎ヲ下了、北向勞大驗氣之間、猶々藥所望、七包到來了、略、庭下

廿九日、丙戌、下未、

一毘沙門堂ヨリ、入夜愛洲藥所望、遣了、

六月三日、己丑、晴陰、

一水無瀬被來、北向藥之事申、七包調合了、

十九日、乙巳、天晴、

一宗超來談了、香齋所望、遣了、

廿日、戊午、天晴、

一毘沙門堂へ罷向、差活、川芎、枳殼少ツ、令所望了、次西林法師へ罷向、陳皮

令所望了、

一毘沙門堂ヨリ愛洲藥所望、遣了、

廿六日、壬子、大風雨、

一小川善大夫、同與六、練意、鹽治、新左衛門尉等ニ、香齋散遣了、

廿七日、癸丑、風、晚晴、

一香齋散一包ツ、竹村兵部丞、立入、中井宗茂、道喜、渡邊又七母、新造家ニ、速

水新二郎、黒川、同繪馬屋、羽田、清水、江村等遣了、

廿八日、甲寅、天霽、

一古市宗超入來了、大澤右兵衛大夫去九日ヨリ傷寒之間、予藥與之、大驗氣

之處、三四日已前ヨリ再發之間、又藥遣之、驗氣遲之間、宗超ニ申、人ヲ相添

遣了、



吐瀉

七月二日、戊午、天晴、  
一古市入道呼遣了、サウメン振舞了、阿茶丸今朝ヨリ吐瀉之間、談合、藥調合

藥節

與了、  
一柳原ヨリ藥節借用之間、遣了、

腹痛吐逆

廿日、丙子、  
一宗英藏主來、婦人腹痛吐逆等談合ニ來之間、存分申聞了、次茯苓、霽香少ッ

墮胎藥

九月七日、壬戌、天晴、  
一興正院官女（佐藤）小少將方ヨリ、小川善大夫へ書狀ニ、懷妊三ヶ月也、然者ヲロシ藥事申由有之、種々斟酌ナカラ七包遣了、

調中散

九日、甲子、天晴、  
一葉室侍秋田與左衛門尉後家腹中之由、藥所望之間、調中散加減五包遣了、  
十日、乙丑、天晴、  
一葉室侍秋田久大夫來、昨日腹中藥遣之所ニ驗氣、猶藥所望由有之、十包遣

了、茶子振舞了、

十二日、丁卯、天霽、

一安禪寺殿御侍市川女房腹中氣藥所望之間、三包遣了、

十三日、戊辰、天晴、

一安禪寺殿市川女房腹中驗氣、猶所望三包遣了、

十六日、辛未、天晴、

一大和入道宗恕被來了、琢要方金瘡方、令借用之處、持被來了、暫令雜談了、

十九日、甲戌、晴陰、

一大和宗恕來臨了、○中金瘡藥共相傳了、又軍敗傳共、又氣候共相傳有度之由被申、大略令相傳了、又氣卷三卷借用遣了、要方及ビ氣卷返却ノコト見

廿二日、丁丑、天晴、

一大和宗恕ヨリ、疵內藥祕傳之藥方書之被送了、祝著了、

廿三日、戊寅、天晴、

一今宮執行妻來、產後ニ相煩之間、藥之事申問、愛洲藥一包遣了、

大和宗恕  
琢要方

金瘡藥

疵內藥

產後ノ病



大成論藥  
注膏藥方

聖教  
醫書

藥草

馬醫

誠仁親王  
御霍亂

廿四日、己卯、天晴、夜雨、  
一柳原へ罷向一盞、次愛洲藥所望之間、一包遣了、略  
晦日、乙酉、晴陰、

一持明院へ門外マデ罷向、大成論藥注、坤膏藥方等返了、  
十月十五日、庚子、天晴、

一楠長安女房衆愛洲藥所望之間、一包遣了、

〔多聞院日記〕二大和 七月十日、

一新造屋聖教并醫書迄悉以風入了、小袖、夜著、屏風同沙汰之、良勤房、禪識房、  
長善房、雇沙汰之、日中飯申付了、

八月廿九日、藥植了、雨下、近日一向不下、先以安堵々々、

九月十二日、藥調合始之、京ヨリマコ四郎下、返事無之、無覺束式也、五百卅八、

〔兼見卿記〕四

十二月十五日、己亥、略侍從馬相煩、鈴鹿久左衛門療治之、

早速得驗也、

〔玄湖道三配劑錄〕天正十年之六月、

陽光院殿誠仁患霍亂、前日飲酒過多、早晨ニ腹痛吐逆悶亂、半井通仙軒御脈

飲酒過多

玄湖法眼  
ニ敍セラ

ヲ候フ、癩證ト見テ、御脈ハ心肝ノ虛ニテ御座候ト申、諸臣不諾而退出、又盛  
方院淨勝法印御脈ヲ候テ、暑氣ト申、即御藥進上、一日一夜進上、吐逆悶亂尙  
未止、予御脈ヲ診而曰、暑氣計ニ非ス、下地脾胃虛損而、又今飲酒過多ニ因テ  
霍亂也、酒毒ヲ消スル藥ニ非ンハ不驗ト、諸臣承諾、即御藥進上ノ翌日平安、  
時予蒙法眼之號、再三辭スト雖モ、堅仰ニテ口宣案頂戴、年卅四歲、御本復ノ  
御祝事、御柄子澁谷伺候、一番ニ養老、シテ與吉、二番班女、シテ宗云、三番東方  
朔、シテ勝右、四番ニ吉野靜、シテ與吉、五番蟻通、シテ宗云、六番軒端、シテ勝右、  
七番高砂、シテ與吉、予見物ニ伺候ト、勅命ニテ、大曲侍殿ノ局御縁ニ參候、

〔寛永諸家系圖傳〕三九

大久保

忠茂 左衛門

忠俊 新八

忠員 平右衛門

忠世 七郎右衛門

忠員 宇津をあらためて大久保と稱せ、天文六年、廣忠卿十二歳比御と称、  
勢州よおとしします、此時忠員ウ兄新八郎忠俊、あらひよ一族、そ比同志比

大久保忠  
員歿ス



即安梅心  
童子

者四人と相謀、廣忠卿をむくへ、岡崎の城に入奉りし刻、忠員もまご功あり、同十一年、廣忠卿の叔父藏人信定野心ありしとき、弟比彌三郎を藏人に屬せ、忠員と、忠俊相議して彌三郎を呼、廣忠卿もまごがへまむ、こまよきて、藏人の家人おなく來りて、廣忠卿に屬、弘治元年、尾州蟹江合戦のとき、忠員あらび、嫡男忠世、次男忠佐、あらび、同志比者七人とも、挑戦勝利をえたり、敵にけて城より、永祿三年、參州刈屋十八町繩手此合戦、敵あまごをみきとる、忠員、忠世、忠佐、そ此外一族あらひ、同僚五人ともに、勤戦こまをやぶる、天正十年十二月十三日、七十三歳にて死す、寛政重修諸家譜大久保忠員譜異事ナシ

〔羽弓集〕即安梅心童子肖像

紙上公子、眼中童人、  
季冬端朔出胎、先太極真人降現之日、  
中秋廿一失命、丁然灯古佛下生之辰、  
護花金鈴在手、手持鈴、疊雪香聞灑身、著素衣、  
佳名於梅、劉梅心同異代稱、

小字ハ菊

小字在菊、章菊主浩前生因、

尊去鶴、飛入工夫春錦、道服染鶴、佛性狗、化作自□家珍、嘖、□中犬箱立其傍、

夜深一片虛樞月、寫出梅花面目真、

去歲朧月之朔、(長岡藤孝カ)丹陽府君生寧馨兒、是呼之菊童、今茲八月廿一、俄然逝矣、盛林柏長老諱之稱梅心、字之號即安、慈母慟哭之餘、命畫工、令繪其肖像、以需予著贊詞、不獲默止、綴俚語贅之云、

天正第十歲舍壬午菊月廿有一、前禪興永雄野衲讚

〔諸寺過去帳〕

下上總風早莊平賀邑本土寺過去帳拔書

關相玄酬居士 高城下野守天正十日  
先賢院宗調 正松山上田案獨齋天

〔下總舊事〕

葛飾郡三大谷口古城

天正十年壬午十月より、(高城)胤吉清秋胤辰按に、病ふ伏し、千葉よりも、外孫の由緒あるより、病を問しむ、胤吉清秋胤辰按に、又十一月六日卒、中金杉廣徳寺に葬る、法號高城院關相玄酬居士と云、男辰千代十二歳清秋按に、十歳ハ、諸

永雄

高城胤辰  
上田案獨齋



老臣後見之、此胤辰武剛ふして、智略かくとあく、又蹴鞠堪能の名あり、千葉北條よりも、數ヶ所の恩賜あり、十二萬八千石の列侯とぞありふる、

〔廣嚴大通禪師謔語集〕

〇七

甲斐

叔應伯禪師傳

甲之信盛爲始祖

三〇八

信盛寺叔  
應文伯

以船文濟  
ニ依リテ  
剃髮ス

太栖元裔  
ニ參ズ

信盛寺ノ  
開山トナ  
ル

禪師諱文伯、字叔應、嗣法太栖、甲斐州山梨郡人也、姓源、生甘利氏家、幼年投于龜阜、依以船剃染、性純篤正直也、師日常交世俗、不喜班下位、傍僧詰云、汝後生以慢心不遜讓耶、云、我生在佛家、苟爲三窟一數、以衆中尊、受人天供、法中威儀也、衆人聞此言、稱有其法器、參次船、師翁示云、厥學道如揉火、逢煙未可休、直須待於火星迸散時節始得、云、恁麼甚處是學人用心處、船云、喫飯時作麼生、師敬謝答話、便禮拜、後丁船之歿、參太栖於青松、栖茶話次云、有此一段大事、名爲本來面目、汝向未生前、識得此人、一生參學事畢、師聞此親言、念於這事、忘飲食者有年、一夕參次到深更歸堂、不覺以額撞著露柱、當于火星迸散、負痛號哭、豁然省未生前事、栖見大笑云、這漢徹也、明朝必請、按排明窓下、師便禮拜、夜半密傳衣受印記、時岩手領主能登守源信守、新開於信盛禪刹、請師爲第一祖、厥道偉流河北、化緣既了、聚衆茶話談笑、中而如眠逝、實天正十壬午年八月念五日也、

贊云、

崢嶸麟逸角、全具鐵牛機、踞法寶高位、眠塵世謗誹、未過尊貴路、爭著本來衣、

坐斷空王宅、回塗隨是非、

〔廣嚴大通禪師謔語集〕

〇四

甲斐

匠山哲禪師傳

廣嚴前任第七祖

三〇九

廣嚴院匠  
山長哲  
箇學光眞  
グノ法ヲ嗣

戸隱山ニ  
入リテ剃  
髮ス

正覺堂ニ  
參禪ス

禪師諱長哲、字匠山、嗣法箇學、信州筑摩郡人、姓村上氏、義照（光力）支裔也、幼而父歿、長母畜養、年十有三、伴母詣父墳墓、備禮投地、涕淚問母云、父在墳中耶、母云、只留遺骸、不知魂靈去所、云、還有知人麼、母云、曾聞佛知六趣浮沈、云、與麼我爲父出家、成佛道、知真靈去所、母爲希有子言、相共登于戶陰山、剃髮緇衣、深入圓頓一實法門、忘二時飲食、一十三祀、異日有遊歷志、遍訪山陰山陽之諸善知識、於教外宗大有懷疑、入于羽州羽黑山窟內、修禪三年、麋鹿擁後馴伏、庶民感動殊勝、出山徑、到於常陽戶崎邑、參正覺堂、即問、如何是教外宗旨、堂云、汝何處到此、問、云、北陰道、堂云、行程幾何、云、三百里、堂云、放爾三十棒、云、不知過何處在、堂云、好個死漢、徒蹈破革鞋、痛痒亦不知、師禮拜、乃留錫親參、晨昏無怠、曾光眞禪師住龜山、聞盛化於當世、師曳杖直到來、即問、如何是教外宗旨、眞云、教外無宗旨、云、還有教內麼、眞云、教內無宗旨、云、與麼如何會、眞云、唯滯兩邊、寧知一種麼、師禮拜去、一日聞誦僧（俗稱カ）金剛經、到若見諸相非相、即見如來、忽然領教外旨、巾瓶三



廣嚴院 =  
住ス  
眞空無相  
禪師

座禪院昌  
廣

白川地子  
錢新町四條  
地子錢

歲、繼席住龜山、高建法幢唱洞上曲、四衆輻輳規步綿々、德化滿方隅、道行達帝都、正親町天皇元龜庚午年八月、勅賜紫衣并眞空無相禪師號、于時國主有拒師事、退席龜山、惜法運不愜時、住庵塾居信州伊勢山、與山水共終老朽、行年六十有五歲寂、天正壬午孟冬初五日也、

贊云、

頂門有眼、足下無蹤、雪庭獅子、葛陂化龍、喫紙中藥、悟教外宗、搜洞源浚、逆禪河溶、單提利刃、孰敢當鋒、君恩滲々、紫服禮々、惹且病衲、是那侯封、

〔晃山列祖傳〕第五十世權別當昌廣法印傳

法印、名昌廣、未詳其姓氏、跳出塵寰、剔髮變衣、既習台教、服勤久之、依之聲光赫如、門輩歸仰、遂永祿四年住坐禪院、爲權別當、正親町皇帝天正十年十一月晦日、俄謂徒曰、他方世界有於夙緣、我即游化、言訖而逝、

知行、年貢、課役等、

〔兼見卿記〕

四 七月十四日、庚午、中白川地子錢皆濟、新町四條之地子、今度惣次自當方押置、不可有別義也、

九月一日、丙辰、天晴、神事如常、社頭へ神供、青女尼下行、備前春長軒孫子法師(分并直略)

田中領地  
子錢

嵯峨供御  
人ノ座

粟津座

御倉町地  
子

五條口地  
下代

使者 新六來、田中領地子錢之事、當所在之、七月也、于今不沙汰、今度子法師令領知之折番、惟住五郎左衛門、羽柴筑州、池田各加判、折番持來、可申付候由案内了、本郷次第聊不可有別儀之由返了、對面使者進盃、略下

〔言經卿記〕

三 三月六日、甲子、晴、晚雨、

一 嵯峨供御人シヤウヤ來、葛一袋持來了、公用之未進分雖申付、座人無同心之間、折番可遣之由申間、則遣了、

廿一日、

一 粟津座人ツホ商買之處、先日從一條關白領トテ相留了、昨日來申間、則一條殿へ申處ニ、御客來之由有之、今日又使者ヲ進之申了、座人共來了、種々談合了、

五月三日、庚申、天晴、

一 御倉町内上粟津屋作分非分申間、去年夏地子ヨリ錢不取之、今朝畠ニ竹ヲサ、セ了、

一 五條口下代田ムラ、カウ田等來、一貫文持來了、正月已來之算用狀持來了、九月廿七日、壬午、陰、夜雨、



粟津座人

梅津年貢

天正十年雜載

三二二

一粟津座人公用之儀進納之間、折昏調之遣了、  
 十月十四日、己亥、天晴、  
 一西梅津へ當年年貢見可納之由申、彌二郎遣了、五斗納所了、珍重々々、  
 十六日、辛丑、天晴、  
 一東梅津麥之事申遣之處、見納了、麥三斗六升三合三勺、又一斗代米五升等  
 納了、

廿三日、戊申、天晴、

一梅津へ兩人遣了、米三斗納了、

〔多聞院日記〕○二大和 十二月廿七日、

一字多今井庄安居米、去年へ十石上之處、當年へやう／＼八石ト申、無同心  
 一打置了、春可及回答者也、

〔伊勢古文書集〕

藤波祭主様御參向之儀に付御墨付

宮川津料、内膳こ預ヶ置候之處、末々爲私申付由候、無分別候、於向後橋村  
 申付候間、如内膳時之可令代官候、謹言、

天正十年

伊勢宮川  
津料  
代官

今井莊安  
居米

五月十一日

橋村新太郎殿

慶忠御判

〔慶光院文書〕

○十伊勢

本あいう跡まきの分、

さい所 ありおさ

とうのうしろ こしやうす

合四石八斗七升へ 野田 ようす

寺家うしろ 四町うつ不

又四町うつ不 ちそと

本地さう

右田地へ、御上人様の御身躰（周巻）とるへく候、此上違亂申者有ましき物也、仍爲  
 後日證文如件、

天正拾年へむつまの三月吉日

本あ

〔佐藤文書〕

勢○伊

以上

天正十年雜載

三一三

慶光院所  
領本ナイ  
跡職



就勢州知行相違<sup>(伊賀)</sup>、於當國<sup>(伊賀)</sup>、知行不可有相違候、恐々謹言、

瀧川三郎兵衛友足

天正十

瀧川三郎兵衛尉

九月廿三日

友足(花押)

佐藤又三郎

佐藤又三郎殿

同入道殿

〔相州文書〕

堀内 高座郡 對助藏

其方事悔還被使候間、任望<sup>ニ</sup>於中郡恩名之郷貳拾貫文、當年從壬午年、爲給與出之候、掃部丞申斷可請取候、於西郡金子<sup>ニ</sup>地出置候、

悔還 恩名郷 給與

候、爲其證文<sup>ニ</sup>者也、仍如件、

壬午

印黑

八月廿七日

上總

堀内七郎衛門尉殿

〔關川文書〕

濃 〇 信

市田之郷菅衛門分出置所也、仍如件、

市田郷

天正十年

松岡頼貞

七月十二日

頼貞(花押) 〇 小笠原 貞慶 家臣

關川孫左衛門方へ

〔朱書〕 包紙附箋ニ、城主松岡家方書下ケ

〔宮下文書〕

野 〇 上

武藏嶋四貫九百文所、沼尻右膳亮自前請取候て心得候、

天正十年 壬午 九月十一日

宮下又左衛門へ

〔萩野文書〕

前 〇 陸

前々大藏屋敷近年手前<sup>仁</sup>指置候處<sup>ニ</sup>、侘言候間、其方<sup>ニ</sup>任置候、大藏立山木能茂候由及聞候、猶念を遣、竹木一本も不切取、可被立候事尤至極<sup>ニ</sup>候、用所之時節者可所望候、色々無届之子細候者、可召放候、猶給之儀も、其方存分<sup>ニ</sup>より、又以時節可申付候、此奏者相替候者可相違候、爲後日、以證文申出候者也、仍如件、

天正十年 壬午

奏者行與

五月四日

北條 氏勝(花押)

北條氏勝

山林保護 給



荻野主膳亮殿

奏者

給小代官

奏者行方與次郎殿

大藏給此度其方之出置候、著到以下無相違可走廻候、并小代官も如前々申付候、少も如左之儀有之者、給小代官共之可召上候、猶抽而奉公立も候者、彌可引立者也、仍如件、

天正十年 壬午

十月廿三日

氏勝(花押)

荻野主膳亮殿

〔國田文書〕

中越

其在所肝煎爲褒美、居住近所拾五俵令扶助畢、彌可抽馳走者也、

天正十

八月五日

利家(前田) (黒印)

菅原村

行長所

扶助

替地

宛遣知行

毛利輝元

鳴瀧名

吉川元長

同元春

同經安

同經實

〔萩藩閥録〕

十八 榎本織衛

長門國厚東郡須惠之内高井藤右衛門尉給替地之事、雖爲廿五石、依惡所、廿石之相極宛遣候、全令知行、可抽奉公狀如件、

天正拾年

七月廿四日

輝元 御判

榎本彈正忠殿

〔藤原吉川什書〕

大朝之内鳴瀧名參町貳段之儀、依爲由緒之地進置候、全御知行肝要候、仍一行如件、

天正十年九月三日

元長(花押)

元春(花押)

和泉守殿

龜壽丸殿

〔俊成文書〕

宛行

天正十年雜載



村上元吉

俊成分片口之儀申付畢任先例可有進退者也仍如件

天正十年十月廿三日

元吉(花押)

俊成左京進殿

〔松原文書〕

後○豐

爲海邊覺悟兩切寄取付候間別而馳走可爲祝著候然者於當郷中三段地加扶助候倍於粉骨之心懸者彌可賀之候之趣萱嶋美作守可申候恐々謹言

六月廿八日

親家(花押)

松原糺右衛門殿

切寄

田原親家

坪付

坪付

(田原親家)

(花押)

一所參段 以上 おませ狩宿之在之

以上

天正十年

九月廿日

壬生屋敷  
小作年貢  
判樹  
運上

〔京都帝國大學所藏文書〕

壬生文  
書二

松原久右衛門尉○久字前掲親家  
書狀糺ニ作ル

壬生御屋敷○官庫敷地四ヶ町之内田地貳段御一職之事來年中一作被仰付候者忝可存候然之於判樹四石之通立毛苅取次第に運上可致此旨可然樣御披露所仰候仍請狀如件

天正拾年十一月廿一日

宗重

壬生

田口彌四郎(花押)

御本所樣御奉行中

本所

多賀貞能  
隱居合力  
米隱居  
段事錢  
雜事錢

〔多賀道吉氏所藏文書〕

貞能御隱居分之事

上郷下郷段錢雜事錢

拾貫文

富尾段錢

五十貫文

西明寺反錢

百貫文

富尾宇治米

拾三石五斗

靈松庵并大陽寺領

拾九石貳斗

天正十年雜載

三一九



地頭職

八尾米

拾八石

上郷地頭職

七拾石 人足十人計有之

上郷市村分

參拾石

池寺十坊分

百石 中間十人計、人足十四五人有之

赤田方より買地分

拾壹石

買地分  
八重練沽  
却錢

八重練沽却錢

八貫文

一圓小林段錢

六貫文

金蓮坊分

九拾石 人足六七人有之

北安孫子之内兵衛大夫分

百石

合八百石者

高頭

天正十年

堀久太郎

八月廿一日

秀政(花押)

多賀正勝

多賀新左衛門尉殿 參

政勝(花押)

湯目地代  
官職

〔湯目文書〕

前〇陸

〔湯目地代〕  
ゆの目さつまか殿

やま口まこ兵へ

ゆの目地之事、九郎さへもんよろつふさと申候間、取そあしあさき候所を、  
まひ事申候て、そまうしもち申候、こくといの事ハ、あま所は候間、七たへら  
半こあつかり申候、末代ハ此分こあるましく候、御ちん候へ、夫の事ハま  
つ、月一もとよりは、まひ事申候、こま末代ハ候ましく候、こく  
いの事も、年のへより候て、うのきをきのことく、まひ事可申候、仍  
爲後日如件、

〔湯目地代〕  
ゆの目さつまか殿

天正十年三月廿七日 山口まこ兵へ

〔觀心寺文書〕

〔端裏書〕  
天正十年壬午十月廿四日

年預地藏院西之坊

收納米上日記

寺ノヒカへ

天正拾年壬午十月廿四日



山成河

反錢溝

荒

渡方

惣都合六拾三石七斗四升三合二夕之内

六斗三升壹合七夕、山成河成闕ニ引、

三斗五升、丁丑年ヨリ下いせ領ノ免ニ引、

三石壹斗四升三合二夕、反錢反別溝引、

七斗貳升四合四夕、己午ノ年ヨリ荒ニ引、

定殘五拾八石八斗九升三合九夕

渡し方

貳斗五升

御かりていへまいる、

拾八石

寺家御ほんそんへ參、

五斗

志ゆあふの下用

四斗六升

くらたけの下用

壹石

吉書の下用

壹斗四升

木きり七草の下用

貳石壹斗六升

志きしの下用

壹斗八升同潤月

十三ヶ月のふん

貳斗

石見川藥屋へ下行

四斗壹升

杉反米ニ渡ス、

八升

あしかる反別ニ渡ス、

四斗一升

同杉反米に依て出る、けんあん

八升

同あしかる反別ニ渡ス、けんあん

三斗

七郷うりの酒手、

以上貳十四石壹斗七升

殘而定米參十四石七斗二升三合九夕

落地之分

妙法院領

合拾石壹斗一升五合三夕之内

壹石四斗三升四合七夕 諸引

殘八石五斗六升六合四夕五才

東之坊分

合壹石七升五合

之内

落地



壹斗八升四合二夕

諸引

殘八斗九升八夕

堺地分

合壹石八斗

之內

壹斗五升三合六夕

諸引

殘壹石六斗四升六合四夕

山戶堂地分

合壹石九斗

之內

三斗六升六合四夕

諸引

殘壹石五斗三升三合六夕

道場地分

合六斗八升五合八夕

之內

壹斗四升一合二夕

諸引

殘五斗四升四合六夕

大日地分

合壹石

之內

四升八合

諸引

殘九斗五升二合

小河地分

合四石壹升六合

之內

三斗九升三合七夕

諸引

殘三石六斗二升二合三夕

以上拾七石七斗五升六合一夕五才

惣都合五十貳石四斗八升五夕

丹下方共

天正拾年十月廿四日

〔高野山文書〕

〔高野山文書〕四續寶簡集十六  
輛淵莊又續寶簡集十六  
輛淵莊又續寶簡集十六

輛淵莊大年貢納之事

四石五升、此内壹石ハ定使江渡申候、多しウニ請取申候、仍如件、

天正十年

公文衆參

十一月六日

遍照尊院(花押)



地頭職納  
所起請文

加地子  
定米

〔間藤系圖并文書〕

伊〇紀

持傳之古書寫

扱澤村地頭職之事

右粉河寺雖爲所持、願成寺御觀音に依被成買德候、扱澤百姓共納所之儀、毎年十月、霜月二度ニ結向ニ皆濟可申處、如在有間敷候、此納所者、如加地子、定米ニ少モ無沙汰申間敷候、爲其新起請文カキ令進上候、萬一於在背此旨輩者、敬白、

梵天帝尺四大天王、惣而熊野權現、王城鎮守、日本國中大小神祇、冥道、天頭日月、殊ニハ扱澤八王子藥師如來、別所十二所權現、御觀音、八幡大菩薩、九萬八千軍神、此御罰各可蒙者也、此世よてハ白癩黑癩之病身請ケ、來世よてハ無間三惡道之闇穴道へ墮落シ、ウカフコトナカルヘク候ト申上、仍起請文之狀如件、

天正十年壬午十二月十五日

上畑下畑百姓

追而堅申上候、如此納所速ニ仕候上者、御地頭方之儀も、不謂非例之儀、少モ於被懸仰事有コ者、此起請文之御罰御當リ可有候、仍後日狀如件、

村ノ惣行  
事

扱澤村

惣行 事(略押)

下畑 刑部(略押)

下畑助 衛門(略押)

上畑 刑部(略押)

同五郎 衛門(略押)

同惣 衛門(略押)

下畑 刑部左衛門(略押)

上源 太郎(略押)

下畑 權兵衛(花押)

上五郎 太郎(略押)

同中 尾(略押)

同平 内(略押)

下岩 谷(略押)

金枘  
ヲサメ枘

百姓衆依有ニ子細、如此米納所定置、

公事錢之分

伍貫十八メ米金ニ六石二升二合五夕定米、

米ヲサメノマスニ  
伍石壹斗金ノ枘ニ四石五斗九升定米、

大豆之分

壹斗九升九合九夕米金枘壹斗八升定米、

麥ノ納之分

九斗九升九合九夕米金枘四斗五升定米、

ハタノホリノ米金枘ニ伍斗定米、

美、枝之分金ニ三升納ル、

此地頭分半分ハ御觀音、半分ハ和合院宥秀東ノ助、天正十年壬午此年ヨリ



納ル、以上合金米十壹石七斗七升三合ヲ、此内米壹石四斗七升一合五夕八分一へノチにて、殘テ米觀音之納金鉞ニ、以上合十石三斗一合五夕、如加地子、十分ニモミ十三ノ米ヲサハクリニハカラセ可申候、少モノ、此旨後々未代マテモ、ソムク事アルマシク候、隨而兩門院年預ニテ、百姓衆十二人ノ御寺僧達取合人重禰藤内大夫、津ノ助、伏山孫七殿兩三人各々對談、一之日之珍物祝言被遊候、未代ノ證文ノタメ如此候、目出度候、々々、

間藤氏系圖

藤内大夫末弘、元和元乙卯四月十二日卒、法名宗慶信士、亂國以後、扱澤邑者、爲粉河寺之寺領、其以後扱澤邑從粉河寺、天正十壬午年末弘買得而、和合院致寄附處、扱澤百姓依不隨順和合院而、重禰政所、重禰藤内大夫、森本津之助、藤田孫七郎、願成寺衆徒中立合、扱澤百姓共委細之品申聞、致得心隨附和合院、其時扱澤上村下村百姓永代無違亂可納知行之起請文三通取、一通納觀音堂日記箱、一通納和合院、一通納末弘家、

〔志賀慎太郎氏所藏文書〕

後〇越

政所

棟別

賄

一棟別出米、家一間と三升は、とるへき事、

付、とまりく、よてまうあひいとし候、いゑをそ、一間よりさるへき事、

一まうなひ、一汁一さいとるへき事、

付、さけむよう候事、

一棟やく候間、侍地下之事者もちろん、寺庵社家、そのほりいうやうのいゑをも、日記こまるし申さるゑき事、

以上

右如定如件、

天正十年

九月十九日



直江(兼辨)

直江兼續

訴訟、判決、

〔言經卿記〕

三 四月七日、乙未、天晴、入夜下未、

一村井將監ヨリ使者有之、去々年已來大津者鹽ヲ東坊城支置之、然而此中切々將監ニ申處ニ、來十日ニ鹽籠可返之由被申越也、後刻將監へ使者遣了、先刻之鹽之儀祝著之由申、留守也了、

東坊城盛  
長大津鹽  
座ノ鹽ヲ



宇治路ニ  
坊城氏ニ  
テ坊城氏  
アリト申  
分

坊城氏ヨ  
リ鹽井將  
監ヨリ  
村井將監  
ヨリ  
將監ヨリ  
山科言經  
ニ山科言  
ス  
本所山鹽  
氏ヨリ山  
龍ヲ御大  
座供御大  
座返付ス

天正十年雜載

三三〇

十一日、己亥、天晴、  
一大津衆來、去八日ニ宇治路ニテ、坊城侍ト鹽申分事有之、乍去不替候、則村  
井將監、同又兵衛へ申遣了、無別儀了、  
廿三日、辛亥、天晴、

一坊城ヨリ昨日鹽并籠等村井將監マテ被返了、則將監ヨリ可相渡之由有  
之、則書狀相添、大津座人遣了、小者ニ持下了、  
就鹽賣買之儀、從坊城殿先年已來御違亂之條、以有様之旨、被仰理之處  
ニ、無御異儀候、則籠并鹽被返付候、然者只今從本所被持下候由、被仰出  
候也、仍狀如件、

小川善大夫

天正十  
四月廿三日

宗久判

鹽治新左衛門尉

實秀判

大津座 供御人中

五月廿日、丁丑、天晴、

伏見鹽座

一大津座人來、昨日伏見鹽座人、粟津者一人、大津者二人、鹽相取之由云々、來  
之申了、奉行衆へ可相届之由申、

廿三日、庚辰、天晴、

一大津衆來了、鹽公事之事申了、

廿六日、癸未、晴、下未、晚大雨、

一大津者來之間、村井又兵衛へ人ヲ遣了、所勞驗氣也云々、

〔葛山文書〕

河○駿

尙以、於佐代之儀、如前々可被仰付候、諸事如助六郎所務可有候、以上、  
辻坊職之儀付而、泉養坊ト被仰様候間、相方承候處ニ、貴所御存分之段、承届  
候間、彼辻坊相渡申候、自今日如前々諸事可被仰付候、長坊儀後、辻之坊分ニ  
候間、渡間敷由被仰候得共、我等扱申、泉養坊ト渡申候、其方ニ於無沙汰、如前  
々可被取歸候、爲後日手形進之候、仍如件、

壬午(天正十年カ)

井出甚助

五月廿四日

正次(花押)

葛山與兵衛尉殿

天正十年雜載

三三一

井出正次

駿河辻坊  
職ノ訴訟



〔伊勢古文書集〕

多氣御所御裁判書

以上

其方與上大夫、肥前國道志紛之儀、被爲批判候、其方被申様尤候間、任理運、彼國道志之儀、如前々被仰付候條、無相違可爲檀那候、恐々謹言、

天正十

二月十七日

- 松 庵 名乘判
- 有 樂 齋 名乘判
- 水谷 幡 庵 名乘判
- 城戸内藏 佐 名乘判
- 笠井宗右兵衛 衛 名乘判
- 廣將越中 守 名乘判
- 林備後 守 名乘判

山田

橋村殿

賣買、讓與、寄進、貸借、算用、物價等、

〔言經卿記〕

三 九月十六日、辛未、天晴、

宅地賣買

一 上藤御局ヨリ後苑地御所望、進了、銀一石分給了、南北十一間也、其分東西  
へ一間々半、南五間、北六間、又東西間半、北六間、南六間、進了、

〔多聞院日記〕

○二和 二月二日、

錢ト米ト  
錢ト  
和市

一 大門ノ御新造ノ屋敷ノ地子辰年分一貫三百文、代米二石六斗ヲ、ヒタ三  
貫二百五十文被遣了、八斗ツ、ノ和市也、

五日、

金ト米

一 大乘院へ長印房ノ口入ノ金子半枚ノ代廿五石、并スワ一斗、フキ一斗、判  
一斗、合廿五石三斗渡濟了、金子ハ長印房三匁ソへテ渡之、則借書ニ裏付

沙汰之、

十五日、

米ト鹽

一 鹽以上三駄買了、米一升ニシヲ二升一合ツ、也、

三月廿五日、

筒井市

一 筒井市へ彌三下、買物調、さのミヤ、あくもあし、  
一 シヲ米一升ニ二升五合ツ、可賣ノ通申來、今ノ様ニ安事ハ不覺、先日三  
石、二升一合ツ、買了、一段安ト思シ、過分ノ損也、



利子

卯月六日、  
一御牧南之介ニテ、金子廿二文目、長印坊口入ニテ一匁クワエニシテ、大乘院殿へ御借用也、我等預り分こして、預り狀下、則來了、  
廿四日、

銀ト米

一從源五郎銀一枚代五石二斗ニ買了、米渡候了、  
十一月六日、

扇ト米

一明日藤五郎禰宜宇多へ下由申間、如例小サウリ一足、遣之、并庄屋心ナル者へ扇遣可然候由申間、雖非嘉例、任定使申ニ、八合ツ、ノ扇二本遣之、六升サウリ、二升サイマンチウ、一升六合扇二本、合九升六合入了、  
廿四日、

金ト米

一借金爲返辨半枚、五十五石ノ通ニシ、與二郎ヨリ來、  
十二月四日、

利子

一長印房口入大乘院殿へ借金半枚二匁加高利之間、先買之本利卅二匁返辨、則借書來了、此代四十石四斗六升也、峰寺龍門錢ニテ可取之、

〔家忠日記〕

二 五月九日、寅、丙脇サシノのし付出來候、小久田彦左衛門金二

脇指慰斗  
付代

兩二分、但うちさめ、まといめ、そよきのそき候て、うとくハシヤクトウ也、  
廿三日、庚辰こしらへ候のしつけ出候、金五兩壹分、大りとありとくハシヤクトウ也、

田地作職  
賣券

〔京都帝國大學所藏文書〕

大德寺黃梅院文書甲

永代賣渡申田地作職之事、

合半者字ハキタノクテ、東ハ地類ヲ限ル、西ハアセヲカキル、南ハ地類ヲカキル、北ハクイヲカキル也、

本所  
諸公事役  
ハナシ

右件之田地作職者、雖爲先祖相傳之買得、仍有要用、直米五石に今澤宗俊の賣渡申處、實正明白也、本券紛失候間、以後出候共、可爲反古候、但本所者社役の四月參百五十文、衛門丞出之也、此外諸公事役無之候、若就此田地、違亂煩申輩候ハ、賣主請人罷出テ明可申者也、仍永代之賣券狀如件、

賣主北尾衛門丞

天正拾年霜月五日

請人北尾

重(花押)

太郎左衛門尉(略押)

請人

賣主



